

# 阿波土居跡

銘建工業本社工場エコ発電所 2号機  
建設工事に伴う発掘調査

2021

真庭市教育委員会





1 遺跡遠景(南東から)



2 城館遺構検出状況(南から)

巻頭図版 2



1 溝5石積み(西から)



2 嵐前焼壺(掲載番号3)

# 序

真庭市は、岡山県北部で中国山地のほぼ中央に位置します。森林が面積の8割を占めしており、古来より林業・木材産業が盛んな土地として知られています。さらに、現在は林業や木材製材の過程で生じる端材やかんな屑などの副産物を利用した木質バイオマスの取り組みが全国的にも注目を集めています。この度、真庭市勝山に所在する銘建工業株式会社本社工場地内における木質バイオマスを利用した発電所の建設に先立って、周知の埋蔵文化財包蔵地である阿波土居跡の発掘調査を実施し、本書はその調査の成果を取りまとめたものになります。

今回の調査では、15世紀から16世紀にかけての中世城館である阿波土居跡の屋敷地を発掘調査いたしました。城館の残りも良く、建物跡や屋敷地を区画するための石積みを伴う溝、貿易陶磁や希少な茶道具を含む様々な遺物が見つかっており、旭川中流域における中世城館の様相を知る上で欠かすことができないであろう、多くの貴重な成果を得ることが出来ました。

今回の調査成果を収めた本書も、真庭市の歴史のさらなる解明や埋蔵文化財の保護・活用のため、広く活用されることを願う次第であります。また、地域内での利用にとどまらず、学術研究の一助として、研究者の皆様にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査および本書の作成に際しましては、岡山県古代吉備文化財センター、銘建工業株式会社をはじめとする関係機関ならびに地元の皆様から多大なるご指導とご助力を賜りました。記して厚くお礼申し上げる次第であります。

令和3年（2021年）3月

真庭市教育委員会

教育長 三ツ宗 宏



## 例　言

- 1 本書は、真庭市教育委員会が銘建工業株式会社の委託を受け実施した、阿波土居跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した阿波土居跡は、岡山県真庭市勝山 1190 番地ほかに所在する。
- 3 確認調査は、国庫補助事業として、隣接する牧土居跡と併せて、平成 30 年度に真庭市教育委員会生涯学習課職員新谷俊典が担当し、実施した。調査期間は、平成 30 年 4 月 18 日～5 月 22 日、調査面積は 64m<sup>2</sup>（阿波土居跡 44m<sup>2</sup>、牧土居跡 20m<sup>2</sup>）である。本発掘調査は、令和元年度に真庭市教育委員会生涯学習課職員坂田 崇・新谷俊典・中尾秀正が担当し、岡山県古代吉備文化財センター調査第三課職員岡本泰典氏による技術指導を受けた。調査期間は、令和元年 10 月 1 日～令和 2 年 1 月 22 日で、調査面積は 1,400m<sup>2</sup>である。
- 4 発掘調査は、銘建工業株式会社の本社工場エコ発電所 2 号機建設工事に伴う事前調査で、発掘調査から報告書刊行に至る経費は同社が支弁した。
- 5 本書の作成は、令和 2 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日にかけて新谷・坂田が担当し、実施した。
- 6 本書の執筆は、第 3 章第 1 節及び第 2 節第 1 項から第 5 項を坂田が、第 2 章第 2 節を生涯学習課職員森 俊弘が行い、その他の執筆、全体の編集は新谷が担当した。
- 7 本調査に関わるすべての遺物・記録資料類は、真庭市教育委員会（岡山県真庭市久世 2927 番地 2）に保管されている。また、これらの活用及び本調査において作成された資料の著作権の管理は真庭市教育委員会がある。
- 8 調査ならびに本書の作成にあたっては、下記の諸氏、諸機関から多大なご指導ご協力、文献の提供等を賜った。記して厚くお礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

池上 博 上裕 武 大橋雅也 岡本泰典 河合 忍 切明友子 佐藤亞聖 重根弘和  
柴田英樹 島崎 東 白石 純 富井 滉 仁木康治 西田和浩 乗岡 実 橋口英行  
平井泰明 平岡正宏 弘田和司 三浦孝章 宮崎絢子 向井重明 山本宗昭 行田裕美  
岡山県教育庁文化財課 岡山県古代吉備文化財センター 公益財団法人元興寺文化財研究所  
津山弥生の里文化財センター フジテクノ有限会社 真庭市勝山振興局 銘建工業株式会社

## 凡　例

- 1 本書で使用した北方位は、平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北である。また、調査区の座標系の設定及び抄録に記載したグリッド値・経緯度は世界測地系による。
- 2 本書に用いた高度値は、標高である。ただし、第2・3図に示した高さは現地表からの比高である。
- 3 本書に掲載した遺構及び遺物の縮尺は、下記の縮尺であるが、例外については個々に記載した。  
遺構　掘立柱建物・柱穴列：1/80　土壙：1/30・1/60　溝：1/40・1/80・1/150  
土器だまり：1/20  
遺物　土器・陶磁器類：1/4・1/8　土製品：1/3　石器・石製品：1/3・1/4  
金属製品：1/2・1/3
- 4 本書の遺構配置図において遺構名を省略する際は、次に示すものを用いている。  
掘立柱建物：建物
- 5 遺構番号については、全体にわたり遺構の種類ごとに通し番号を付している。
- 6 遺物の掲載番号については、遺物の種別ごとに通し番号をつけ、土器・陶磁器類以外については次の略号を番号の前に付している。  
土製品：C　石器・石製品：S　金属製品：M
- 7 土器実測図の中軸の両側に白抜きのあるものは、小破片のため径の復元に不確実性があることを示す。また、小片の土器は、配置が不確実なものがある。
- 8 土層断面及び遺物の色調は、「新版標準土色帖(1988年度版)」に準拠している。
- 9 本書の第5図に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図の「勝山」を複製・加筆したものである。
- 10 本書で用いた遺物の分類及び年代観は、基本的に下記の各論文及び報告書を参考にした。

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年  
新田和央「広城展開した瓦器－奈良火鉢・風炉について－」『中近世陶磁器の考古学』7 雄山閣 2017年  
乗岡 実「戦国時代の備前焼編年－編年と器種分化－」『東洋陶磁』46 2017年  
藤澤良祐「瀬戸窯跡群」「日本の遺跡」5 同成社 2005年  
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 1982年  
水澤幸一「15～16世紀の青磁碗」「中近世陶磁器の考古学」9 雄山閣 2018年  
森田 勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2 1982年  
小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究」2 1982年  
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城 靖・安座間充・松原哲志「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－」『紀要沖縄埋文研究』5 2007年  
太宰府市教育委員会編「太宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－」「太宰府市の文化財」49 2000年

# 目 次

## 卷頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査及び報告書作成の経過	1
第3節 発掘調査及び報告書作成の体制	4
第4節 日誌抄	4
第2章 地理的・歴史的環境	5
第1節 周辺の地理的・歴史的環境	5
第2節 文献史料からみた阿波土居	7
第3章 発掘調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 中世の遺物と遺構	14
第3節 古代以前の遺構と遺物	45
第4章 まとめ	50
遺物観察表	57

図版

報告書抄録

## 卷頭図版目次

卷頭図版 1  
1 道跡遠景(南東から)  
2 城館遺構検出状況(南から)

卷頭図版 2  
1 溝5石積み(西から)  
2 備前焼窯(掲載番号3)

## 図 目 次

第 1 図 調査地の位置 (1/4,000) .....	2
第 2 図 阿波土居 T1 土層断面 (1/80) .....	2
第 3 図 牧土居 T1 土層断面 (1/80) .....	2
第 4 図 確認調査出土遺物 (1/4・1/6) .....	3
第 5 図 道路の位置及び調査地周辺の地形と道路 分布 (1/25,000) .....	6
第 6 図 阿波土居跡周辺の地名 (1/15,000) .....	10
第 7 図 調査区遺構配置図 (1/400) .....	11
第 8 図 調査区土層断面 (1/120) .....	12
第 9 図 掘立柱建物 1 (1/80) .....	14
第 10 国 掘立柱建物 2 (1/80) .....	15
第 11 国 掘立柱建物 3 (1/80) .....	15
第 12 国 柱穴列 (1/80) .....	16
第 13 国 土壌 1 (1/30) .....	17
第 14 国 土壌 2 (1/30) .....	18
第 15 国 土壌 3 (1/30) .....	18
第 16 国 土壌 4 (1/60) .....	19
第 17 国 土壌 5 (1/30) .....	19
第 18 国 土壌 6 (1/60) .....	19
第 19 国 土壌 7 (1/30) .....	20
第 20 国 土壌 8 (1/30) .....	20
第 21 国 溝 1～3 (1/80・1/40) .....	21
第 22 国 溝 4 (1/40) .....	22
第 23 国 溝 5 平立面 (1/150) .....	23
第 24 国 溝 5 断面 (1/30) .....	24
第 25 国 土器だまり (1/20) .....	25
第 26 国 複数道構出土遺物① (1/4・1/8) .....	27
第 27 国 複数道構出土遺物② (1/8) .....	28
第 28 国 複数道構出土遺物③ (1/4) .....	29
第 29 国 掘立柱建物 1～3・柱穴列出土遺物 (1/4) ..	31
第 30 国 土壌 1～5 出土遺物 (1/4) .....	32
第 31 国 土壌 6～8 出土遺物 (1/4) .....	33
第 32 国 溝 2・3・5 出土遺物 (1/4) .....	35
第 33 国 土器だまり出土遺物① (1/4) .....	36
第 34 国 土器だまり出土遺物② (1/4) .....	37
第 35 国 道構に伴わない遺物① (1/4) .....	38
第 36 国 道構に伴わない遺物② (1/4) .....	39
第 37 国 道構に伴わない遺物③ (1/4) .....	40
第 38 国 道構に伴わない遺物④ (1/4) .....	41
第 39 国 道構に伴わない遺物⑤ (1/4) .....	42
第 40 国 出土土製品 (1/3) .....	43
第 41 国 出土石器・石製品 (1/3・1/4) .....	44
第 42 国 出土金屬製品 (1/3・1/2) .....	44
第 43 国 弥生時代道構配置図 (1/800) .....	45
第 44 国 土壌 9 (1/60) .....	45
第 45 国 土壌 9 出土遺物① (1/4) .....	46
第 46 国 土壌 9 出土遺物② (1/4) .....	47
第 47 国 道構に伴わない遺物 (1/4) .....	49
第 48 国 城館範囲と道構配置 (1/800) .....	50
第 49 国 城館出土土師器皿の法量 .....	53
第 50 国 各地における乳足の瓦質風炉 (1/10) .....	55

## 図 版 目 次

図版 1	1 調査区全貌
図版 2	1 掘立柱建物 2 P3・P4 (北から) 2 掘立柱建物 3 (東から)
	3 1 区調査状況 (南西から)
図版 3	1 土壌 1 確除去前 (南から) 2 土壌 1 (南から) 3 土壌 2 (東から)
図版 4	1 土壌 3 (北から) 2 土壌 6 (南西から) 3 現地説明会
図版 5	1 溝 1・3 (南東から) 2 溝 1・3 断面 (北から) 3 溝 1・2・3 (北から)
図版 6	1 溝 5 (南から) 2 溝 5 (南東から) 3 溝 5 (南西から)
図版 7	1 溝 5 西端石積み検出状況 (南東から) 2 溝 5 東端断面 (西から) 3 溝 5 石積み除去後 (東から)

図版 8	1 土器だまり (北から) 2 土器だまり備前焼出土状況 (南から)
	3 土壌 9 (西から)
図版 9	1 土師器 (回転台成形) 2 土師器 (手づくね成形)
図版 10	1 土師器 (手づくね成形) 2 瓦質土器
図版 11	1 備前焼
図版 12	1 青磁 2 白磁 3 青花
図版 13	1 漢戸美濃・その他陶磁器 2 土製品
	3 石器・石製品 4 金屬製品
図版 14	1 弥生土器・須恵器

## 表 目 次

第 1 表 文化財保護法に基づく文書一覧 .....	4
第 2 表 道構出土遺物の年代観 .....	51
第 3 表 貿易陶磁等の組成 .....	54

# 第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

真庭市は面積の8割を森林が占め、古くから林業の盛んな土地であり、現在も西日本有数の木材集散地である。加えて、その資源を生かした「木質バイオマス利活用」の取り組みが全国的に注目を集めている。銘建工業株式会社（以下、「銘建工業」と呼ぶ。）は、大正12(1923)年に勝山地区で製材所として創業し、現在は国内トップシェアを誇る構造用集成材・CLTのメーカーである。同社は木質バイオマスの利活用に先導的に取り組んできたことでも知られており、平成10(1998)年に本社工場内にエコ発電所（1,950kW）を完成し、木材製品の生産過程で生じる端材やかんな屑等を燃料として発電し電力利用してきた。

銘建工業では、本社工場地内における5,000kWのエコ発電所2号機（以下、「新発電所」と呼ぶ。）の建設及び本社工場隣接地における新本社建築をかねてより計画し準備を進めていた。平成30(2018)年2月に入り、計画地での地盤調査に際し、真庭市教育委員会（以下、「市教委」と呼ぶ。）に対し埋蔵文化財包蔵地の照会があり、市教委が確認したところ、計画地内に岡山県教育委員会（以下、「県教委」と呼ぶ。）が実施した平成28年度中世城館跡総合調査において新たに確認された城館跡2遺跡（新発電所：阿波土居跡、新本社：牧土居跡）が含まれることが判明した。

そこで市教委では、県教委にも相談のうえ、銘建工業に対して計画地内における遺跡の存在や埋蔵文化財保護制度について説明を行い、両者で対応を協議した。その結果、計画地内における埋蔵文化財の包蔵状況を確認し、今後の協議資料を得ることを目的に、銘建工業からの依頼に応じ、市教委が速やかに確認調査を実施することとなった。

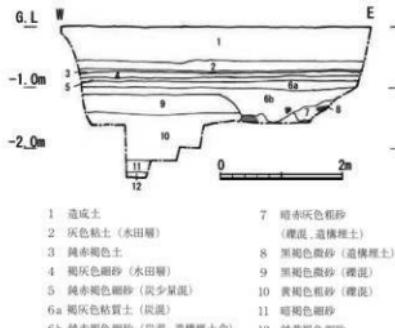
## 第2節 発掘調査及び報告書作成の経過

阿波土居跡及び牧土居跡は、文献史料及び地名に基づく推定地であったため、既存の航空写真、地図等を照合し、まず遺跡範囲の絞込みを行った。その結果、阿波土居跡はおかやま全県統合型GISで示される範囲よりやや北東、牧土居跡はGISどおりの範囲となることが判明した（第1図）。

そこで、阿波土居跡では計画地内のうち工場の操業に影響が少ない場所を選び、トレンチを5ヶ所、牧土居跡では計画地内にトレンチを1ヶ所設定し、確認調査を実施した。確認調査は平成30年4月18日から5月22日にかけて、予算の都合もあり、真庭市職員のみで実施した。阿波土居跡では、新発電所建設予定地は、北側のタービン棟建設予定地と南側のボイラ棟建設予定地に分かれしており、北区画にT1～T4、南区画にT5を設け調査した。調査の結果、T1で堀の可能性も有る溝を、T4で複数の柱穴を検出し、全てのトレンチで遺物が出土した。出土遺物は、15世紀末から



第1図 調査地の位置 (1/4,000)

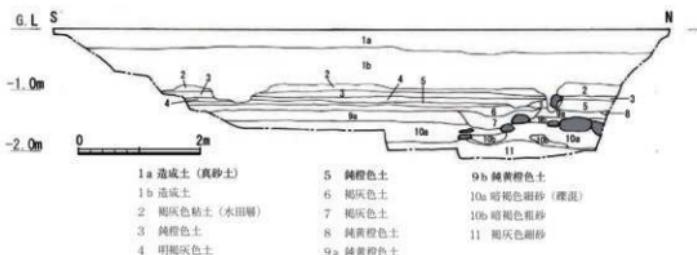


第2図 阿波土居 T1 土層断面 (1/80)

16世紀前半とみられる青花碗(第4図T1)や中世前半の白磁碗(同T3)をはじめとする貿易陶磁、被熱した瀬戸美濃の天目碗(同T4)のほか、備前焼、土師器、鉄釘等中世の遺物と古代の須恵器甕片等が出土した。

牧土居の調査では、陶磁器類及び須恵器、弥生土器が少量出土した。特に落込み(第3図7層)から、7世紀末とみられるほぼ完形の須恵器杯身と長頸壺(第4図牧)が出土し、状態の良さから古代の遺構の存在を考えたが、取上げ時に長頸壺の下から17世紀代と思われる唐津焼の小片が出土したため、須恵器は後世の混入と判断した。

以上のとおり、阿波土居跡の確認調査では、文献史料や地名からの推定による中世城館の存在を裏付ける結果となつた。調査後の協議で、新発電所の計画変更は困難な状況であり、やむを得ず建設工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について、記録保存のため発掘調査を実施することとなつた。



第3図 牧土居 T1 土層断面 (1/80)

一方、牧土居跡の調査では、中世城館を裏付ける遺構や遺物ではなく、他に明確な遺構も検出されなかつたため、建物建設工事に伴い掘削を行う範囲について、工事立会の措置を講ずることとなった。

統いて、市教委と銘建工業では阿波土居跡発掘調査の実施スケジュールや調査体制について協議したが、市教委では銘建工業から提示された発掘調査が可能な期間中に調査を完了するためには調査体制の充実が不可欠と判断し、調査経験のある市職員を確保したが、まだ調査体制としては不十分な状況であった。そこで、平成30年8月に県教委に対して発掘調査への協力を要望したところ、市町村指導として、調査中に岡山県古代吉備文化財センター職員1名による技術指導を受けることとなった。

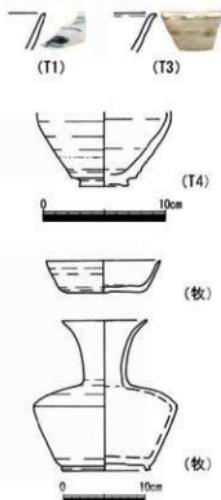
その後も市教委と銘建工業の間で協議と調整を重ね、最終的に新発電所建設工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ面積1,400m<sup>2</sup>の範囲を対象とし、令和元（2019）年10月から令和2（2020）年1月にかけて発掘調査を実施することで合意に至り、令和元年7月1日付けで、銘建工業代表取締役

中島浩一郎と真庭市長 太田 昇との間で阿波土居跡の発掘調査に関する委託契約を締結した。

発掘調査は、9月下旬に中世包含層上位にある造成土や近現代水田層を重機で掘削し、10月1日から調査員・作業員による人力での調査を開始した。冬季の降雪による中断等もなく、予定どおり令和2年1月22日に全ての調査を終えることができた。期間中、調査成果の公開のため市民等を対象とした発掘調査現地説明会を、令和2年1月5日に開催し、約100名もの見学者があった。

報告書の作成は、令和2年度に生涯学習課職員2名が行い、遺物の復元、実測及び写真撮影と平行し、遺構及び遺物の浄書を進めた。なお、備前焼甕1個体についてはフジテクノ有限会社に業務委託し、復元及び実測を行った。また、発掘調査を指導していただいた岡本泰典氏（岡山県古代吉備文化財センター）には、引き続き指導助言や文献提供など多方面での協力を賜った。

調査事業の期間中には、多くの専門家から指導助言を受けた。特に中世の土器・陶磁器類については、乗岡 実氏（丸亀市教育委員会）、重根弘和氏（岡山県立博物館）、樋口英行氏（高梁市教育委員会）、弥生土器については、河合 忍氏（岡山県教育委員会）に鑑定等依頼し、多くの知見をご教示賜った。また、平岡正宏氏（津市産業観光部）には発掘調査から報告書作成を通じ指導助言を終始いただき、津山弥生の里文化財センターには、遺物復元の技術指導や写真撮影機材借用の援助を受けた。記して深く感謝申し上げる。



第4図 確認調査出土遺物  
(1/4・1/6)

## 第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

番号	文書番号 日付	提出書類	届出者
1	真教生第 55 号 H30. 6. 8	埋蔵文化財試掘・確認調査報告（法第 99 条）	真庭市教育委員会教育長
2	H31. 3. 13	埋蔵文化財発見通知（法第 100 条第 2 項）	真庭市教育委員会教育長
3	H31. 3. 28	埋蔵文化財発掘の届出（牧土居跡）（法第 93 条）	鉄建工業株式会社 代表取締役
4	R1. 7. 19	埋蔵文化財発掘の届出（阿波土居跡）（法第 93 条）	鉄建工業株式会社 代表取締役
5	真教生第 266 号 R1. 10. 8	埋蔵文化財発掘調査の報告（法第 99 条）	真庭市教育委員会教育長
6	R2. 1. 27	埋蔵文化財発見通知（法第 100 条第 2 項）	真庭市教育委員会教育長

第1表 文化財保護法に基づく文書一覧

## 第3節 発掘調査及び報告書作成の体制

令和元年度（2019 年度）

真庭市教育委員会

教育長 三ツ 宗宏

教育次長 綱島 直彦

生涯学習課

課長 佐山 宣夫

参事 森 俊弘

主幹 坂田 崇

（調査主担当）

主幹 新谷 俊典

（調査副担当・事務担当）

埋蔵文化財専門員 中尾秀正（調査補助）

岡山県古代吉備文化財センター

調査第三課

副参事 岡本 泰典（市町村指導）

令和2年度（2020 年度）

真庭市教育委員会

教育長 三ツ 宗宏

教育次長 赤田 憲昭

生涯学習課

課長 佐山 宣夫

参事 森 俊弘

主幹 坂田 崇

（整理副担当）

主幹 新谷 俊典

（整理主担当・事務担当）



調査参加者

発掘調査作業員 大田 利昭 岡田 敦子

小椋美智子 梶原 広太 梶原真由美

河内 寛恵 木村 弘則 古南 元秀

古南 洋一 柴田 幸一 白石 真雄

瀬尾 和代 批杷木弘子 福島 進

森山 松生 山田 久生 山本 年夫

福岡 秀之 藤本 雅司 丸山 元治

整理作業員 岡田 敦子

## 第4節 日誌抄

令和元年度（2019 年度）

令和元年 10 月 1 日 1・2 区調査開始

令和元年 11 月 28 日 白石 純氏（市文化財保護審議会委員）現地指導

令和 2 年 1 月 5 日 現地説明会開催

令和 2 年 1 月 21 日 2 区調査終了

令和 2 年 1 月 22 日 発掘調査終了

令和2年度（2020 年度）

令和 2 年 4 月 1 日 報告書整理作業開始

令和 3 年 3 月 31 日 報告書整理作業終了

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 周辺の地理的・歴史的環境

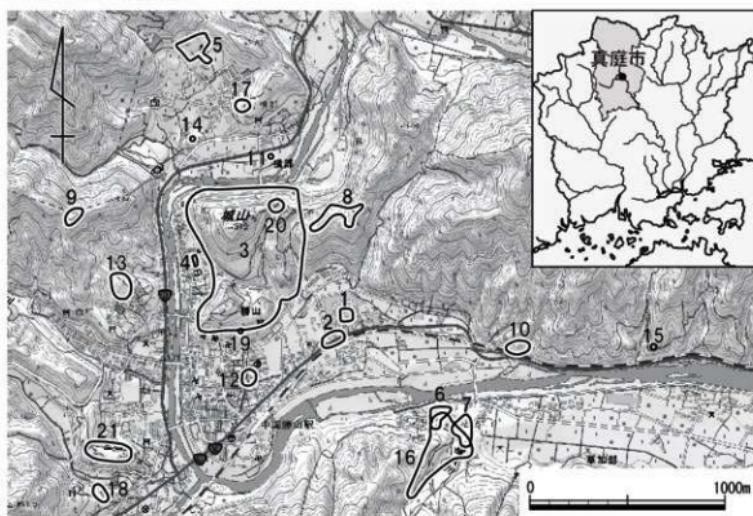
阿波土居跡は、岡山県真庭市勝山に所在し、旭川左岸の狭小な沖積低地に築かれた中世城館跡である。真庭市は、岡山県の北部で旧美作国北西部に位置し、828km<sup>2</sup>と県下最大の面積を誇る自治体である。市の中部域にあたる勝山地域は、中国山地と吉備高原の境界地帯であり、山林が面積の約85%を占め、山間を流れる旭川とその支流である新庄川、月田川に沿って小規模盆地が点在する。

勝山地区もそれら盆地の1つであるが、旭川とその支流である新庄川が合流する場所にあたり、東西に貫通する出雲街道と旭川を利用した水運の結節点として古くから重要な地位を占めてきた。蒜山高原を源流とし南下した旭川は、勝山地区で東に向きを変え、久世、落合へと繋がっていき、ここから下流には沖積地が形成されるようになる。阿波土居跡の所在する場所もその1つで、遺跡の標高は約163.5mを測る。周辺より0.5mから1.0m程高い位置にあり、旧地形をみると遺跡の北側にも河川痕跡を確認でき、河川堆積物による微高地だったと思われる。

勝山地域に残された遺跡は100ヶ所を数える。先人の足跡は、縄文時代まで遡り、勝山高校遺跡で磨消繩文を施した後期の土器が1点出土しているほか、且地区で縄文時代前期の刺突文を施した土器が出土している。弥生時代になると遺跡数が増加し、岡椎の木遺跡では、前期の壺型土器が出土し、確認調査により後期の堅穴住居が検出されている<sup>(1)</sup>。古墳時代には17基の古墳が確認されているが、小規模な円墳や方墳が単独で築かれるものが大半である。そのうち小山古墳は、径15mの円墳で全長6.6mの横穴式石室を主体部とし、市の史跡に指定されている。

古代になると、和銅3(713)年に備前国から6郡を割き、美作国が成立する。勝山地域は、真島郡高田郷、月田郷、井原郷と大庭郡久世郷の一部にあたり、勝山地区は高田郷の中心であったと考えられる。『三代実録』貞觀19(877)年2月乙未条に記載がある、都へ献上する銅を探掘した「美作国真島郡加夫良和利山」は、三田のかぶら山あるいは久世地域との境に位置する金山谷と推定されている。また、城山では奈良時代の須恵器が散布する城山窯跡群も確認されており<sup>(2)</sup>、当地における農業以外の生産活動を物語る。平安時代には郡内に荘園が置かれ、高田郷は高田庄となるが、中世前半の様相には不明な点が多い。

鎌倉時代末には、永源寺開山・寂室元光(1290~1367)を輩出するが、その生誕地とされる龍源寺は、現在阿波土居跡西方に石碑が建つか、遺跡北側の山裾にも「龍眼寺」という地名が残る。また、寂室の産湯とされる井戸が水亂を越えた西方に存在する。寂室の生家についてはよく分かっていないが、父または母の実家が高田庄の荘官あるいは地頭で、寂室はその子弟であり、この付近が「有力者の館や寺院、市場などの集まる、美作西部地域における主要拠点のひとつであった」



1 阿波土居跡 2 牧土居跡 3 高田城 4 高田城三の丸遺跡 5 舟津屋敷跡 6 梶原屋敷跡  
7 殿土井跡 8 天神山古跡 9 陣山古跡 10 宝泉寺跡 11 伝先三浦氏墓地 12 勝山高校遺跡  
13 陣山遺跡 14 小山古墳 15 金山谷古墳 16 寿和古墳群 17 組遺跡 18 高応神社東遺跡  
19 化生寺東遺跡 20 城山窯跡群 21 かぶら山

第5図 遺跡の位置及び調査地周辺の地形と遺跡分布 (1/25,000)

と森後弘はみなしている<sup>(3)</sup>。

室町時代には、高田城を本拠とした国人高田三浦氏（以下「三浦氏」と呼ぶ。）が南北朝期の三浦貞宗（道祐）以降しばらくの空白を経て、15世紀末以降には旭川中南部域を支配領域として確立する。以降、三浦氏は、尼子氏や毛利氏、浦上氏など大勢力の狭間で、天正3(1575)年の高田城退城まで数代にわたり没落と再興を繰り返し、高田城周辺には攻防に関連する屋敷、砦など城館が残る<sup>(4)</sup>。その1つである、高田城（城山）の南西麓に位置する高田城三の丸遺跡は、平成15(2003)-16(2004)年に勝山町教育委員会による発掘調査が行われている。15世紀後半から17世紀初頭にかけて4時期に分かれる、建物跡や戸井戸等の遺構や貿易陶磁をはじめとする遺物が確認され、三浦氏もしくはその家臣の館の一部であったと推定されている<sup>(5)</sup>。

近世の勝山地域は、宇喜多氏・小早川氏の支配を経て、慶長8(1603)年森氏が入部し、元禄11年(1698)の森氏改易後は幕府領となる。支配者は替わるが、勝山地区は出雲街道の宿場、また旭川流域における高瀬舟運の発着点として賑わう。そして明和元(1764)年に、三河国西尾藩から三浦明次が2万3千石の領主として入部する。明次は、高田城を勝山、城下にあたる高田村の町分を勝山と改めて、勝山城西麓に御殿などを整備する。以後、10代100年余り存続し、明治に至る。

## 註

- (1) 岡山県教育委員会編 1994『岡椎の木道跡』『岡山県埋蔵文化財調査報告』24
  - (2) 勝山町史編集委員会 1974『勝山町史 前編』勝山町
  - (3) 森 俊弘 2008『「寂室元光」生誕の地、高田庄』『国説新見・高梁・真庭の歴史』郷土出版社
  - (4) 詳細は、下記文献を参照されたい。
- 森 俊弘 2015『文献史料で見る高田城と城主の推移』『真庭市指定史跡 高田城総合調査報告書』真庭市教育委員会  
岡山県古代吉備文化財センター編 2020『岡山県中世城跡総合調査報告書』
- (5) 橋本悠司編 2005『高田城三の丸遺跡』勝山町教育委員会

## 第2節 文献史料からみた阿波土居

### 1 阿波土居前史－その歴史・地理的環境－

今回発掘調査が行われた「阿波土居」跡について、主に文献史料からのアプローチによって、地域の歴史上への位置付けを試みる。

まず、阿波土居跡について直接言及する文献史料として、津山藩の官撰地誌である江村宗普『作陽誌』（元禄4〔1691〕年跋文）があり、「勝山東、有牧土居・阿波土居者、皆古人姓名而、其宅地也」と記す。すなわち、①勝山（現在の太鼓山）の東に「牧土居」・「阿波土居」がある、②牧・阿波ともに古人の「姓名」で、その宅地である、以上の事柄が知られる。双方の土居ともに、現在も真庭市勝山に、「槇ノ土居」・「栗ノ堀」・「栗ノ土手」の小字などが残る（第6図）。

この阿波土居が所在する真島郡高田庄は、国内の別の高田庄と区別して、西高田庄と呼ばれていた。真島郡及び高田庄域が旭川西岸にあるなか、「高田」のみが高田川（現旭川）を越えた東岸に位置している。例外的に河川越えた郡境の生じた事情については明らかではないが、9世紀末の時点で既に、真島郡域に属していたらしいことは、「三代実録」貞觀19(877)年閏2月乙未条の記事が参考になる。すなわち同年、美作国の「真島郡加夫良和利山」などから採掘した銅が進上されたとあり、加夫良和利山については、高田村の西にある「蕉坂」の地名と付近の「古壙」の存在をもって比定する説が既に元禄期に行われている（『作陽誌』）。比定地には現在も「山谷」の小字地名が残り、明治初年にも銅鉱が開坑している。さらに、近隣の江川村の「鉄山」、本郷の「金ナ山」（名草銅山）、柴原などにも銅鉱があり、黄銅鉱等が採掘されるなど、規模はともかく庄内では銅の採掘が可能であった（『岡山県統計書』『採掘特許一覧表』『特許採掘一覧』など）。

その後、文和3（1354）年の文書に、三浦貞宗（下野入道）という人物の所領として高田庄「甘波村並安名」（真庭市神庭）が見え、これが同氏と高田庄との関係を示す初見史料となる（吸江寺文書）。ただし貞宗は、中央で活躍しており、高田庄もあくまで諸国に散在する所領のひとつであった可能性が高い。なお、同庄における三浦氏の拠点については、庄内の横部（真庭市横部）が有力であり、同地には同庄東分の氏神・横部神社が鎮座し、貞宗・兼連父子の墓碑とされる宝筐印塔も所在する（『作陽誌』）。その後、15世紀後半になってようやく、戦国期三浦氏の確実な祖・三浦貞

連（駿河守。？～1509？）が登場する。貞連は、室町幕府奉公衆として將軍に仕え、京都において美作国内御料所の代官職を要望するなどの活動が知られている（各種御番帳、「陰涼軒日録」）。また、貞連は、三浦氏の居城・高田城の最初の城主と認識される人物である（「高田城主次第」）。あるいは貞連の代に、戦国時代への突入を背景に、より戦略性の高い地点へと進出、拠点城郭として高田城を構えたとの想定も可能である。在地において貞連は、応仁の乱で荒廃した神林寺（同市神）の堂宇再建や、東方の篠向城（同市三崎・大庭）に挺る山名右近亮を討ったとの事跡が伝えられる（「作陽誌」）。貞連の子とされる貞国（駿河守。？～1532）も、幕府御料所久世保を押領している（一色家文書）。このような貞連・貞国二代にわたる、本拠周辺への積極的な勢力伸長の結果、その版図は、「高田庄并草賀部村」を始め、現在の真庭市の勝山・久世・落合旧町域の大半に及ぶに至っている（石見牧家文書）。

## 2 広峯社「檀那村付帳」の高田城下と阿波土居

戦国時代における、高田城下と阿波土居周辺の空間構成について、天文年間（1532～55）のもとのと考えられる、播磨国広峯社（兵庫県姫路市）の御師の檀那を書き上げた「檀那村付帳」などには、「しもいちは こもう殿」「たん こんや 孫三郎」「きん原にて金田ひこ九郎殿」が現れる（肥塚家文書）。「下市場」「旦」とともに、現在も高田城下に遺跡地が残る。「金田ひこ九郎」の居所と示される「きん原」についても、同城下に存在した徵証がある。例えば、文亀2年（1502）の年紀を有する聖教、「親経中台曼陀羅不審抄」に、「西高田ノ庄金原村宝懐院」との奥書があるとされる（若園善聰氏からのご教示による）。この「宝懐院」については、先の三浦貞連の戒名、「宝幢寺殿徳岩良賢」と関連しよう。さらに現在、真庭市勝山地内に所在する日蓮宗寺院・妙円寺の山号が「金原山」であること、何らかの関連を窺わせる。あるいは江戸時代に高田村へと内包された村落のひとつである可能性が考えられる。

「きん原」「金原」の具体的な所在地については史料的には明確でないが、高田村の平地部分は、旭川の氾濫原で、いくつかの中洲状の微高地に分かれている。現在一帯は、「原方」と総称されていることから、「金原」は「原方」内の微高地のひとつであった可能性が考えられる。

まず、織豊期の史料に見える「高田牧原」は、氾濫原の東端山裾付近の徵証がある（美作化生寺文書、「作陽誌」）。次に、同地の西には「下市場」の小字が残り、先の「しもいちは」に比定される。さらにその西に、平地内では最大の微高地があり、現在も「善光寺」や、本稿で問題としている阿波土居、牧土居関連の小字が残っている。まずはこの微高地をもって、「金原」に比定するのが妥当ではなかろうか。「金原」とは、東方の「金山谷」と対になる地名とみておきたい。

さて、上記に関連して、享禄2（1529）年9月、「金田加加（賀）弘久」が、鑄物師大工に鰐口を铸造させ、真島郡草加部（真庭市草加部）の草加部八幡宮に寄進していることに注目したい（草

加部八幡神社所蔵)。寄進主の金田弘久(加賀守。?~1559?)は、三浦氏の家臣と伝わる。三浦貞国の子・貞久と実名の一字が共通しているのは、親密な関係を窺わせる。また、草加部八幡宮は、三浦貞宗が高田地内に勧請したが、洪水で漂着した現地に改めて鎮座したと伝わる。草加部の地は、「高田庄并草賀部村」と表示されるように、高田庄と密接な関係にある村落であった(石見牧文書)。ところが、三浦貞久は天文17(1548)年、出雲尼子氏の侵攻に伴う高田城籠城中に病死、弘久も永禄2(1559)年、同城回復の挙兵に加わり、貞久の子・貞勝(孫九郎。?~1565?)の入城を実現させるが、弘久自身は、交戦に際して旭川で溺死したという(「高田城主次第」、「作陽誌」など)。

以上から、三浦氏の有力被官と伝わる金田氏が、少なくとも16世紀初頭以前から「金原」に構えていた居館こそ、阿波土居に比定されるのではないかと考えてみたい。あるいは、15世紀後半とみられる三浦貞連の高田地内への進出・築城以前から、同地の在地有力者であって、伝えられる弘久の執念も、同地が自身の本拠であったことに根差すとみれば、状況をより理解できよう。「阿波」とは、居館を構えた当主の受領名と考えることも可能である。ちなみに、主郭が約半町四方と想定される阿波土居の規模に対し、同じく三浦氏の有力被官と伝わる舟津氏の下屋敷跡(真庭市組)は、「長六十間、横三十七八間、約1町×半町強の規模との所伝が残る(船津家文書)。

ところが金田氏は、その執着ゆえか、永禄8(1565)年(同7年とも)、三浦氏の被官から転じて、美作国へ勢力を伸張する備中の三村家親に同調、当主の三浦貞勝を自刃に追い込んだとされる(「高田城主次第」など)。さらに同12(1569)年6月、三浦貞久の子・貞広は、金田源左衛門尉の敵対に与しなかった家臣を賞していることから、金田氏は安芸毛利氏に与したらしい(下河内牧家文書)。

その後まもなく、三浦貞広は旧地を回復し、天正3(1575)年まで存続するが、離反した金田氏の消息は不明である。ちなみに、同氏の子孫は、篠向城の城主・江原親次(「兵庫助。?~1598」)の家臣を経て、高田村の在郷町で商人となる。その菩提寺は、先に触れた金原山妙円寺である。

### 3 その後の阿波土居

阿波土居を「金原」の金田氏の居館に指定するとして、居館はその後、どのような経過を辿ったのだろうか。参考となるのが、岩国藩士香川家の家記「香川家軍功略記」、及び家伝を素材とした軍記物語の「安西軍策」、「陰徳記」(万治3〔1660〕年以前)である(以下、「略記」、「軍策」)。

永禄12(1569)年10月、蜂起した美作国の諸平人は、備前國の大名・浦上宗景(遠江守)らの加勢を受けて、高田城下に進攻、在番する毛利方の兵と城下で交戦した。香川家の先祖・春繼が直接関わった戦いということもあり、特に当該部分は参考になる。各書の記述から、城下の戦いは、高田城の東方、具体的には「下市場」や阿波土居などの所在する氾濫原一帯で行われた可能性が高い。

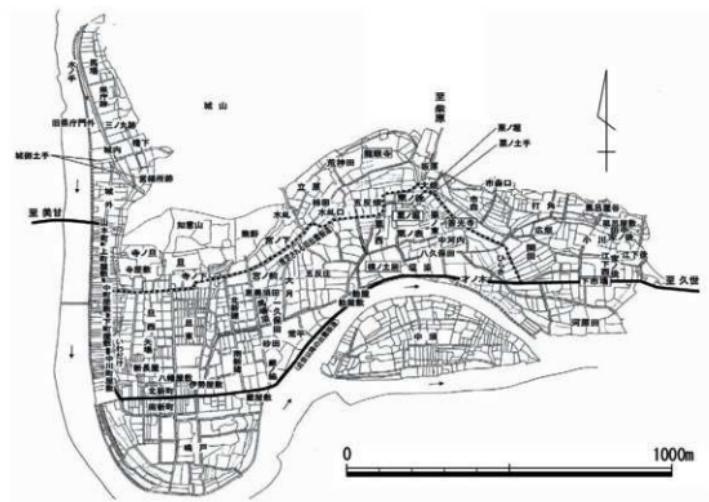
注目されるのは、「略記」の一節で、「春繼カ玉串ヲ討シ所、無双ノ鎧場トテ一町四方黍穂ヲ植ス、草茫々トシテ香川ノ鎧場ト称セシヨシ」とあることである。「軍策」「陰徳記」もほぼ同様である。「略

記」には、無耕作地の範囲を「一町四方」とする。近世以降の高田村の平地に、これだけの草原が遺されているとすれば、それは何らかの施設跡地であった可能性を考えたい。これまでの所見に照らせば、この場所とはすなわち、阿波土居の跡地ではあるまいか。溝と土塁で囲まれた土居の一辺は約半町四方、加えて周囲の地割や小字などからすれば、一町四方の規模にも迫る。

徵証での推論を重ねた可能性を述べるに留まったが、阿波土居跡が国人三浦氏の有力家臣・金田氏の居館として 16 世紀前半に存続しうる状況があるとの指摘をもって、本稿の擱筆としたい。

主要参考文献

- 寺阪五夫 1955 「美作古城史」第一輯、私家版  
牧 祥三 1987 「美作地侍戦国史考」私家版  
長谷川博史 1995 「尼子氏の美作国支配と国内領主層の動向」  
岸田裕之・長谷川博史「岡山県地域の戦国時代史研究」広島大学文学部紀要五五巻特輯号二。のち長谷川博史 2000 「戦国大名尼子氏の研究」吉川弘文館に収録。  
真庭市教育委員会 2015 「真庭市指定史跡 高田城総合調査報告書」同教委



第6図 阿波土居跡周辺の地名 (1/15,000)

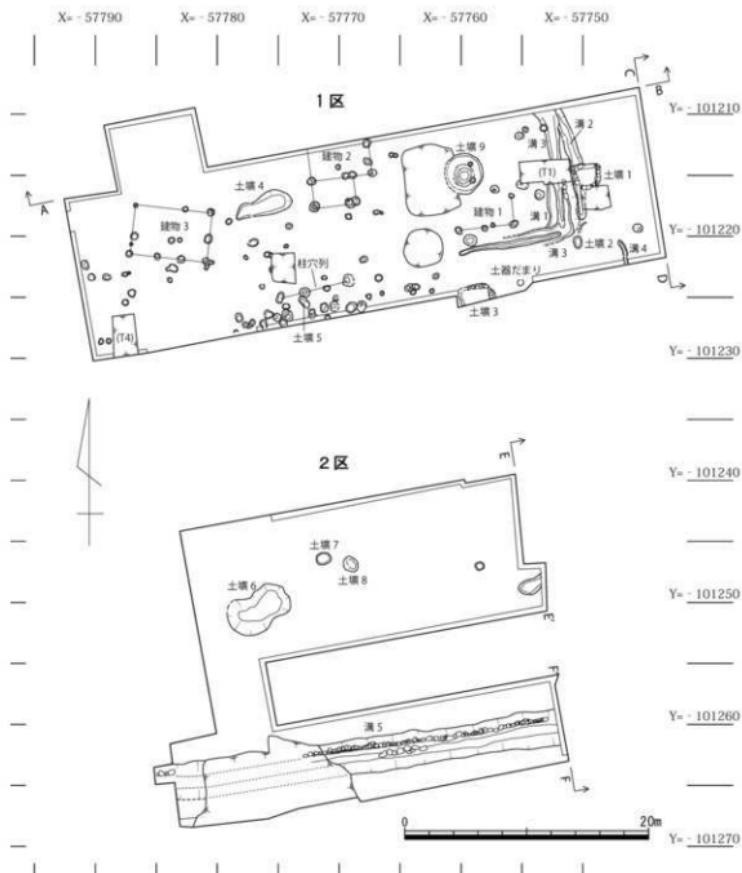
(「高田城総合調査報告書」所取図を一部改変)

## 第3章 発掘調査の成果

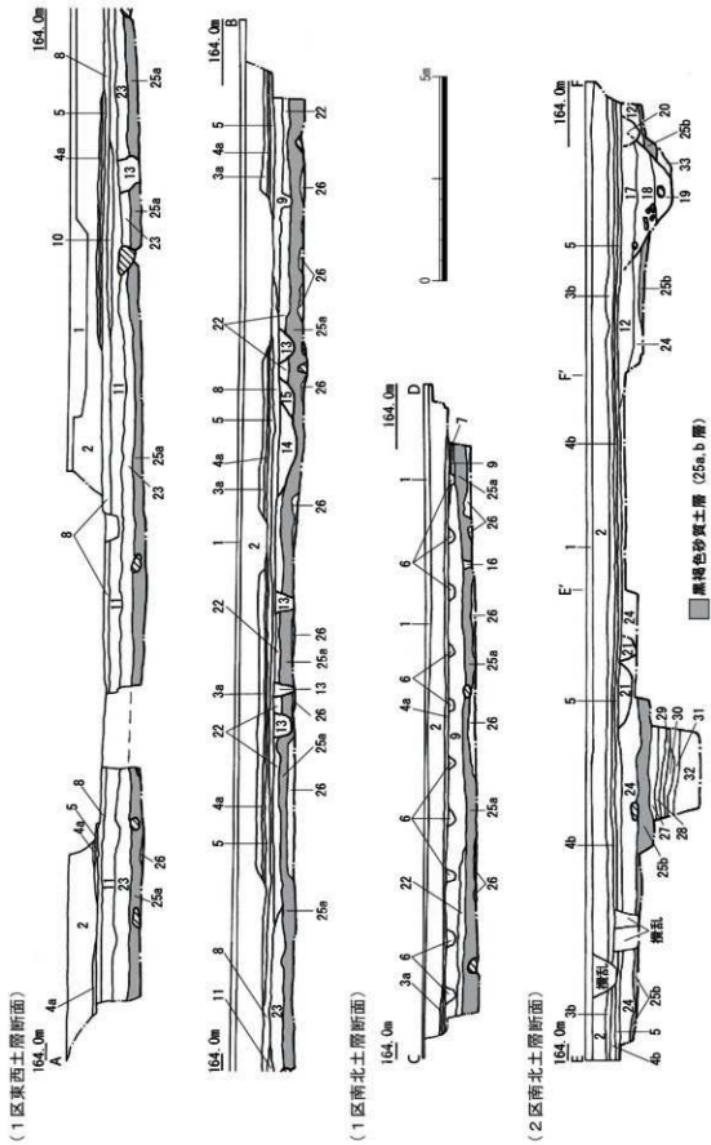
### 第1節 調査の概要

#### 1 調査区の位置と概要

調査区は、建設計画の関係上大きく南北に分かれる。さらに、建設工事に伴う掘削深度が浅い南側中央部も発掘調査の対象外となつたため、南側の調査区は逆「コ」の字形を呈することとなつた。



第7図 調査区遺構配置図 (1/400)



第8図 調査区土層断面 (1/120)

1 アスファルト・コンクリート舗装	17 底黄褐色(10YR5/2)土(複合)	…道構(溝5)維土
2 砂石・造成土	18 黄褐色(10YR4/2)土(複合)	…道構(溝5)埋土
3a 棕灰色(10YR5/1)粘性砂質土	19 黄褐色(25Y5/1)土(複合、やや粘性あり)	…道構(溝5)維土
3b 黄灰色(25Y5/1)粘性砂質土	20 黑褐色(10YR3/2)土	…道構(ピット)維土?
4a 黄灰色(25Y5/1)粘性砂質土	21 喀褐色(10YR3/2)土	…道構(ピット)維土?
4b 喀褐色(25Y5/2)粘性砂質土	22 黑褐色(10YR3/2)粘性砂質土(少量中耕過遁合)	…中耕過遁面
5 銅黃褐色(10YR5/0)粘性砂質土	23 黄褐色(25Y5/3)細紗	…中耕過遁面
6 黃灰色(25Y5/1)粘性砂質土	24 喀褐色～黄褐色(25Y4/2～25Y5/3)微砂質土～中耕過遁面	
7 棕褐色(10YR4/1)粘性砂質土	25a 黑褐色(10YR2/2)砂質土(-50cm円潤多量含)	…共生包含層
8 黄褐色(10YR5/2)砂質土	25b 黑褐色(25Y3/1)土(複合)	…共生包含層
9 黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土(-20cm円潤合)	26 黄褐色(25Y5/3)砂(-50cm円潤多量含)	…河川堆積層
10 銅黃褐色(10YR5/0)砂質土	27 銅黄色(25Y6/4)細～粗砂(-20cm円潤多量含)	…河川堆積層
11 棕灰色(10YR4/1)砂質土(10cm円潤多量含)	28 黄褐色(25Y5/4)細紗(複数含)	
12 底黄褐色(10YR4/0)粘性砂質土(褐灰色土合)	29 黑褐色～黄褐色(25Y3/1～25Y4/1)細紗(-20cm円潤多量含)	
13 黄褐色(10YR4/2)砂質土	30 銅黄色(25Y6/4)細～粗砂(-20cm円潤多量含)	…河川堆積層
14 黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土	31 黄褐色(25Y5/1)細紗(やや粘性有)	
15 棕灰色(10YR4/1)粘性砂質土	32 黄褐色(25Y5/3)細紗	…河川堆積層
16 底黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土	33 黄褐色(25Y5/3)砂質土(複多量含)	…河川堆積層

(第8図 調査区土層断面)

発掘調査は、北側の調査区を1区、南側を2区と称し、平行して調査を進めた（第7図）。

調査地は、稼働中の工場敷地内であり、調査前は地表全面がコンクリート・アスファルトにより舗装される状況であった。また、1区、2区いずれにおいても、過去の機械設備等の設置工事に伴い包含層や遺構がすでに削平された箇所があり、特に2区南西部は、過去に大型の加工施設を設置するため、基盤層まで達する大規模な掘削を受けていた。

調査は、確認調査における遺構確認面の深度を踏まえ、現地表の造成土・近現代水田面等については、調査担当者立会のもと重機を用いて除去し、以降は人力作業により遺構の検出に努めた。

調査区のほぼ全面にわたり、現在の工場建設以前の近現代の水田・耕作層がみられ、かつてこの一帯が農地であったことがうかがわれる。遺構面については、柱穴で検出面からの深さが50cmを超えるものもあることから、農地として開墾された際にも大幅な削平は受けていないと考えられる。

水田層より下位の土層では、かつて氾濫原であったことを示すかのように大形の河原石が砂質土層中に散乱していた。このため、包含層の掘削のみならず、遺構の判別においても大変困難な状況であった。調査序盤から古代以前の土器が出土していたが、これらは他所からの流入によるものとみなしていた。しかし、調査終盤になり弥生時代の遺構を検出し、古代以前においても、周辺を川に囲まれながらも、一時的な微高地状の生活空間があったことが想定される。

今回の調査で検出、確認できた遺構は、3棟の掘立柱建物、1組の柱穴列、9基の土壙、5条の溝そして1ヶ所の土器だまりである。これらは、弥生時代後期の所産である土壙1基を除き、中世に営まれた城館に伴うものである。遺構検出時の標高は、1区溝3が調査区北壁にて標高1626.6m、2区溝5が調査区東壁において1625mとなり、調査区内での土層はほぼ水平に堆積していた。

## 2 基本層序

調査区における地層は、中州という立地特性もあり、疊を含む砂質土または砂層が主体をなす。

基本層序（第8図）は、表土から順に、おおむね以下のとおりである。

- ① 工場建設に伴って敷設された碎石・アスファルト層（1・2層）
- ② 工場建設前の近現代水田層（3a・b～6層）
- ③ 少量の近世遺物を含む、中世の遺物包含層（7・8・10・11層）
- ④ 中世の遺物包含層であるが、遺構面の可能性を有する砂質土層（9・12層）
- ⑤ 中世遺構の基盤となる砂質土層。褐色を基調とし、若干の中世遺物を含む。（22～24層）
- ⑥ 黒褐色砂質土層。調査区のほぼ全域にわたって広がり円礫を多く含む。古代以前の遺物を含み、1区では弥生時代の遺構をこの面で検出。（25a・b層）
- ⑦ 黄褐色または黄灰色の砂層。礫を多く含み、河川による自然堆積。無遺物。（26～33層）

## 第2節 中世の遺構と遺物

### 1 挖立柱建物

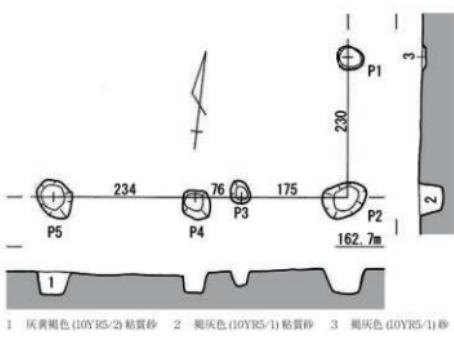
掘立柱建物は、調査中に検出した1棟（建物3）、整理作業の過程で抽出したものが2棟がある。建物跡として復元できなかった柱穴も多く存在し、加えて砂質土上面で遺構を検出せざるを得ず、遺構の識別が困難であったことも考慮すれば、他にも建物が存在していた可能性を残す。

#### 掘立柱建物1（第9図）

1区東半部のほぼ中央、溝3に接するように配置されている。確認できた柱穴は5基のみであるが、配列から掘立柱建物になるとみられる。柱穴は径40～74cm、深さ6～40cmを測る。平面の全容が把握できなかったため棟方向は不明であるが、P2～P5間で4.85mを測る。

#### 掘立柱建物2（第10図）

1区中央、調査区北辺に接して検出した建物跡である。調査区外となる北側に続くと考えられ、

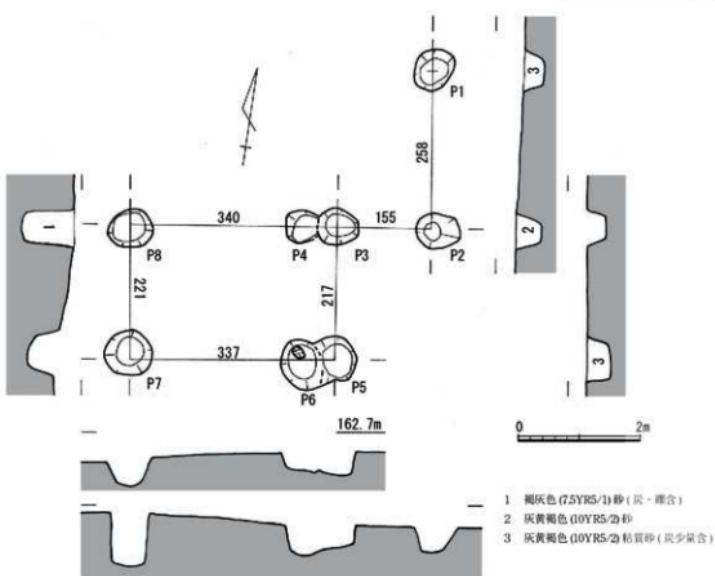


第9図 挖立柱建物1 (1/80)

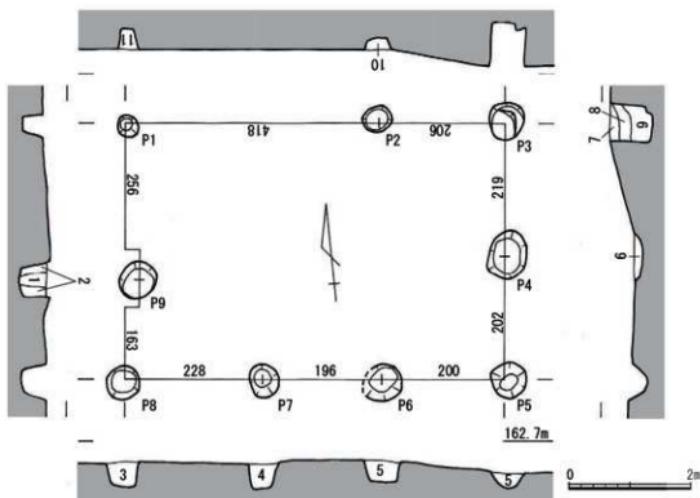
現状で、東西方向4.95m、南北方向で4.79mを測る。南側に庇を設けていたと見られ、その面積は7.51m<sup>2</sup>となる。柱穴は8基検出しており、径58～88cm、深さ30～88cmを測る。

#### 掘立柱建物3（第11図）

1区西半部において、調査段階で唯一検出できた2間×3間の建物跡である。東西棟の建物は、他の建物と異なり、



第10図 挖立柱建物2 (1/80)



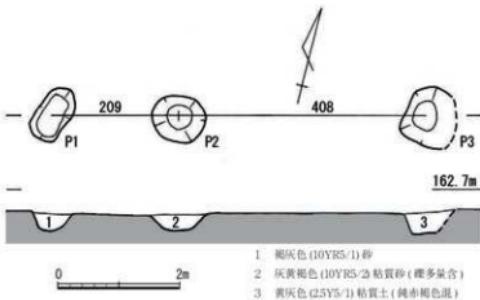
第11図 挖立柱建物3 (1/80)

軸方向がやや北に振れる。建物規模は桁行 6.24m、梁行 4.19m、床面積 26.15m<sup>2</sup>を測る。9 基の柱穴から成り、径 38 ~ 80cm、深さ 14 ~ 72cm を測る。P9 は検出した柱穴の中で、柱痕跡が明瞭に確認できた唯一の柱穴である。柱穴からは土器、陶磁器類、炭化物が出土した他、P2 では微量ながら漆片を確認している。

## 2 柱穴列

### 柱穴列（第 12 図）

1 区西半部の南辺付近で検出し、柱穴列と判断した遺構である。3 基の柱穴から成り、両端間で 6.17m を測る。方向は概ね東西を示す。柱穴は径 90 ~ 100cm、深さ 26 ~ 33cm を測る。



第 12 図 柱穴列 (1/80)

## 3 土壌

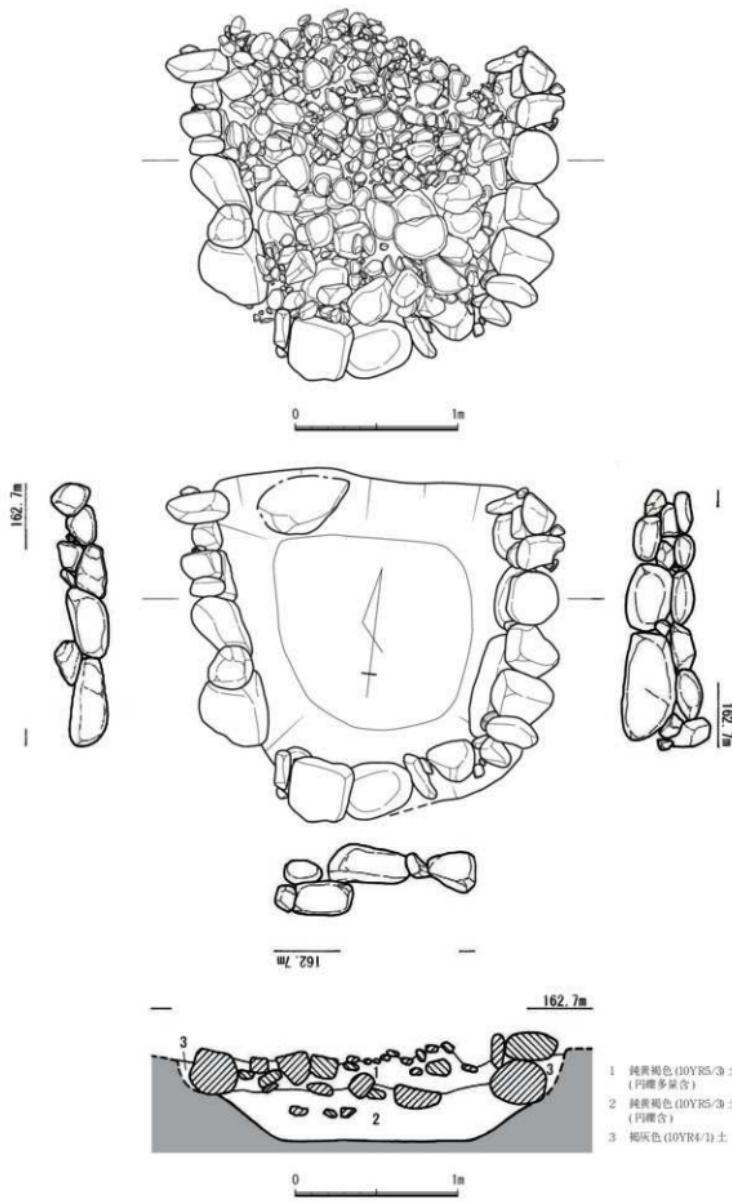
### 土壤 1（第 13 図）

1 区の東部に位置する。長径 2.33m、短径 2.27m を測り、北側が広がる不整な方形を呈する。断面形は浅い台形ないし椀状であり、深さは最大 46cm である。土壤の壁面は北側の辺を除く形で「コ」の字状に石積みを築いている。石積みは最下段に大形の礫を横長に置き、その上に小形の礫を載せており、最大で 3 段分の残存を確認した。北側の壁面は相対的に緩やかな傾斜であり、礫が抜き取られた痕跡も認められないことから、もともと積まれていなかったと考えられる。

土壤の埋土は上下 2 層に分けられる。特に上層には大量の礫が含まれており、そのため当初は土壤ではなく集石遺構とみなしていた。底面には基層である砂質土が露出しており、貼り床や敷石などの痕跡は認められなかった。3 方の壁に石積みをもつ形態は、後述の土壤 3 とも類似であるが、その機能は定かではない。埋土に含まれていた多量の礫は、土壤を埋め戻す際に投棄したものとみられる。

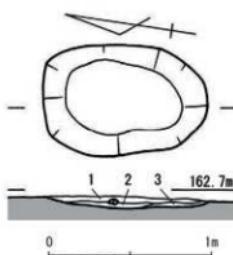
### 土壤 2（第 14 図）

溝 1 の屈曲点の南東に位置する。平面形は不整な梢円形を呈し、長さ 1.01m、幅 69cm で、深さは最大でも 8cm と浅い。埋土のうち第 2 層には焼土・炭化物が多く含まれていたが、土壤の内部や周辺には被熱痕跡を確認できなかった。



## 土壤3（第15図）

1区の南端壁際に位置する。全容把握のため調査範囲を拡張したが、全形を確認するには至らなかった。方形を呈し、東西長2.88m、深さは最大39cmを測る。検出範囲が限定的ではあるが、北壁の東半および東壁に石積みを伴う一方、西壁では石積みが認められなかつた。なお、北東隅は礫が無く空白となっているが、調査開始時の排水溝掘削の際に除去した可能性がある。南壁の状況が

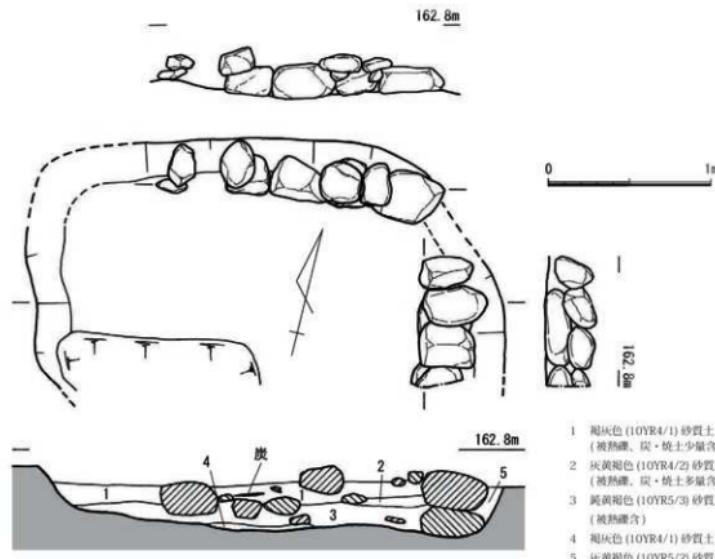


- 1 純黄褐色 (10YR4/3) 土 (シルト質)
- 2 純黄褐色 (10YR4/3) 土  
(シルト質、炭・焼土多量含)
- 3 純黄褐色 (10YR5/3) 土 (シルト質)

第14図 土壤2 (1/30)

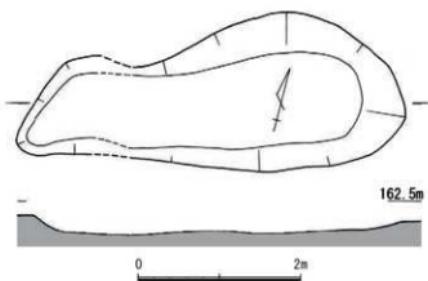
不明だが、土壤1と同様、三方に石積みをもつ方形土壤であった可能性もある。石積みは北壁・東壁とも最大で2段分が残存していた。土壤の断面は台形であるが、底面は緩やかに起伏し、完全な平坦ではない。底面に貼り床や敷石は確認していない。

埋土中には、大小の礫、炭化物、焼土塊及び多数の遺物が含まれていた。北東に隣接する土器だまりと接合する遺物が多く、この周辺が廃棄場所であったと考えられる。ただし、日常雑器を廃棄するため石積みまで伴う土壤をわざわざ設けたとは考えにくく、おそらく何らかの目的で構築されたものが、城館廃絶の際、焼土や土器片等の廃棄場所として利用されたものと推測される。

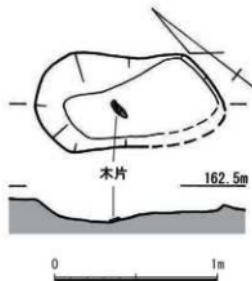


第15図 土壤3 (1/30)

- 1 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土  
(被熱礫、炭・焼土少量含)
- 2 褐黃褐色 (10YR4/2) 砂質土  
(被熱礫、炭・焼土多量含)
- 3 褐黃褐色 (10YR5/3) 砂質土  
(被熱礫含)
- 4 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土
- 5 褐黃褐色 (10YR5/2) 砂質土



第16図 土壌4 (1/60)



第17図 土壌5 (1/30)

**土壌4（第16図）**

建物2と建物3の間で検出された大形の土壌である。平面は不整な楕円形で、長さ5.21m、幅1.95m、深さ19cmを測る。

**土壌5（第17図）**

1区西半、柱穴列P2に接して検出した。平面は不整な楕円形、断面は浅い皿状を呈し、長さ1.17m、幅60cm、深さ14cmを測る。底面で銅鏡を載せた木片が出土したが、保存状態が著しく悪く、銅鏡も種類の判別が不可能なため図示していない。

**土壌6（第18図）**

2区北半に所在する大形の土壌である。平面は不整な楕円形、断面は浅い皿状を呈する。長さ5.3m、幅3.26m、深さ30cmを測る。土壌法面の南端には、直線的な疊の並びが2列認められるが、意図的な配置かどうかかも含め、その性格は不明である。

**土壌7（第19図）**

2区北半に所在する。平面は不整な楕円形を呈する。長さ1.23m、幅98cm、深さ13cmを測る。図示していないが、底面には基盤層の疊が多数露出している状況であった。

**土壌8（第20図）**

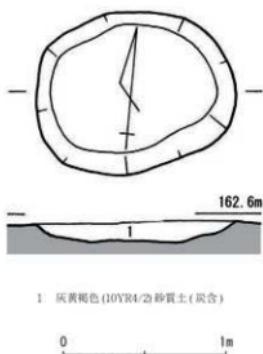
2区北半に所在する。平面は不整な楕円形、断面は台形を呈する。長さ1.34m、幅1.15m、深さ45cmを測る。埋土内には少量の遺物のほかに、疊が多数含まれていた。



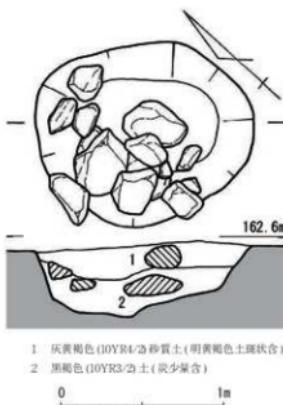
1 純黄褐色(10YR4/3)土(やや砂質)

0 2m

第18図 土壌6 (1/60)



第19図 土壌7 (1/30)



第20図 土壌8 (1/30)

#### 4 溝

溝1・3 (第21図)

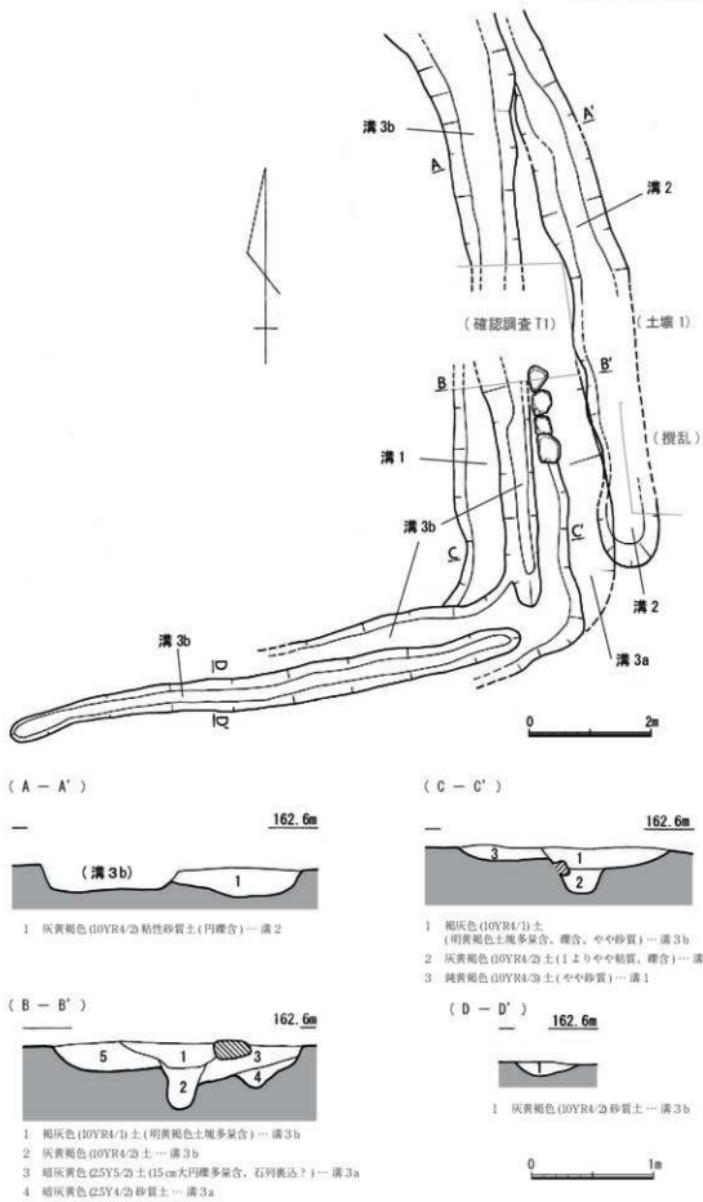
溝1は1区東部に位置し、現存長は3.5m、現存幅は最大72.5cm、深さ25.7cmである。溝3は溝1の東側に隣接し、切り合い関係から溝1の後に掘削された溝と判断できる。南東を角としてL字状に屈曲し、検出総延長は18.3mを測る。西端は徐々に浅くなって消失し、北側は調査区外へ続く。溝の底面は北に向かって徐々に下がっていく。

溝3は新旧2段階に分けられる。古段階は、T1トレンチより南側のみで検出された浅く幅の広い溝であり、新段階は、調査区北壁まで続く相対的に深くて幅の狭い溝である。古段階の埋没後、新段階の溝が掘削されたと考えられる。溝2および土壤1とは切り合い関係にあり、古い順に溝2→土壤1→溝3の順となる。古い段階を溝3a、新しい段階を溝3bと称し、以下に概要を述べる。

溝3aは、T1の南側で長さ約3.6mにわたって残存していた南北方向の溝である。南端は溝3bに切られ失われるが、わずかながら西側へ屈曲し始めており、本来は溝3bと同じくL字形の溝であった可能性がある。残存幅は最大で0.86m、深さは36cmで断面は浅い台形を呈する。

溝3bは、溝3aの埋没後にほぼ同じ位置に掘削された溝であり、幅は溝3aよりも狹まるが、底面には屈曲部である南東隅を除き、さらに一段深い溝が掘削されていることにより、深さは増している。最大幅1.47m、深さは最大52cmを測る。T1南辺に接する溝の東肩には、4個の扁平な円礫が一列に並べられていた。

溝3の方向は、2区の溝5とほぼ平行ないし直交していることからもほぼ同時期のものとみられ、屋敷地内を区画する機能を担っていたと考えられる。



第21図 溝1~3 (1/80・1/40)

## 溝2（第21図）

溝3の東側に隣接して所在する、南北方向の溝である。切り合い関係にある溝3及び土壤1よりも古い。底面はほとんど平坦であり、土壤1を挟み南にもわずかに延びている。検出した長さは9.3m、最大幅1.05m、深さ24cmを測り、断面は台形状を呈する。溝の軸方向は、溝3に比べやや西に振るが、先行して存在した区画のための溝とみられる。

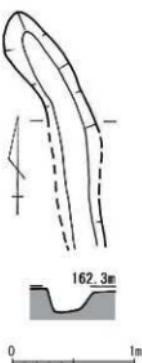
## 溝4（第22図）

1区東端付近の調査区南辺にて検出した。南北方向の溝で、確認できた長さで2m、最大幅37cm、深さ20cmである。

## 溝5（第23・24図）

2区南半部で検出した東西方向の溝である。検出総延長で約33.2m、検出面での幅2.47～2.87m、検出面からの深さ1.09～1.2mを測る。西側部分は、加工施設建設時の掘削により大きく失われていたが、調査区西端において、東西約4.2mにわたって一部が残存していることを確認した。

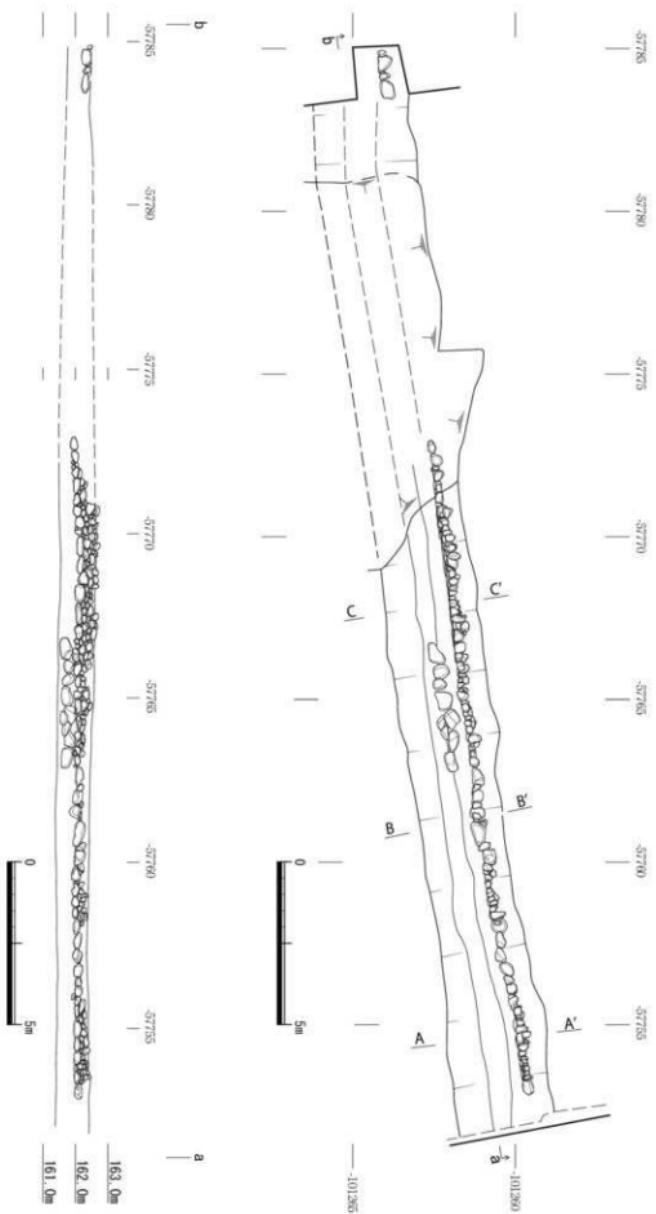
第22図 溝4 (1/40)



溝の断面は台形を呈し、壁面と底面の境界は明瞭である。底面の標高は、擾乱の東側では161.4～161.5m程度で、わずかながら西側へ高くなる。いっぽう、西端部では161.8mとなることから、擾乱で消失した範囲内でやや大きな傾斜の変化があったと考えられる。埋土は大きく3層に分けられ、1・2層には最大で50cm以上の円礫が大量に含まれ、遺物を含む。この層は自然堆積による埋没ではなく、人為的に埋め戻されたものと判断した。最下層である3層は上層に比べるとやや粘質が強く、自然堆積による可能性が高く、遺物は少量の土師器片が出土したに留まる。

この溝を特徴づけているのは、北側すなわち屋敷地側法面に構築された石積みである。検出総延長は約32.4mである。消失している擾乱内をまたいで調査区を西側に若干拡張したところ、約10.5m離れた地点で石積みの続きが確認できたことから、法面のはば全長に設けられたものとみられる。石積み上端から溝の南側法面上端までの幅は1.50～2.15mを測る。

石積みは、自然の川原石（円礫）で構築されており、加工された石は全くない。残存状態は一律ではなく、崩落して基底石のみが残る箇所もある。構造的には大形の礫を横長に据えて基底部とし、その上にやや小ぶりの石を積み上げている。石積みは基底石を除きほとんどが小口積みとなっており、残存状態の良好な部分で4～5段程度である。ほぼ垂直に積み上げられており、石積み下端の標高は162.0mあたりでほぼ揃っているが、西側拡張部で検出した箇所は162.19mと若干高い位置にあり、溝底面が上がることに関連すると思われる。石積み上端の標高は最も残りの良い箇所で162.76mとなり、石積みの高さは最も残りの良い箇所で83.8cmを測る。

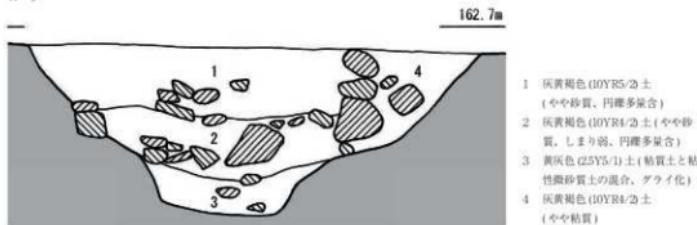


第23図 溝5平立面 (1/150)

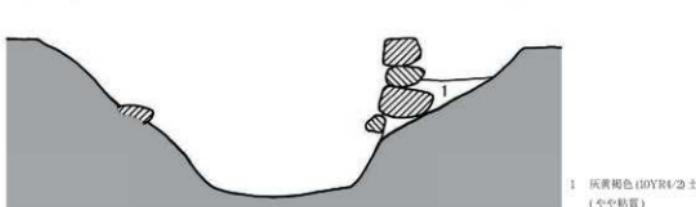
また、溝の底面から積み上げられておらず、法面の途中から構築している。石を据える場所は傾斜が若干緩くなつており、背後の埋土には裏込め等は認められなかつた。このような法面に石積みを構築しても極めて不安定な状態となることから、溝がある程度埋没した段階（第24図の3層）において、その時点の底面から積み上げられたものであると考えられる。

なお、溝の中央付近の底面に、最大75cmに及ぶ大形の石が一列に並んだ状態で検出された。これが意図的な配置か、偶然なのか判断することは非常に困難である。意図的な配置であったと考えた場合、橋脚の基礎等としての機能が想定できるかもしれないが、法面及び溝の両側を精査したも

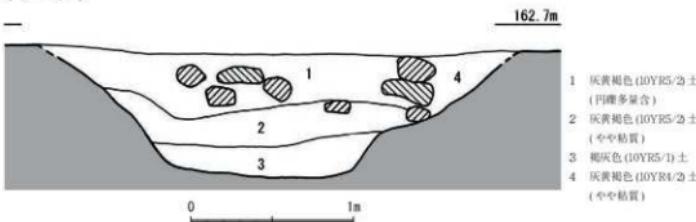
(A - A')



(B - B')



(C - C')



第24図 溝5断面 (1/30)

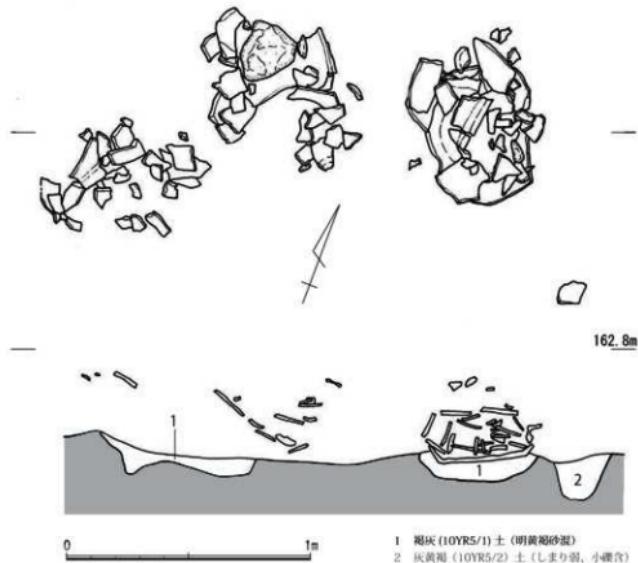
の、橋脚や柵などが存在した痕跡は確認できなかった。石積みの石よりも大形であることから、石積みの上部が崩落したものとも考えがたく、溝の埋め戻しに際して落とし込まれた石が偶発的に列をなしたと、現状では理解しておきたい。

## 5 土器だまり

### 土器だまり（第25図）

1区東南部、土壤3の東側に隣接し検出した。検出初期の段階では備前焼の埋壺遺構と考えたが、基盤層を掘削して壺を据えた明確な痕跡が認められず、複数個体分の備前焼片やその他の遺物が雑然と混在することから土器だまりと判断した。複数個体の備前焼壺、瓦質風炉、土師器皿、青磁、白磁、鉄釘などの製品類に加え、多量の焼土や炭化物が混在して出土した。最終的には、遺物の分布範囲は、第7図及び下図に示した範囲を超えて広がる状況となる。出土遺物が複数の遺構と接合関係を有することから、土壤3と同様、城館廃絶時に不要となった物を一括廃棄した痕跡と考えられる。

なお、備前焼壺（第26図3）の底部付近に遺存していた土砂を回収し水洗したところ、ムギ類とみられる炭化穀物を検出している。



第25図 土器だまり (1/20)

## 6 遺物

阿波土居跡では整理箱にして20箱の遺物が出土した。出土遺物の大半が土器・陶磁器類であり、その他に土製品、石器・石製品、金属製品などがある。以下では、中世の遺物（一部近世のものを含む）について、遺構別に概要を述べる。個別の詳細については観察表にまとめている。

### （1）土器・陶磁器類

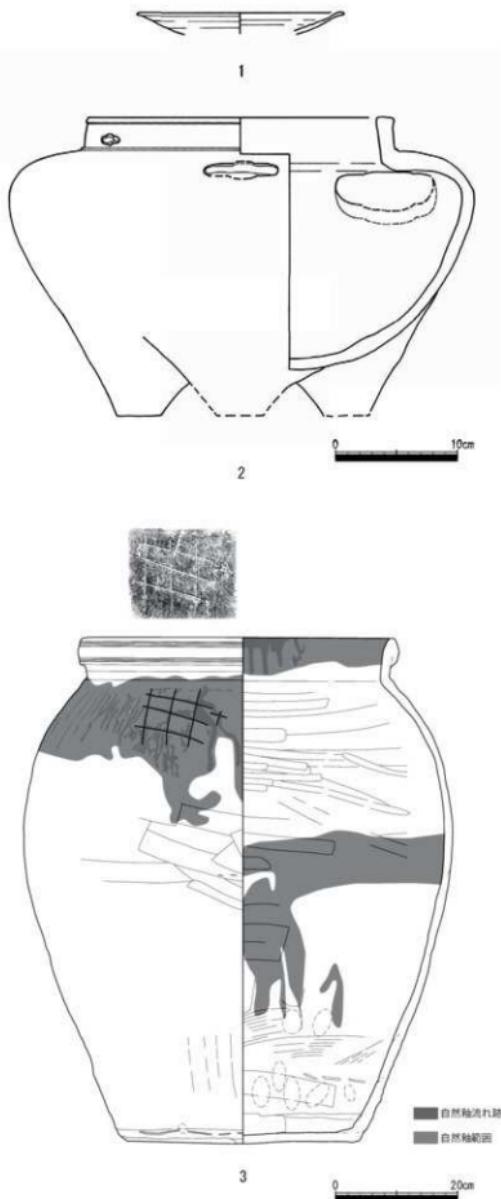
複数遺構出土遺物（第26～28図）阿波土居跡では、異なる遺構から出土した遺物の接合事例を、土器・陶磁器類で16点、石器で1点確認できた。また、明らかに同一個体と判断できるものが1点存在する。まず、これら複数の遺構から出土し、接合した土器・陶磁器類について述べる。

1は土師器皿で、溝3、土器だまり出土。回転台成形によるもので口縁が玉縁状を呈す。器表面は被燃により変色し、剥落がみられる。2は瓦質土器の風炉で、土壙2、溝3、土器だまり及び2区溝5出土。金属製の風炉を模したものと考えられ、この形態で全容が判明する例は全国的にも数少ない。中空の乳足と呼ばれる三足の脚が付き、肩の張りは強く、胴部に比して器高がやや低い。各足の上方に雲形もしくは格狭間形と思われる火口と雲形もしくは格狭間形と思われる風口2ヶ所を開ける。口縁部にも、脚部と60度ずらし、三方向に雲形の透かしを開ける。外面調整は丁寧なミガキで仕上げ、内面の体部上半と口縁部はヨコナデ、口縁部と肩部の接合部には指頭圧痕が一部に残る。底部から脚部は未整形で、脚部と底部の間には接合痕跡が観察できる。全体的に二次焼成を受け、器表面の炭素が抜けて赤色化する。口縁部から肩部にかけての形態は新田分類の風炉Ⅱ－2類に類似し、年代観は16世紀初頭から前半になる。産地は大和と考えられる。

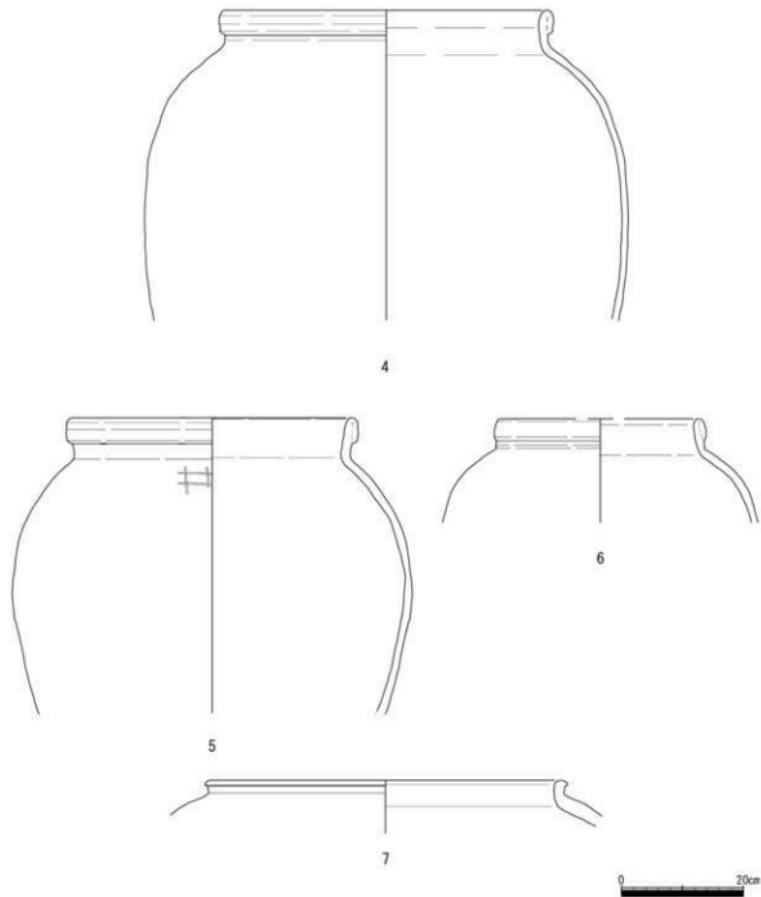
3～12は備前焼で、うち3～6は甕である。3は土壙2・3、溝3、土器だまり及び2区溝5出土。4は溝3、土器だまり及び2区溝5出土。5・6は土壙3、土器だまり出土。接合した遺物は土器だまりとその周辺の遺構から出土したものを主体とするが、3は溝5（1層）出土の1点、4は溝5（2層）出土の5点が接合した。いずれも口縁部が直立もしくは内傾し、6は他に比べ口縁部外面のナデ調整が弱い。3・5には頸部近くに窯印が刻まれる。3～5は乗岡編年の中世5b期、6は同5a期にあたり、年代観は15世紀後半になる。7は水屋甕で、土壙2、土器だまり出土。頸部は短く直立し、口縁端は外角を摘み出され、断面が逆L字形となる。乗岡編年の中世5期にあたり、年代観は15世紀後半になる。8・9は甕で、土壙2、溝3、土器だまり出土。8は肩の張った胴部で、頸部が外開きに立ち上がり、口縁部は玉縁になる。肩部には櫛描波状文を施し、その上下をナデ消す。また胴部中央に「×」印の窯印が刻まれる。9は底部で、回転台の上で底部を板起こしておらず、接合痕が明瞭に残る。8は乗岡編年の中世6a期、9は同6期にあたり、年代観は16世紀前半になる。10は擂鉢で、土壙3、土器だまり出土。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端内角を小さく面取りする。見込には10条のスリメがある。乗岡編年の中世6a期にあたり、年代観は16世紀前半になる。11は波状口縁鉢で、溝3、土器だまり出土。口縁部は全周約1/2が残存し、

底面は端部がわずかに残る。口縁部は手捻りで外側に摘まみ出し、その谷間にヘラ状の工具で筋を入れる。胎土は暗灰色を呈し、緻密である。内面にハジケが観察でき、被熱によるものと思われる。乗岡編年の中世6期にあたり、年代観は16世紀前半となる。12は水屋甕の胴部で、土壙2、土器だまり出土。胴部に断面三角形の凸線を有する。7と同様に、水屋甕初期段階の特徴を備えており、年代観は15世紀後半になる。

13は青磁盤で、土器だまり及び2区溝5出土。内外面に蓮弁文を施す。61と同一個体と思われる。14は青花皿で、土壙2、土器だまり出土。口縁が外反し、文様は外面に渦巻唐草文、内面に十字花文が配される。疊付の釉薬は削り取っている。小野分類の染付皿B1群に比定され、年代観は15世紀末から16世紀前半にあたる。15は瀬戸美濃の卸皿で、溝3、土器だまり出土。内口縁に段を有し、口縁部周辺に灰釉を施す。見込には格子状の卸目が刻まれ、底

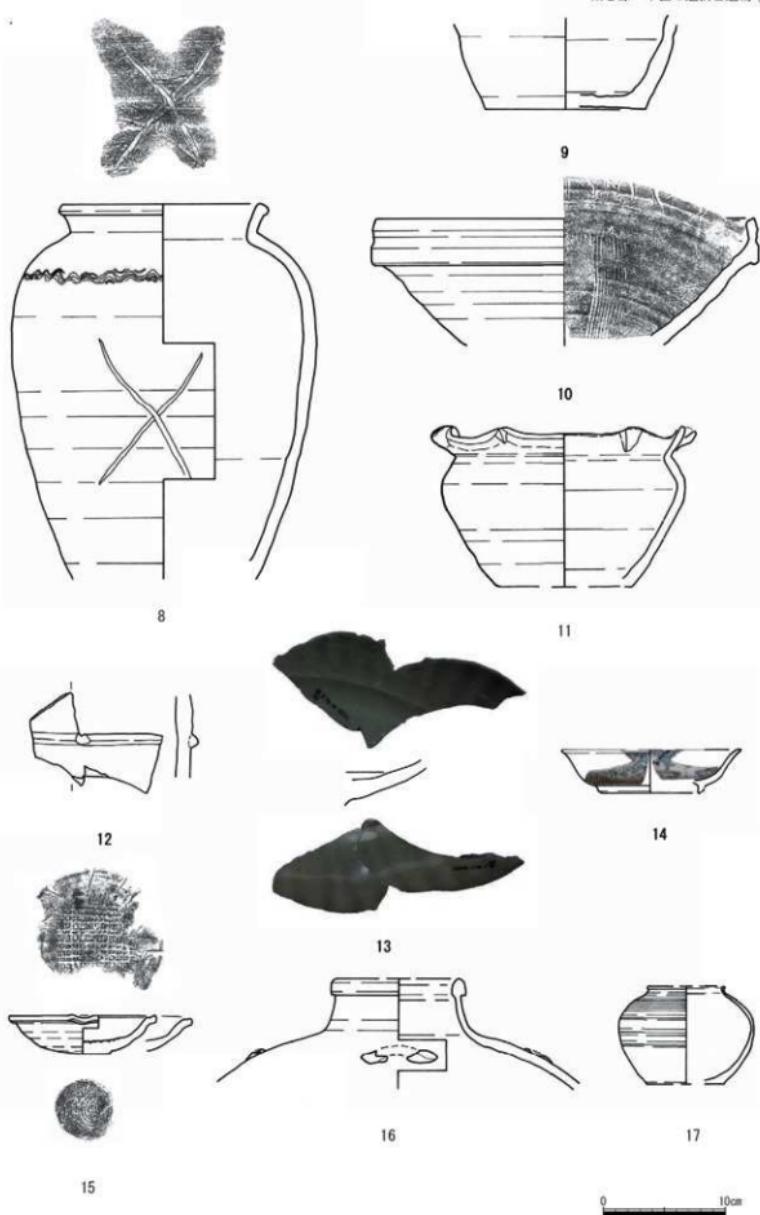


第26図 複数遺構出土遺物① (1/4・1/8)



第27図 複数遺構出土遺物② (1/8)

部は糸切りである。藤澤編年の古瀬戸後期Ⅳ期に比定され、年代觀は15世紀後半にあたる。16は褐釉陶器の壺で、土壙2、溝3、土器だまり出土。口縁部は内外面に段を有し、頸部近くに横位の耳が付く。土器だまりから出土した底部143を含め、同一個体と思われる破片が78点出土した。中国南部産の貿易陶磁である可能性が高い。17は図上で完形復元した黒色陶器で、土壙2、溝3、土器だまり出土。胴部径11.2cmを測る小形の壺で、器壁が非常に薄く、口縁部は折り返し玉縁状を呈する。釉薬は施されないが、外面の胴部から頸部にかけてカキメ状の条線が施され、装飾を意図したものと思われる。产地は不明であるが、貿易陶磁の可能性がある。



第28図 複数遺構出土遺物③ (1/4)

**掘立柱建物1出土遺物**（第29図）土師器皿、備前焼擂鉢、鉄釘が出土した。

18・19は手づくね成形の土師器皿。20は備前焼の擂鉢で、口縁部断面が三角形を呈する。乗岡編年の中世4b期にあたり、年代観は15世紀半ば頃になる。

**掘立柱建物2出土遺物**（第29図）土師器皿、備前焼水屋甕、白磁、石臼、鍛冶滓、鉄釘が出土した。

21～25は土師器皿。21は回転台成形で器壁が2.5mmと薄く、22～25は手づくね成形である。備前焼水屋甕26は胴部に凸線を有する。12と類似し、年代観は同様に15世紀後半になる。

**掘立柱建物3出土遺物**（第29図）土師器皿、瓦質土器擂鉢、備前焼壺、青磁、鍛冶滓、鉄釘、微細な漆片、炭化物が出土した。

27・28は土師器皿で、手づくね成形である。29・30は瓦質土器の擂鉢で同一個体と思われる。29は被熱している。30は外面底部に指頭圧痕が観察でき、見込のスリメが交差している。31は備前焼の甕底部。胎土の砂粒が荒く、年代観は15世紀代と考える。32～36は青磁碗。32・33は上田分類のE類に比定される。いずれの個体も被熱しており、同一個体の可能性がある。34は外面に片切形の幅広で粗略な蓮弁文を有する。上田分類のBII類に比定され、年代観は14世紀半ばから14世紀後半にあたる。35は高台で、見込に圈線が施され、上田分類のD類またはE類に比定される。36も高台で、見込に印花文を施し、高台内は蛇の目剥ぎである。

**柱穴列出土遺物**（第29図）備前焼擂鉢、土師器皿が出土した。

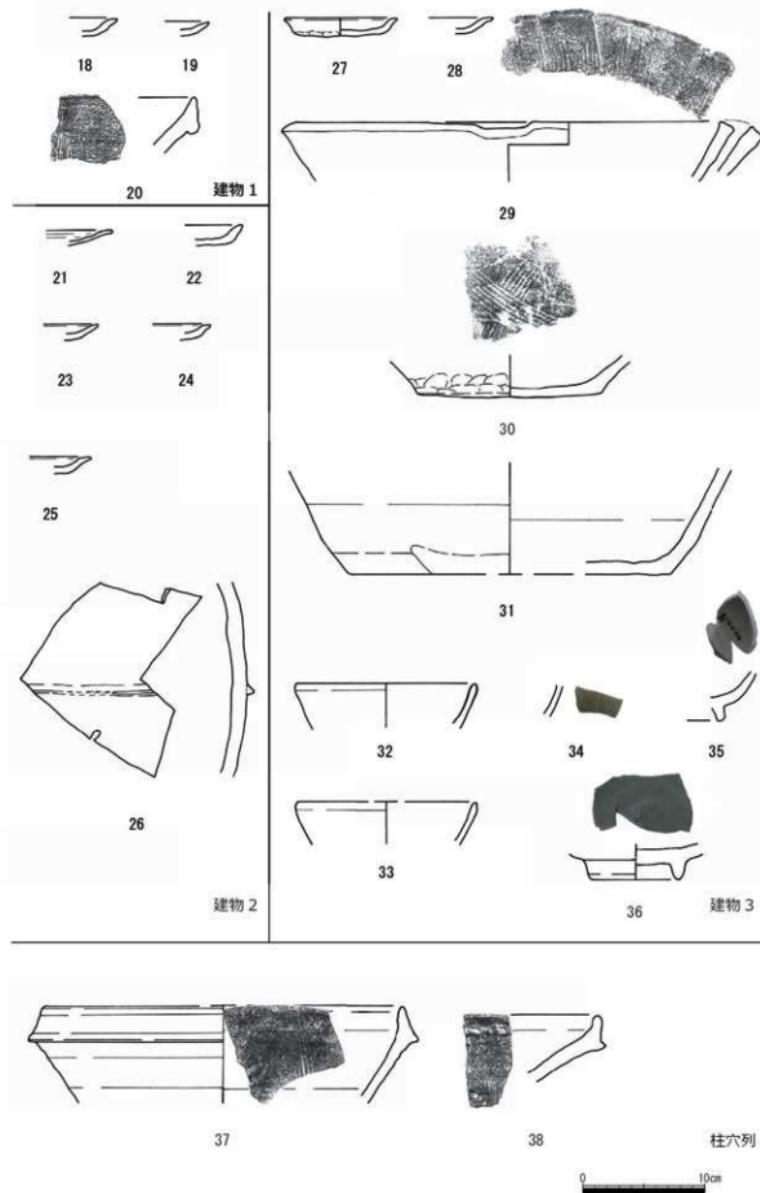
37・38は備前焼の擂鉢。いずれも胎土に砂粒が多く混じるが、口縁帶は薄造りを志向し、上方への立ち上がりが明確である。乗岡編年の中世5a期にあたり、年代観は15世紀後半になる。

**土壤1出土遺物**（第30図）土師器皿、備前焼擂鉢・水屋甕、青花、土錘、鉄釘、板状鉄片、土製の鋳型？などが出土した。

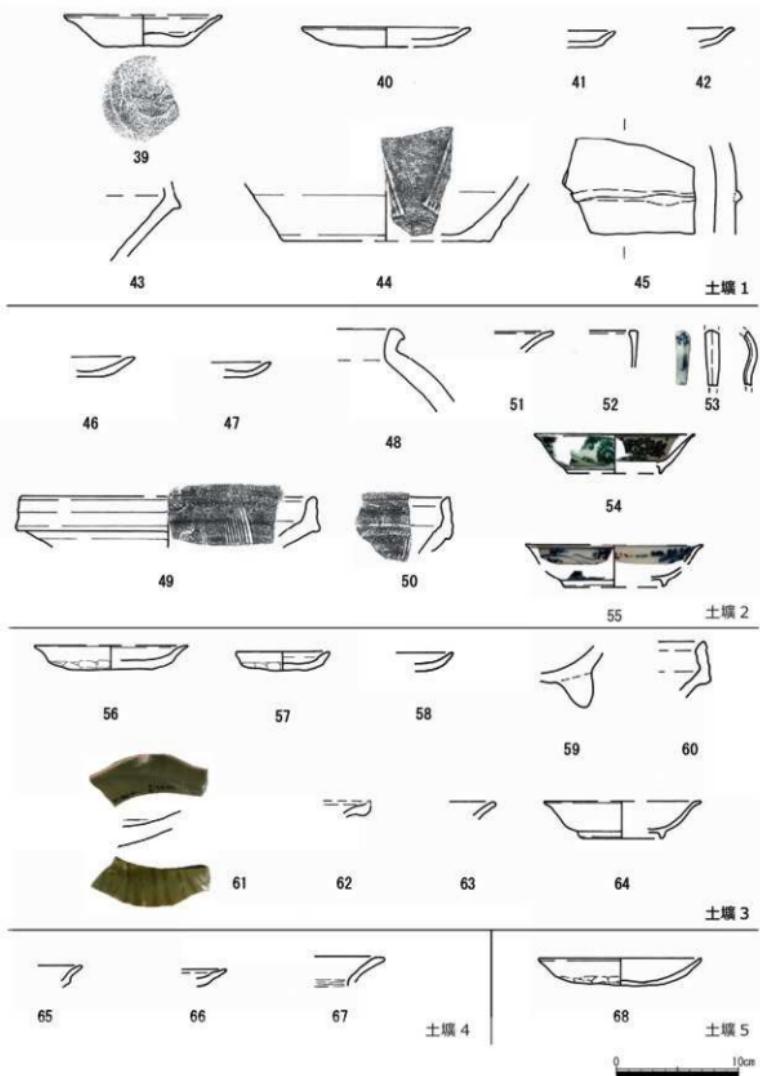
39～42は土師器皿であり、39は回転台成形で底部ヘラ切り、他は手づくね成形である。43・44は備前焼擂鉢。43は乗岡編年の中世5a期にあたり、年代観は15世紀後半になる。44は底部で胎土に砂粒を多く含み、スリメは3条以上となる。乗岡編年の中世4b期にあたり、年代観は15世紀半ば頃になる。45は備前焼の水屋甕。断面三角形の凸線を有し。年代観は15世紀後半になる。

**土壤2出土遺物**（第30図）土師器皿、瓦質土器風炉、備前焼擂鉢・甕・壺・水屋甕・波状口縁鉢、青磁、白磁、青花、瀬戸美濃、褐釉陶器、黒色陶器、鉄釘、茶臼、石臼、焼土塊が出土した。

46・47は手づくね成形の土師器皿。48は備前焼の水屋甕口縁部で、年代観は15世紀後半になる。49・50は備前焼の擂鉢。49は口縁部が垂直気味に立ち上がっており、乗岡編年の中世5a期にあたり、年代観は15世紀後半になる。50は薄造りの口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁内角を小さく面取りする。乗岡編年の中世6b期にあたり、年代観は16世紀前半になる。51は白磁碗の口縁部。52は白磁の香炉口縁部。外面は被熱している。内面下部は無釉で、ケズリの痕跡が観察できる。53は青花の把手片で外側に文様を描いている。器種は不明であるが、水注などが想定される。54・55は青花の端反り皿である。54は外面は唐草牡丹文、内面に花樹様の文様を配す。55は外面



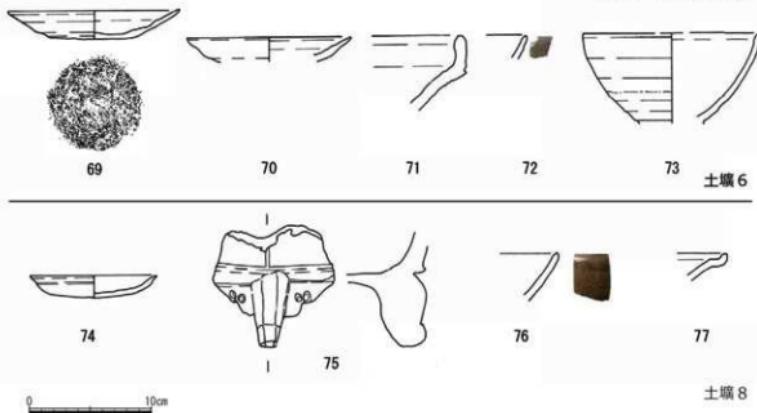
第29図 挖立柱建物1~3・柱穴列出土遺物 (1/4)



第30図 土壌1～5出土遺物 (1/4)

に崩れた唐草文、内面に風景らしき文様を配する。いずれも高台の疊付は釉薬を削り取られている。

小野分類の染付皿B1群に比定され、年代観は15世紀末から16世紀前半にあたる。



第31図 土壌6・8出土遺物 (1/4)

**土壌3出土遺物** (第30図) 土師器皿、備前焼擂鉢・甕・壺、波状口縁鉢、瓦質土器風炉、水屋甕、青磁、白磁、青花、鉄製釣針?、鉄釘、不明石器、軽石、石臼、炭化物、焼土塊が出土した。

56～58は土師器皿。いずれも手づくね成形である。59は瓦質土器の脚部で、被熱により赤色化する。60は備前焼の擂鉢。乗岡編年の中世6b期にあたり、年代観は16世紀前半になる。61は青磁盤。内外面に蓮弁文を施し、13と同一個体と思われる。62は青磁盤の折縁状を呈す口縁部である。63は白磁碗の口縁部。64は白磁の端反り皿。疊付の釉薬は削り取る。森田分類のE群に比定され、年代観は15世紀後半～16世紀前半にあたる。

**土壌4出土遺物** (第30図) 土師器皿、瓦質土器鍋、鉄釘、鉄片が出土した。

65・66は手づくね成形の土師器皿。67は瓦質土器の鍋口縁部。内面下端にヨコナデを行う。

**土壌5出土遺物** (第30図) 土師器皿、銅錢が出土した。

68は土師器皿である。手づくね成形で、内面の底部には不定方向のナデ調整を行っている。

**土壌6出土遺物** (第31図) 土師器皿、備前焼擂鉢、青磁、灰釉陶器が出土した。

69・70は回転台成形の土師器皿。69は口縁部の一部が玉縁状を呈し、底部はヘラ切りの上に板目痕を残す。71は備前焼の擂鉢。乗岡編年の中世5b期の特徴を有すが、胎土は緻密であり、年代観は16世紀前半とみなす。72は青磁碗。口縁外面に崩れた雷文をヘラ描きする。76と同一個体と思われる。上田分類C II群に比定され、年代観は15世紀後半にあたる。73は図上で完形復元した灰釉陶器の碗。胴部中央まで釉がかかり、下半部にヘラケズリが残る。

**土壌8出土遺物** (第31図) 土師器皿、備前焼擂鉢、青磁、瀬戸美濃が出土した。

74は土師器皿。回転台成形によるもので、底部はヘラ切りである。75は瓦質土器火鉢の獣形脚部。付け根両脇に板状の支えを伴い、2ヶ所を穿孔する。新田分類の方形浅鉢II類に比定され、年代観

は14世紀後半から15世紀代にあたる。産地は大和と推定される。76は青磁碗。口縁外帯に崩れた雷文をヘラ描きし、胴部には蓮弁文を施文する。72と同一個体と思われ、年代観は15世紀後半になる。77は青磁盤。折縁の口縁部で垂直気味に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。

**溝1出土遺物** 土師器皿、備前焼、石臼が出土した。土器はいずれも小片のため図示していない。

**溝2出土遺物** (第32図) 土師器皿が出土した。

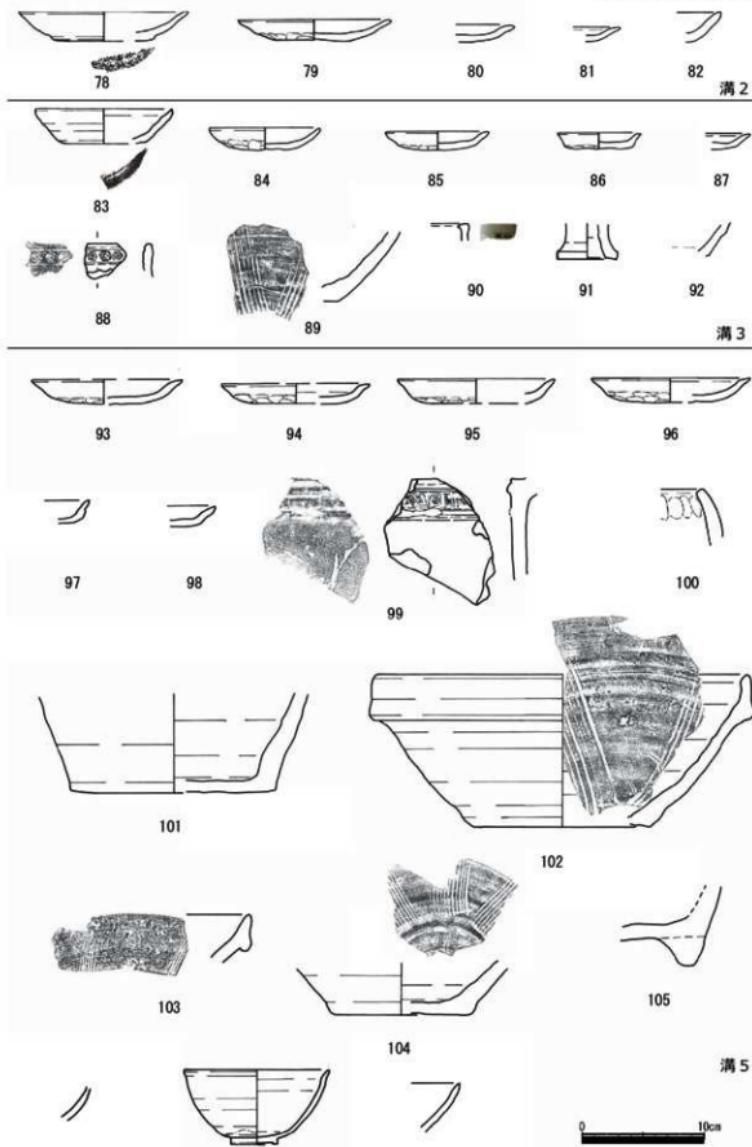
78～82は土師器皿。78は回転台成形で底部ヘラ切り、他は手づくね成形である。80・81のように口縁端部が外反するものが本遺跡では多い。78・81は一部被熱し、80の内面には煤が付着する。

**溝3出土遺物** (第32図) 土師器皿、瓦質土器火鉢、備前焼擂鉢・壺・壺・水屋壺・波状口縁鉢、青磁、白磁、瀬戸美濃、褐釉陶器、黒色陶器、鉄釘、鉄片、茶臼、石臼、動物骨片が出土した。

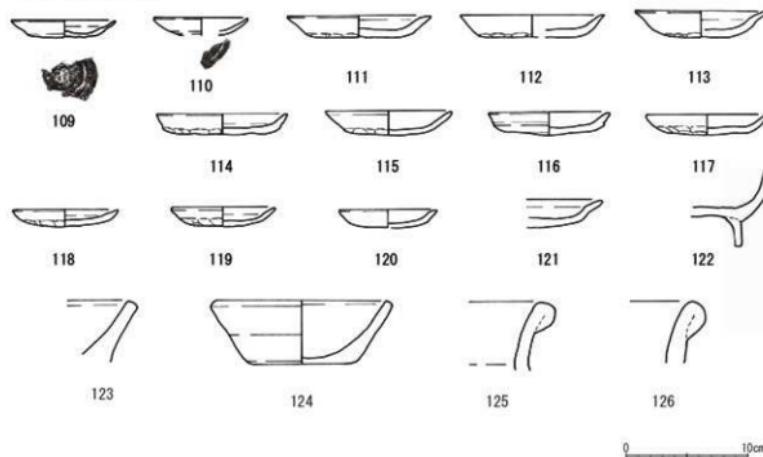
83～87は土師器皿。83は回転台成形で、底部ヘラ切りである。84～87は手づくね成形である。88は瓦質土器の香炉または火鉢の口縁部か。沈線区画の間に小型単体スタンプ文を施す。年代観は15世紀後半以降と考える。89は備前焼の擂鉢底部。内面にはスリメが7条以上あり、胎土は緻密である。年代観は16世紀前半と考える。90は青磁の香炉口縁部。口縁外面に圓線を施し、138と同一個体と思われる。91は白磁の脚部。下層出土1点と包含層1点が接合するが、外面の磨耗状態が異なる。底面や内面下部は釉が施されない。器種は不明だが、色調や胎土は中世前半の特徴を有し、生産年代は12世紀から13世紀頃と考える。92は瀬戸美濃の天目碗。胴部下半であり、ヘラケズリが丁寧に行われ、高台近くには鋸釉が施される。

**溝5出土遺物** (第32図) 土師器皿、瓦質土器風炉・壺・火鉢、備前焼壺・壺・擂鉢・水屋壺、青磁、白磁、瀬戸美濃、鉄釘などが出土した。

93～98は手づくね成形の土師器皿。96は下層から出土し、内面に付着物がみられる。99は瓦質土器の火鉢。口縁端部が内側に伸び平坦となり、2条の突帯の間に重画文と連子文を組み合わせたスタンプ文を施す。新田分類の方形浅鉢II類に比定され、年代観は14世紀後半から15世紀代にあたる。産地は大和と考えられる。100は瓦質土器の鉢。口縁付近に指頭圧痕が残る。101は備前焼の壺底部。内面及び断面に煤状のものが付着しており、破損後に被熱したと考えられる。胎土は緻密であり、年代観は16世紀前半と考える。102～104は備前焼擂鉢。102は、口縁帯が構造で、口縁端に内傾する面を持つが、外面に凹線は形成されない。乗岡編年の中世6a期にあたり、年代観は16世紀前半になる。103は口縁帯の断面が三角形状であり、上方への立ち上がりが明確化していない。乗岡編年の中世4b期にあたり、年代観は15世紀半ば頃になる。104は内面のスリメが11条以上ある。胎土が緻密で、年代観は16世紀前半と考える。105は備前焼水屋壺の脚部。7・12などと同様に、年代観は15世紀後半となる。106は白磁碗。色調や胎土から中世前半のものと考えられる。107は瀬戸美濃の天目碗。胴部の厚みは均一で薄く、口縁端部が折れる。胴部下半から輪高台にかけて鋸釉をかける。藤澤編年の大窯1期にあたり、年代観は15世紀末から16世紀初頭になる。108は灰釉陶器の碗。口縁端部がやや尖った形状をなし、胴部下半には釉薬がかからない。



第32図 満2・3・5出土遺物 (1/4)



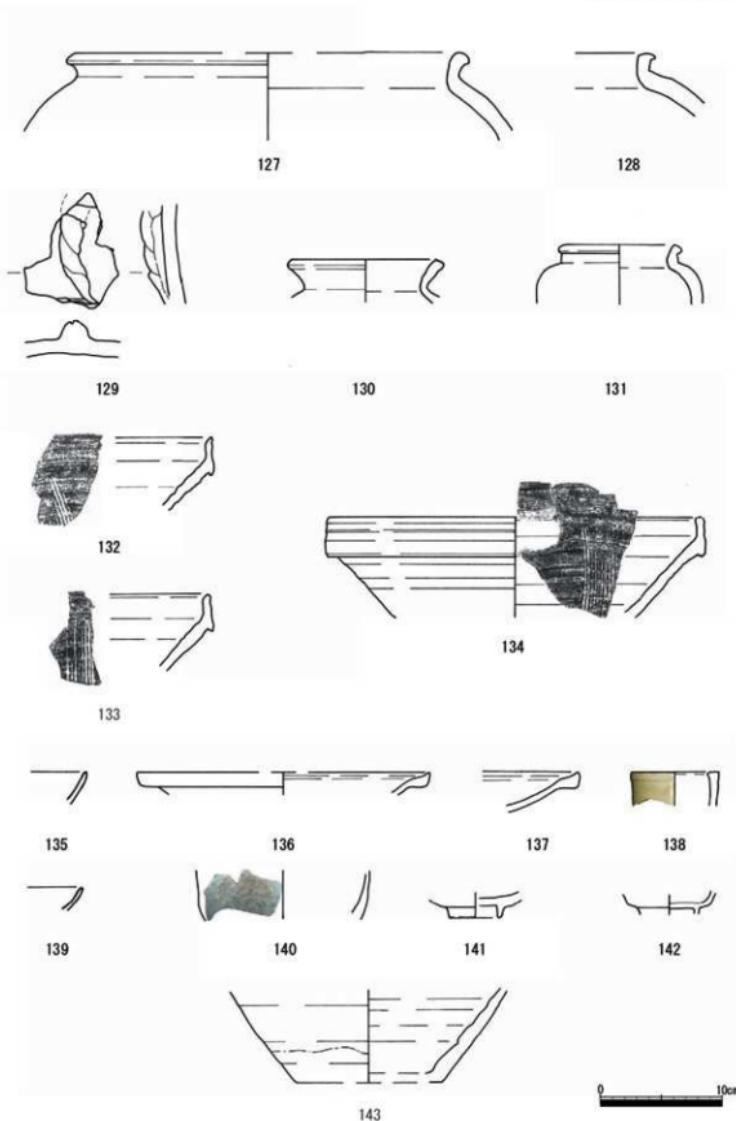
第33図 土器だまり出土遺物① (1/4)

土器だまり出土遺物（第33・34図）土師器皿、瓦質土器風炉、火鉢・鉢、備前焼擂鉢、壺、壺、水屋壺・波状口縁鉢、青磁、白磁、青花、褐釉陶器、黒色陶器、鉄釘、棒状鉄片、不明鉄器、銅滴、銅錢、茶臼、石臼、動物骨片、焼土塊、炭化物が出土した。

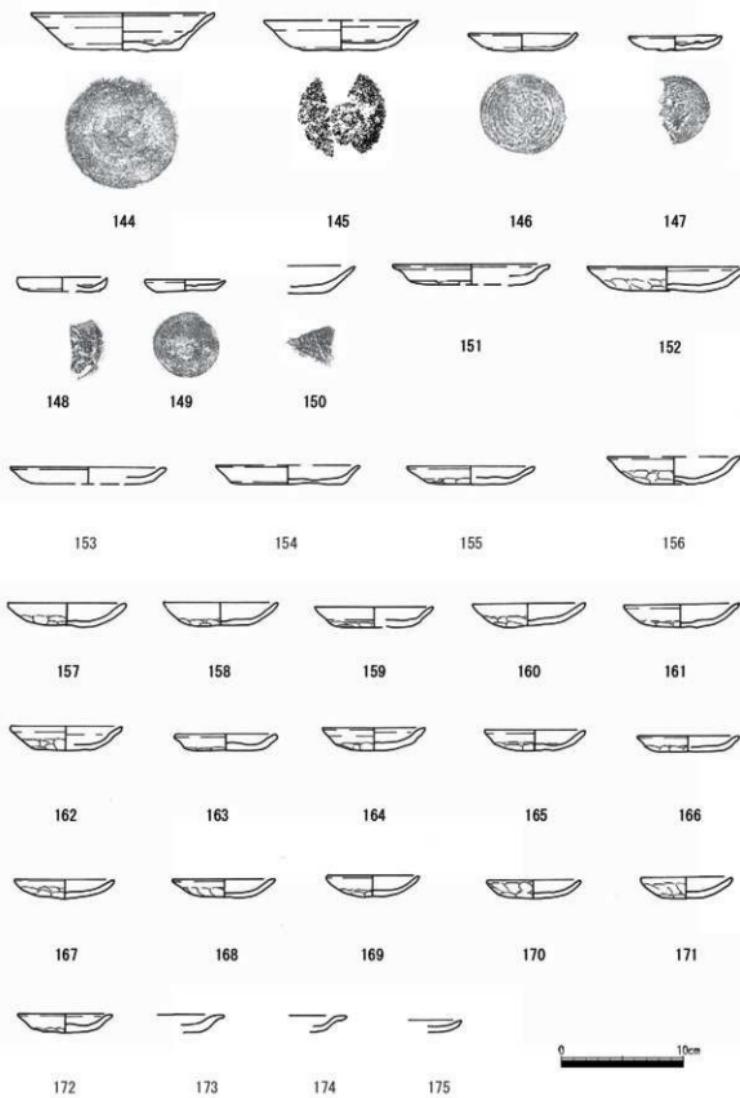
109～121は土師器皿。109・110は回転台成形で底部ヘラ切りである。器壁の厚さが2.5～3.0mmと手づくね成形と比較すると薄作りである。その他は、手づくね成形であるが、112は底部は整形後にナデ調整を行い、その上に敷物痕と思われる筋目が観察できる。114～116・118・120は一部に煤が付着し、111・112・118は器表面が被熱する。

122は図上で復元した円形を呈する瓦質土器の脚部。器種は火鉢または香炉が想定される。123・124は瓦質土器の鉢で、同一個体の可能性もある。断面を含め全体が被熱により赤色化している。

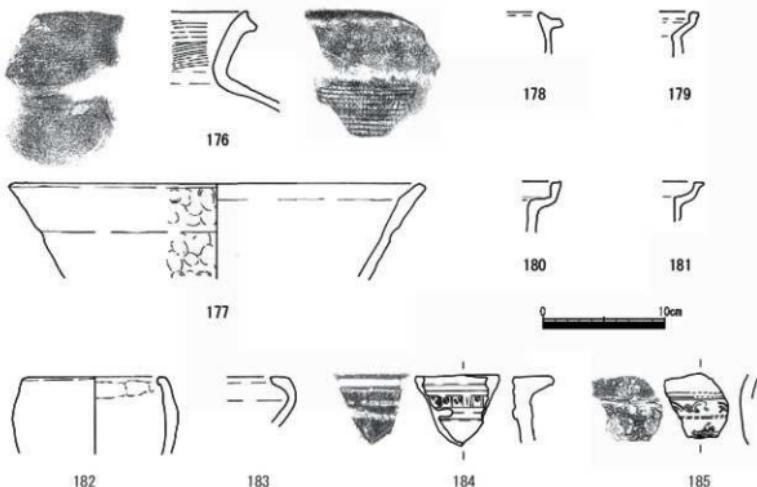
125～134は備前焼である。125・126は壺口縁部。備岡編年の中世5b期にあたり、年代観は15世紀後半になる。127～129は水屋壺。129は破損した凸線の上に立体的で捩り表現のある耳環が接する。いずれも備岡編年の中世5期にあたり、年代観は15世紀後半になる。130・131は壺の口縁部。130は備岡編年の中世6b期にあたり、16世紀前半になる。131は頸部が短小であり16世紀後半の可能性もあるが、水屋壺と胎土・形態的特徴が共通し、年代観は15世紀後半とみなす。132～134は擂鉢。口縁部が薄く上方へ立ち上がり、133・134には口縁外帯に未発達な凹線がみられる。いずれも備岡編年の中世6a期にあたり、年代観は16世紀前半になる。135は青磁碗。口縁外面に圈線を施す。上田分類のE類に比定される。136・137は青磁盤。いずれも口縁端部が肥厚し、断面三角形状を呈する。138は青磁香炉。口縁部外面に2条の圈線を施す。90と同一個体と思われる。139は白磁皿。森田分類のD群と推定され、その場合の年代観は15世紀前半となる。140は白磁で、



第34図 土器だまり出土遺物② (1/4)



第35図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



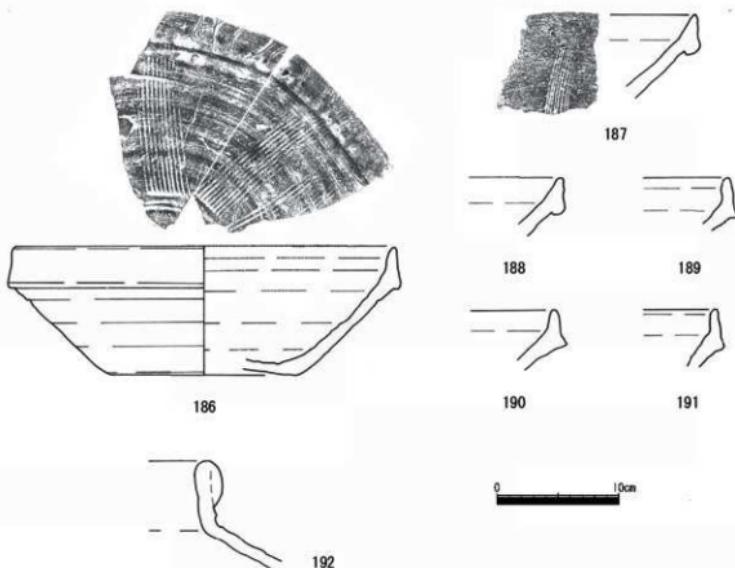
第36図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

外面に牡丹と蓮弁文を型押しする。特殊な形態であり、梅瓶胴部の可能性がある。141・142は白磁碗の高台部。142は削出し高台である。143は褐釉陶器の壺底部。16と同一個体と考えられ、底面近くは釉薬がつかない。胎土の色調は、やや黄味がかった灰白色を呈する。

遺構に伴わない遺物（第35～39図）中世遺構面を覆う包含層や遺構検出中に出土した遺物で、大半は中世後半の土器・陶磁器類であるが、わずかながら中世前半や近世初頭の陶磁器類を含む。

144～175は土師器皿である。144～150は回転台成形で、底部はヘラ切りである。10cmを超える大型品と10cm未満の小型品に分かれる。144・146は底面に板目痕を有し、146は煤が付着する。151～175は手づくね成形である。156は底部中央が盛り上がる、いわゆる「へそ盤」に類似し、発掘調査で確認できた唯一の形態である。152・157・160・161・166・173には煤の付着がみられ、155・168・175は器表面が被熱している。

176～185は瓦質土器である。176は壺。胴部外面に格子目状のタタキ、口縁部内面にヨコハケがみられ、口縁端部を強くナデ調整する。産地は備中南部と推定される。177は鍋。黄橙色を呈し、外面口縁部から胴部まで指頭圧痕がみられる。178は羽釜。176同様、備中南部産と推定される。179～181は鍋の口縁部である。182は鉢で口縁部内面下側を強くユビオサエし、口縁部を内傾させる。183～185は火鉢。183は口縁端部が内側に伸び平坦となる。新田分類の浅鉢Ⅰ～5類に比定され、年代観は14世紀半ばから15世紀代にあたる。184は、突帶間に崩れた重画文と連子文を組み合わせたスタンプ文を施す。新田分類の方形浅鉢Ⅱ類に比定され、年代観は14世紀後半から

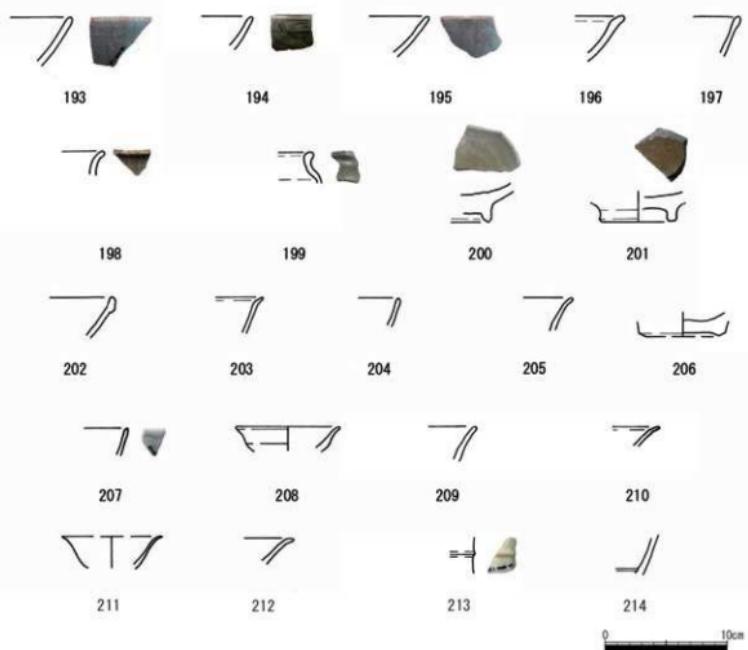


第37図 遺構に伴わない遺物③ (1/4)

15世紀代にあたる。185は凸帯下に唐草文（新田Ⅲ類）、沈線を挟んでその下に崩れた花菱文（新田Ⅳ類）を施す。新田氏によるスタンプ文の分類から、年代観は15世紀後半以降と考える。

186～191は備前焼の擂鉢である。口縁部の特徴などから、187・188が乗岡編年の中世4b期にあたり、年代観は15世紀半ば頃、189～191が乗岡編年の中世5a期にあたり、年代観は15世紀後半になる。186は口縁部が上方に立ち上がり、胎土に砂粒が混じらず緻密な粘土を用いており、色調はにぶい赤褐色を呈する。乗岡編年の中世5b期新相にあたり、年代観は15世紀末頃になる。192は備前焼の甕。口縁部の玉縁が扁平化しており、乗岡編年の中世5a期にあたり、年代観は15世紀後半になる。

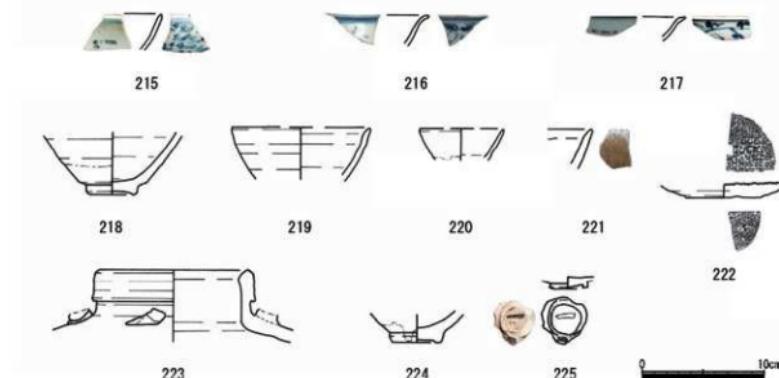
193～201は青磁である。193～197は碗である。193は口縁外面にヘラ描きで細蓮弁文を施し、被熱した可能性がある。上田分類のB IV類に比定され、年代観は15世紀後半から16世紀前半にあたる。194は雷文の下に蓮弁らしき文様をヘラ描きする。上田分類のC II類に比定され、年代観は15世紀半ば頃となる。195は碗である。外面にヘラ描きの細蓮弁文を施し、被熱した可能性がある。上田分類のB IV類に比定され、年代観は15世紀後半から16世紀前半にあたる。196は無文の端反り碗。上田分類のD II類に比定され、想定される年代観は14世紀後半から16世紀と幅が広い。197は無文の直縁碗。口縁端部が肥厚し、玉縁状を呈する。上田分類のE類に比定され、年代観は



第38図 遺構に伴わない遺物④ (1/4)

14世紀末から15世紀前半にあたる。198は器種不明。口縁端部に刻み目を施し、外面に蓮弁文を描く。小形の杯に類する形態が想定される。199は屈曲した口縁部。器種は不明だが、瓶型香炉や器台の破片となる可能性がある。200・201は碗の高台部。200は見込に櫛目の印花文を施し、高台内は無釉である。生産年代は15世紀から16世紀代と考えられる。201は見込に櫛目の印花文を施し、高台内面途中まで釉がかかる。高台の高さが低く、胎土が灰色を呈しており、生産年代は12世紀代に遡ると考えられる。

202～214は白磁である。202～206は碗。202は玉縁状の口縁を有する。大宰府分類の白磁IV類に比定され、年代観は11世紀末から12世紀になる。203も口縁部。大宰府分類の白磁V類に比定され、年代観は12世紀後半になる。204は小片で、外面下端付近にわずかに文様が残る。胎土や色調から中世前半に属すると思われる。205は端反り碗。206は高台で、大宰府分類の白磁IV類に比定され、年代観は202と同じである。207は皿の口縁部か。外面に竹の節状の圍線が1条みられる。208は小型の皿である。胴部下半及び高台は露胎であり、年代観は15世紀末から16世紀初頭と考える。209は皿の口縁部。210は端反り皿の口縁部。211・212は杯。いずれも口縁が外反



第39図 遺構に伴わない遺物⑤ (1/4)

する。213は内面が欠損し、外面のみであるが、竹の節状の圈線が1条巡る。釉薬の色調、胎土等が140と類似することから、梅瓶注口部の可能性がある。214は碗か。外面下部は釉薬がかからず露胎となり、内面は段を有する。釉薬の色調、胎土等が203と類似し、中世前半のものと思われる。

215～217は青花である。215は連子碗と呼ばれるタイプで、内口縁に圈線、外口縁に圈線を配し豹皮文を描く。小野分類の碗C群に比定され、年代観は15世紀後半から16世紀前半にあたる。216は端返り碗。内口縁に二重圈線、外口縁に二重圈線を配して唐草文を描く。小野分類の染付碗B群に比定され、年代観は15世紀前半から16世紀前半にあたる。217は端返り皿。内口縁に二重圈線、外口縁に圈線を配し、その下に唐草文を描く。小野分類の染付皿B1群に比定され、年代観は15世紀末から16世紀前半にあたる。

218～222は瀬戸美濃である。218・219は天目碗。218は浅めの内反り高台で、その端部が外に向かって面状に削られ疊付が狭くなる。外面は丁寧なヘラケズリで成形され、高台脇にやや段を有する。220・221は碗。221は外面に青磁の細蓮弁文を模した文様を線描きしている。218・221は藤澤編年の大窯1期に比定され、年代観は15世紀末から16世紀初頭にあたる。222は鉢皿であり、見込に格子状の御目が刻まれ、底部は糸切りである。223は産地不明の灰色陶器の壺。外面は灰赤色を呈し、口縁帯が肥厚し、短小な頸部下に横位の耳が付く。釉薬はかからず、岡山県域外からのらの搬入品と思われ、貿易陶磁の可能性もある。

224・225は近世の陶器である。224は肥前陶器の碗。胎土や高台の形状から、いわゆる「絵唐津」と称されるタイプで、生産年代は17世紀初頭となり、城館の存続期間より確實に後の時代のものである。小片ではあるが、同種の肥前陶器が他に6点確認されている。225は灰釉碗の高台部。高台内面に「一」、高台脇に「皿」という墨書が残る。詳細は不明だが近世のものと考えられる。

## (2) 土製品(第40図)

土製品のうち、遺構出土はC1のみで、他は包含層からの出土である。

C1～C3は土錘である。C1は土壤1から出土した。C2・3は完形品で、中膨らみ形となる。C4は土鉢である。C5は手づくね成形の土器を用いた埴堀である。器壁9mmで、外面には指頭圧痕が残る。銅の溶融に用いたと考えられ、内面底部及び口縁部に黒色及び赤色のスラグが認められる。

## (3) 石器・石製品(第41図)

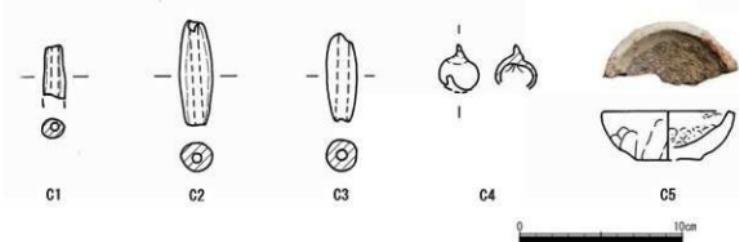
図示した石器・石製品のうち、遺構出土はS1・2・5・6であり、他は包含層出土である。

S1は用途不明の石器で、土壤3から出土した。断面は蒲鉾形であり、碁石の代用品等かもしれない。S2は凝灰岩質の軽石で、土壤3から出土した。S3は砥石。石材は泥岩で、表面および両側面に研磨痕がみられる。S4は安山岩質の軽石。S5は花崗岩製の茶臼。土壤1、溝3、土器だまり出土の3点が接合した。受け皿部まで残る下白部で、中央には直径3.4cmの芯木穴が穿孔されている。S6は安山岩製の石臼。上白部で、供給口は直径4.2cmを測る。中央には直径2.5cmの芯棒の受け部があり、中空の鉄芯が遺存している。側面には方形の挽き木穴が残り、幅4.0cm、深さ3.4cmを測る。挽き臼類は、S5・6の他、明確でないものを含め62点の破片が出土している。

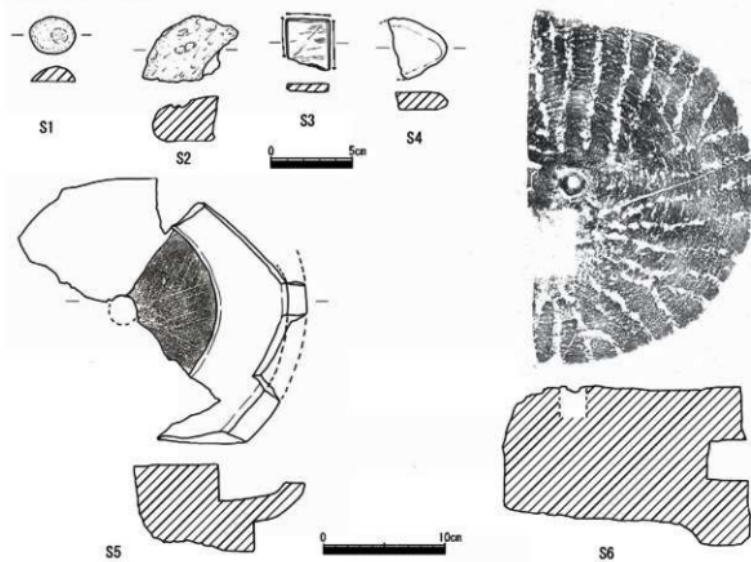
## (4) 金属製品(第42図)

108点が出土しており、大半が釘もしくは不明品である。図示したもののうち、M1～M5、M14が遺構出土、その他が包含層からの出土である。

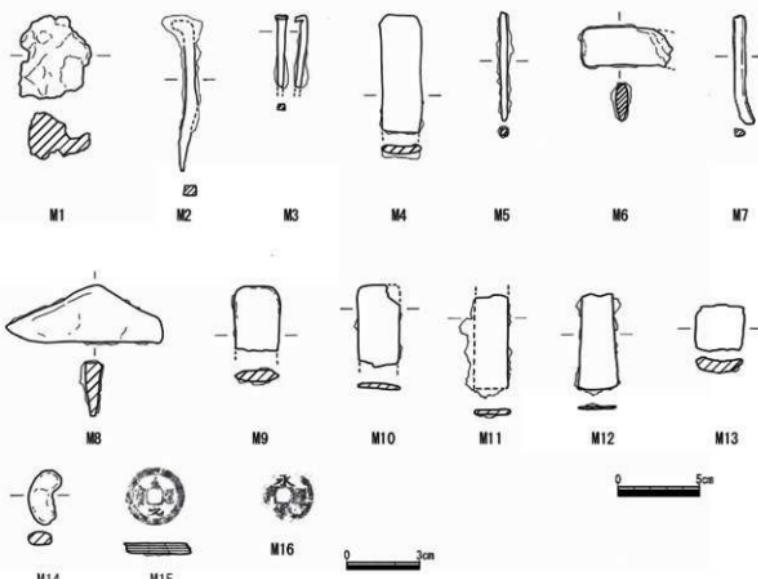
M1は鍛冶津で、掘立柱建物2から出土した。M2・3は釘で、掘立柱建物3から出土した。M4は板状鉄片で、土壤1から出土した。小札の可能性が考えられる。M5は棒状鉄片で、土器だまりから出土した。M6は形状から鎌と思われ、M8は火打金である。M9～11は小札と思われる。M12は板状鉄片、M13は鉄片で用途不明である。M14は銅滴で、土器だまりから出土した。M15は至道元宝が4枚重ねた状態で出土し、M16は永樂通宝である。錢貨は他に7点出土しているが、腐食が著しく年号を判読できなかった。



第40図 出土土製品 (1/3)



第41図 出土石器・石製品 (1/3・1/4)



第42図 出土金属製品 (1/3・1/2)

### 第3節 古代以前の遺構と遺物

#### 1 弥生時代の遺構

中世遺構の多くは黒褐色砂質土層上面で検出されたが、この砂層には中世以前の遺物が含まれていた。砂層は調査区全面にわたり堆積するが、1区では北東から南西方向に幅5~8mで帯状に盛り上がった範囲（第43図）があり、微高地の最高所であったと思われる。その北東端付近において弥生時代の土壙1基を確認した。

土壤9（第44図）

1区中央やや東寄りにあり、基盤層である黄褐色砂上面で検出した。西側上部は後世の削平を受けるが、直径335cmの円形を呈する。検出面から南側で約40cm、北側で約60cm下がった位置で段をなし、そこから床面まで緩やかに内傾する。床面の平面形は歪な円形を呈し、径70cmを測る。検出面から床面までの深さは161cmとなる。埋土は黒褐色砂質土に基盤層である黄褐色砂質土がブロック状に混じる。

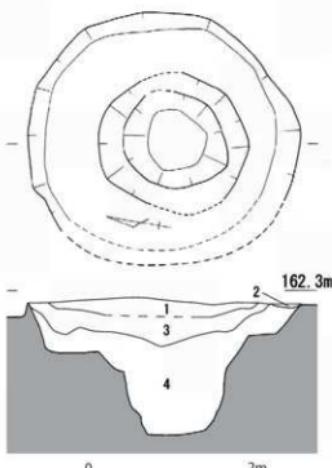
遺物は弥生土器が出土し、上段出土と下段出土の土器片の接合や同一個体とおぼしきものがあるため、遺構は一度に埋まったものと考える。平断面の形態から、素掘りの井戸の可能性も考えられる。時期は弥生時代後期後葉である。

#### 2 遺物

遺構及び黒褐色砂質土層の他、中世以降の遺構や包含層にも混入するかたちで、古代以前の遺物が出土した。大半は弥生土器であるが、古代の須恵器が少量含まれる。

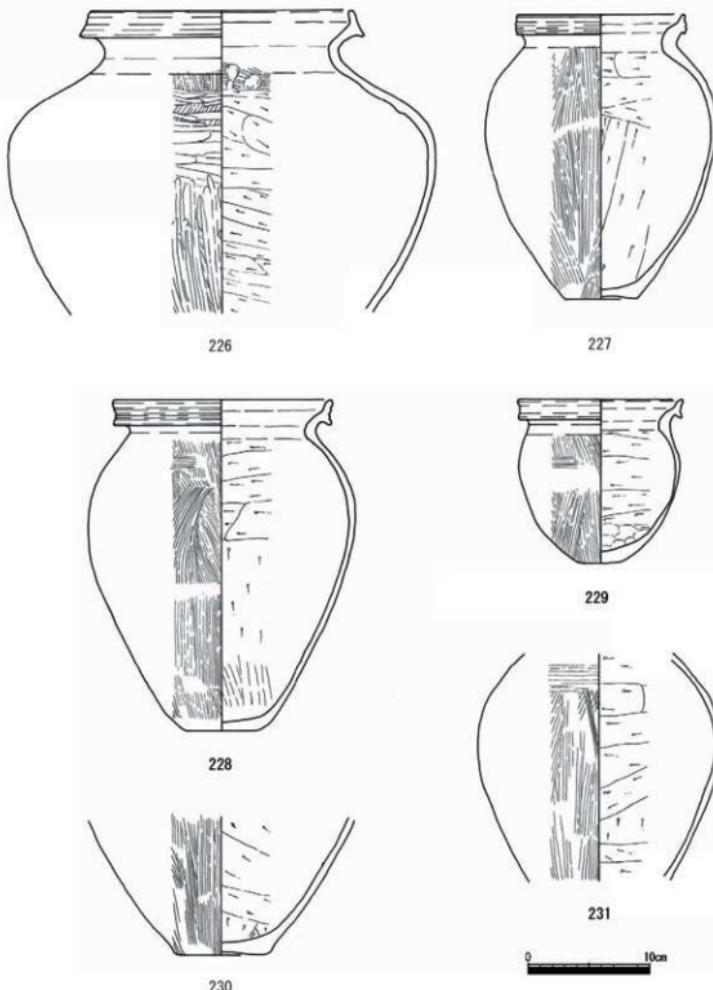


第43図 弥生時代遺構配置図 (1/800)



1 純黄褐色 (10YR5/3) 砂質土 (小穀含、一部後後の櫻丸)  
2 暗灰色 (10YR5/1) 砂質土 (中世柱穴、炭化物含)  
3 暗灰色 (N3) 砂質土 (穀含)  
4 黄灰色 (25Y5/1) 砂質土

第44図 土壙9 (1/60)



第45図 土壌9出土遺物① (1/4)

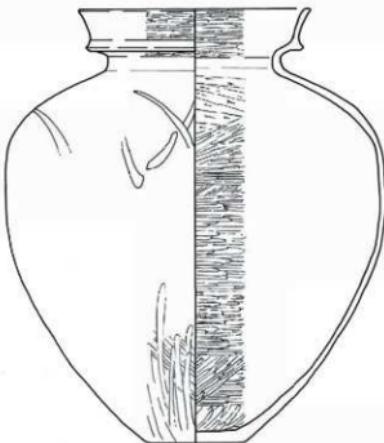
**土壌9** (第45・46図) 遺構中から弥生時代後期後葉に属する壺、甕が出土した。器面の摩滅が少なく、元の形状を留めるものが多い。226～231・234は土壌の上段から、232は下段を主体に一部破片が上段から、233は下段から出土した。

226は壺で、倒立した状態で出土した。口径21.0cm、胴径35.0cm、残存高24.8cmで肩部が張り

出す。口縁端部は上下に拡張し、ヨコナデを行い、端部周辺に赤色顔料が付着する。外面はハケメ調整の後、ヘラミガキを行う。内面は頸部直下までヘラケズリが達し、頸部にはハケメ、指頭圧痕が確認できる。

227～231は壺である。227は横向きの状態で出土した。口径13.6cm、胴径19.0cm、底径5.9cm、高さ23.3cmで胴部上半に最大径がくる。口縁端部は上方に短く拡張し、擬凹線文が施される。胴部外面はタテハケで、底面にもハケメが観察される。228は倒立した状態で出土した。口径17.8cm、胴径22.1cm、底径5.9cm、高さ27.2cmで胴部上半に最大径がくる。口縁端部は上下に短く拡張し、外面に擬凹線文を施す。外面はタテハケで、底面はハケメ調整の後、ナデ消しを行う。229は口径13.4cm、胴径12.4cm、底径3.2cm、高さ13.5cmで胴径が口径を下回る小形の壺である。口縁端部は上下に拡張し、内外面ともヨコナデを行う。外面はタテハケ主体で、底面にもハケメが観察される。内面はヘラケズリを主とし、底部に指頭圧痕が観察される。230は底部で、底径7.7cm、胴部残存径22.1cm、残存高11.2cmを測る。外面に煤が付着する。厚みのある底面は、ハケメ調整の後、ナデ消しを行う。231は胴部で、残存径19.8cm、残存高19.3cmを測る。外面はタテハケで仕上げるが、頸部近くにはタタキが看取される。内面はヘラケズリである。炭化物、煤が付着する。

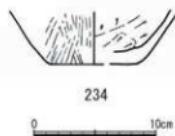
232～234は壺。232は口径18.0cm、胴部径31.5cm、底径7.8cm、高さ35.5cmで、やや肩の張った形態である。薄手の口縁拡張部は外反し、端部は面取りされている。内外面ともヘラミガキを行



232



233



234

第46図 土壙9出土遺物② (1/4)

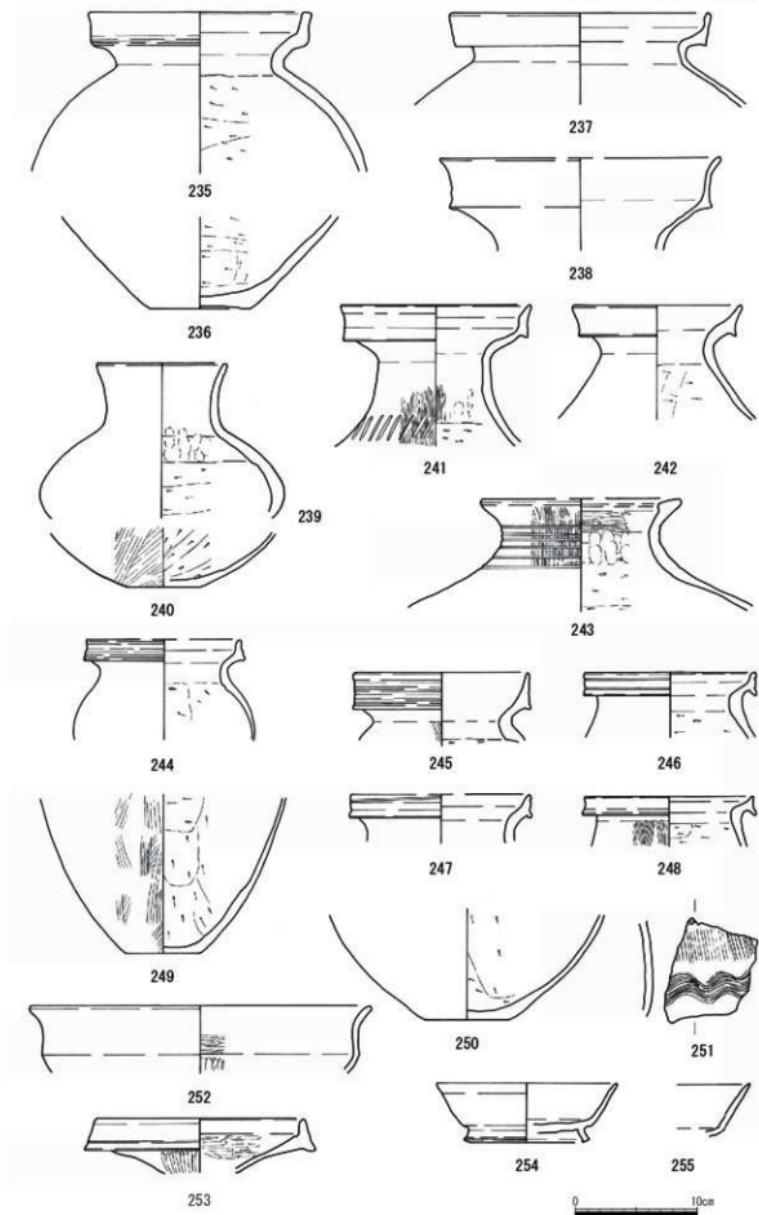
う。胴部外面は丁寧に磨かれ、内面もヘラケズリの後、ヘラミガキまたはナデ調整を行う。口縁部から頸部にかけて赤色顔料を塗布した精製品である。また、胴部に籠材の痕跡を残し、本来は籠材で編み上げられた状態で廃棄され、腐朽したものと考えられる。**233** は口径 18.8cm、胴径 29.0cm、残存高 16.8cm を測る。外面が黒色を呈する。内面はヘラケズリで、外面は口縁に擬凹線状の条線が認められ、胴部はタテハケである。**234** は底部で、底径 7.1cm、残存高 4.4cm を測り、胎土や色調から **233** と同一個体と思われる。

**遺構に伴わない遺物（第 47 図）** 多くは弥生時代後期後葉の壺もしくは甕である。黒褐色砂質土層から出土したほか、中世以降の遺構や包含層にも混入するかたちで、1 区、2 区全体から出土した。

**235～243** は壺である。**235** は口縁端部が面状となる。外面に擬凹線状の条線が施され、胴部は明瞭ではないがヨコハケと思われる。内面は、口縁をヨコナデ、頸部直下までヘラケズリが達する。口縁内面から外面にかけて、赤色顔料が塗布される。**236** は、**235** の底部と考えられる。外面はタテハケと思われるが、明瞭でない。内面は横方向のヘラケズリを主とする。**237** は器面が摩滅しているが、外面は口縁部に擬凹線状の条線を施し、胴部はタテハケと思われる。内面は、口縁部をヨコナデ、頸部直下までヘラケズリが達する。**238** は二重口縁の上部が屈折し外反する。器面が剥落しているが、口縁内外面にヨコナデが観察でき、赤色顔料が残る。**239・240** は直口壺で同一個体と思われる。**239** は頸部内外面に成形時の指頭圧痕が残り、その上からヨコナデを施す。胴部外面はヘラミガキ、内面は頸部直下にシボリの痕跡があり、その下部はヘラケズリとなる。**240** は、外面及び底面に幅広なタテハケが看取され、内面は放射状にヘラケズリを行う。**241** は口縁内外面にヨコナデを行い、内面が屈折する。頸部外面はタテハケを行った後に刺突文を施す。内面にはシボリ痕が看取され、その下にヘラケズリを行う。**242** は口縁内外にヨコナデを行う。胴部外面及び頸部内面にはヘラミガキまたはナデ調整が看取され、内面下部にヘラミガキが看取される。**243** は口縁端が平坦面をなす、本地域では例外的な形態である。平坦面に擬凹線文が施され、その上にナデ消しを行っている。外面は頸部にタテハケを行ったのち、6 条の条線を施す。肩部はヘラミガキとなる。内面は、頸部にヘラミガキまたはナデ調整、肩部にヘラケズリを行う。

**244～251** は甕である。**244～246** は口縁外面に擬凹線文、内面はナデ調整である。**247** はナデ調整の後、1 条の条線を施している。**247** を除き、頸部直下までヘラケズリが達する。**249** は外面はタテハケ、内面はヘラケズリを行う。**250** は摩滅が顕著であるが、底面に板目の痕跡を残す。**251** は肩部の破片。櫛描の波状文を施したもので、後期末葉に下る可能性もある。

**252** は鉢であり、内外面にヘラミガキを行っている。備後北部からの搬入品の可能性がある。**253** は器台。口縁部外面は擬凹線文を施したのち、ナデ消しを行う。胴部は縱方向のヘラミガキを行う。内面はヘラケズリ後にヘラミガキまたはナデ調整を行う。**254・255** は須恵器の杯身である。胴に丸みがあり、底部の稜線が明瞭でないため、7 世紀末頃のものと思われる。須恵器はこの他、内面に青海波文を有する甕の破片などが少量出土している。



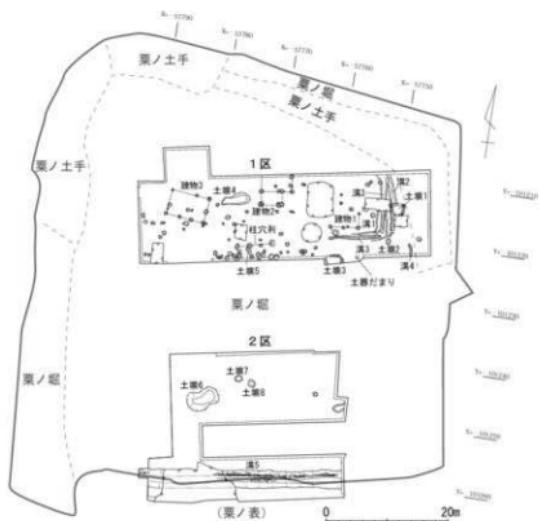
第47図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

## 第4章　まとめ

阿波土居跡は中世城館跡であり、今回の調査で、城館に関連する遺構として、掘立柱建物3棟、柱穴列1組、土壙8基、溝5条、土器だまり1ヶ所を検出した。また、中世遺構面の下位から、弥生時代後期後葉の土壙1基が確認され、弥生時代には旭川の氾濫原に形成された微高地として陸化し、集落が営まれていた可能性が高いことが判明した。本章では、中世の調査成果に対象を絞り、阿波土居跡の性格と意義についてまとめる。

### 1　城館の存続期間と遺構の変遷

まず、城館推定範囲と検出された遺構の位置関係を整理する（第48図）。旧地形及び字名から阿波土居跡の推定範囲は、東西約71m×南北約67mとなり、概ね平面方形を呈する。岡山県内の平地城館を集成した島崎東氏によれば、県内の城館は、一辺150m以上の大規模館、70m以上150m未満の中規模館、50m以上70m未満の小規模館等の3分類に区分され<sup>(1)</sup>、これに従えば、阿波土居跡は小規模館に相当する方形居館と考えられる<sup>(2)</sup>。今回の調査では、2区南端において、溝5が東西約33.2mにわたり検出され、推定範囲の南辺と合致するため、城館域南側を区画した溝と判断してよい。城館内の屋敷地の広さは、一辺約58.5mとなり、約半町四方の規模である。



第48図　城館範囲と遺構配置（1/800）

（切絵図及び航空写真に基づく城館推定範囲と遺構配置図を照合し作成。）

屋敷地南半部にあたる2区では、精査したにも拘わらず、遺構は希薄であり、中島城<sup>(3)</sup>のように元来広場的な利用が想定できようか。一方、屋敷地北半部にあたる1区では掘立柱建物は小規模な3棟のみであったが、比較的多くの遺構・遺物を確認し、日常的な居住や政治的な空間の一部であったと考えられる。個別の遺構では、南辺にあたる溝5と建物1・2、溝3は方位が

合致する。また、建物3、溝2は外側に位置する「粟ノ土手」や「粟ノ堀」の旧地形と方位を揃えるかのように見受けられる。北半部には旧地形および字名から考えて、屋敷地外側に防護施設である土塁と堀（もしくは溝）が巡らされていた蓋然性が高い。1区東端付近は「粟ノ土手」にあたり、工場建設以前は周囲より一段高く、畠利用されていたことから、調査では土塁の検出が期待されたが、痕跡は確認できなかった。ただし、溝2及び土壙1、溝4より東側付近に明確な遺構が検出されず、この部分の調査区断面でのみ灰黄褐色砂質土（第8図9層）を確認している点は注意すべきであり、これが土塁の盛土最下部に相当するものであった可能性も考えられる。

次に、阿波土居の存続期間を検討する。当地域では中世の土師器編年が未確立であるため、詳細な編年が整備されている備前焼を基準に考える。備前焼以外の遺物とともに、第3章の遺物の稿に記した遺構出土遺物の年代観を第2表にまとめている。擂鉢を中心とする備前焼の年代幅は、15世紀半ば頃（乗岡編年中世4b期）から16世紀半ば頃（同中世6b期）のおよそ100年間で捉えられる。15世紀前半以前の遺物には、青磁碗（34）、白磁脚（91）・碗（106）・皿（139）があるが、これら貿易陶磁は使用が長期間に及ぶことが珍しくない。遺構に伴わない遺物についても、同様の年代観であり、16世紀後半以降の遺物は17世紀初頭の肥前陶器224などごく少量に限られる。つまり、阿波土居跡は15世紀半ば頃に居館が築かれ、16世紀半ば頃までにその機能を喪失し、その後は屋敷地としての土地利用は無かったものと理解するのが妥当であろう。

個別の遺構を見ると、遺構間で出土遺物が接合する、土壙2・3・溝3・5、土器だまりは並存関係にあり、年代の下限は備前焼擂鉢（50・60）・壺（130）から16世紀半ば頃（乗岡編年中世6b期）と考えられる。これらの遺構と遺物の接合関係を有さない、建物1～3、柱穴列、土壙1は、出土遺物が少なく時期を捉え難いが、16世紀代の遺物が混じらないため、概ね15世紀後半の範疇で理解できようか。さらに建物1・2は溝3・5と、建物3、溝2は土塁・堀と関連づけられるという先の想定を踏まえるなら、遺構の切り合い関係から溝2→土壙1→溝3の新旧は明らかであるため、前者が後者に後出すると推察できる。つまり、15世紀半ば以降に、①建物3、溝2、北半部の土塁・堀→（土壙1）→②建物1・2、土壙2・3、溝3・5の順で整備され、16世紀半ば頃に廃絶に

時期／遺構	1区										2区														
	建物1		建物2		建物3		柱穴列		土壙1		土壙2		土壙3		溝3		土器だまり		土壙6・8		溝5				
	備前	青磁	備前	他	備前	青磁	備前	他	備前	青磁	備前	他	備前	他	備前	他	備前	他	備前	他	備前	他	備前	他	
中世前半																	91							106	
14世紀後半	前半																								
15世紀後半	後半																								
16世紀前半	前半																								
16世紀後半	前半																								
17世紀前半	前半																								
18世紀後半	前半																								
19世紀後半	前半																								
20世紀後半	前半																								
21世紀後半	前半																								
22世紀後半	前半																								
23世紀後半	前半																								
24世紀後半	前半																								
25世紀後半	前半																								
26世紀後半	前半																								
27世紀後半	前半																								
28世紀後半	前半																								
29世紀後半	前半																								
30世紀後半	前半																								
31世紀後半	前半																								
32世紀後半	前半																								
33世紀後半	前半																								
34世紀後半	前半																								
35世紀後半	前半																								
36世紀後半	前半																								
37世紀後半	前半																								
38世紀後半	前半																								
39世紀後半	前半																								
40世紀後半	前半																								
41世紀後半	前半																								
42世紀後半	前半																								
43世紀後半	前半																								
44世紀後半	前半																								
45世紀後半	前半																								
46世紀後半	前半																								
47世紀後半	前半																								
48世紀後半	前半																								
49世紀後半	前半																								
50世紀後半	前半																								
51世紀後半	前半																								
52世紀後半	前半																								
53世紀後半	前半																								
54世紀後半	前半																								
55世紀後半	前半																								
56世紀後半	前半																								
57世紀後半	前半																								
58世紀後半	前半																								
59世紀後半	前半																								
60世紀後半	前半																								
61世紀後半	前半																								
62世紀後半	前半																								
63世紀後半	前半																								
64世紀後半	前半																								
65世紀後半	前半																								
66世紀後半	前半																								
67世紀後半	前半																								
68世紀後半	前半																								
69世紀後半	前半																								
70世紀後半	前半																								
71世紀後半	前半																								
72世紀後半	前半																								
73世紀後半	前半																								
74世紀後半	前半																								
75世紀後半	前半																								
76世紀後半	前半																								
77世紀後半	前半																								
78世紀後半	前半																								
79世紀後半	前半																								
80世紀後半	前半																								
81世紀後半	前半																								
82世紀後半	前半																								
83世紀後半	前半																								
84世紀後半	前半																								
85世紀後半	前半																								
86世紀後半	前半																								
87世紀後半	前半																								
88世紀後半	前半																								
89世紀後半	前半																								
90世紀後半	前半																								
91世紀後半	前半																								
92世紀後半	前半																								
93世紀後半	前半																								
94世紀後半	前半																								
95世紀後半	前半																								
96世紀後半	前半																								
97世紀後半	前半																								
98世紀後半	前半																								

至るという遺構の変遷を描くことができる。想像をたくましくすれば、①の整備後に、屋敷地の拡張を伴うかたちで溝5が築かれ、それを契機として、②の整備が次第に進められたと読み解くことができるかもしれない。

## 2 溝5について

今回の調査で検出された、城館の南辺を区画する溝5は、北側法面に石積みを伴うことが注目される。溝の最下層や石積み裏側から目立った遺物が出土しておらず、溝の掘削や石積みが行われた詳細な時期の特定は困難であるが、溝がある程度埋没した段階（第24図第3層）で、その時点の底面を利用し石積みが築かれ、16世紀半ば頃の城館廃絶時に埋め立てられたものと判断している。

溝または堀の法面に石を用いた類例として、鏡野町久田堀ノ内遺跡<sup>(4)</sup>や河内構遺跡<sup>(5)</sup>が知られるが、これらは法面に貼り石が施されたものであり、石材が垂直に立ち上がる本遺跡とは異なる。裏込め石を用いず、未加工の川原石を小口に揃えて積み上げており、天正期以降の石垣に比べ未発達な構築技術ではあるが、15世紀後半から16世紀前半という年代は、岡山県内における石積みや石垣としては古い時期にあたり、阿波土居跡のように石垣状に垂直に立ち上がる例は、県内の発掘調査がなされた中世の平地居館においても極めて少ない事例である。

法面に石積みを築く目的は、第一義的には法面の崩落防止のためと考えられるが、純粹に法面の保護を果たすためだけならば、法面を貼り石により覆う方が合理的であると考えられるが、わざわざ不安定な石積みを築き、しかも溝の幅が狭まる結果を生じている。幅約1.5～2.1m、深さ約0.84mという狭小な規模から考えても、堀のような防御機能については疑問視される。むしろ屋敷地の正面観を整美にし、屋敷の主の権威を誇示する視覚的な効果を意図したものであったと解釈できる。

また、溝5の埋め立ては、埋土（第24図1・2層）から出土した遺物と1区土器だまり周辺の遺物が接合するため、1区南東部周辺の遺構に見られる廃棄行為（片付け）と同時期に行われたと判断できる。屋敷地内で戦の痕跡を示唆する状況が見当たらないことも併せ、城館の廃絶は、屋敷の主が意図的に施設を取り壊し、屋敷地を放棄した結果と考えておきたい。

## 3 出土遺物の様相

### （1）土師器

出土した土師器はすべて皿であり、回転台（ロクロ）成形によるものと、手づくね成形によるものの2者があり、後者が主体となる。回転台成形のものは口径6～9cmと、11～15cmの大小2グループに分かれ、大形品は底が深くなる傾向がある。手づくね成形は、口径7～8cm、口径9～10cm、口径11.5～13.0cmを中心とし、法量の差は漸移的である。器壁は回転台成形のものに比べ手づくね成形のものが概して厚く、厚さ0.5cm前後が主体をなし、大半の器高は約2cm以内に収まる（第49図）。

旭川中流域の中世城館のうち、これまでに発掘調査が行われた高田城<sup>(6)</sup>、高田城三の丸遺跡<sup>(7)</sup>、篠向城<sup>(8)</sup>、赤野遺跡<sup>(9)</sup>では、土師器皿は阿波土居跡同様に手づくね成形が主体をなす<sup>(10)</sup>。各城館の詳細な存続期間には不明な点もあるが、少なくとも15世紀から16世紀にかけて、旭川中流域の城館においては、手づくね成形の土師器皿が盛んに使用される状況が生じていたと評価できよう。

阿波土居跡と高田城三の丸遺跡、赤野遺跡の土師器皿の法量を比較すると、回転台成形では、6~10cm、13~17cmの2グループに分かれる。一方で、手づくね成形においては、明確なまとまりを示さず多法量の皿が出土している。高田城三の丸遺跡出土土師器の胎土分析では、回転台成形と手づくね成形によるものとの間で一定の差異がみられ<sup>(11)</sup>、報告書において、橋本惣司氏は「ロクロ成形の土師器は移入された可能性、工人は別々に存在した可能性」を指摘している<sup>(12)</sup>。

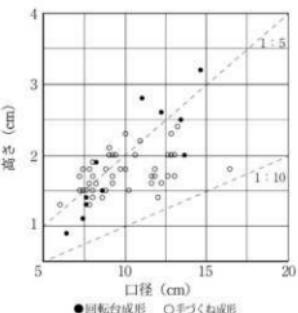
一方で手づくね成形のものは、胴部と底部との境界が明瞭でなく、底部が丸みを帯び、口縁部が外反し立ち上がるものが多い。ナデ調整についても、内面見込を一定方向に、その後口縁内面を右回りに一周するものが一定数含まれる。これらは、京都産土師器皿の特徴に通じるものである。

旭川中流域と近い距離にある、赤茂館<sup>(13)</sup>(真庭市・直線距離で13km)、田治部氏屋敷址<sup>(14)</sup>(新見市・18km)、久田堀ノ内遺跡(鏡野町・17km)では、いずれも回転台成形で底部にヘラ切りまたは条切り痕を残す土師器皿が主体をなし、周辺地域の中世城館と比べ、本地域の城館のみが手づくね成形主体という特色ある地域相を見せる。

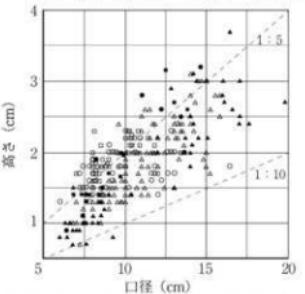
土師器皿は領主や家臣が城館・屋敷で催す儀礼や宴席で使用され、16世紀代に入ると京都産土師器を模した手づくね成形の土師器が各地で出現し、その受容は、室町幕府の作法を規範とする献杯儀礼や宴席の様式の地方波及を背景にしたものと考えられている。ただし、その多くは、工人移動による直接的な受容ではなく、要素の採用に地域差が伴う模倣生産だったと、中井淳史氏は評価している<sup>(15)</sup>。

旭川中流域という分布圏は、すなわち三浦氏の支配領域と重なるものであり、本地域での手づ

(阿波土居跡)



(阿波土居跡・高田城三の丸遺跡・赤野遺跡)



第49図 城館出土土師器皿の法量

くね成形土師器皿盛行の背景に、幕府奉公衆を務めた三浦氏やその周辺において、土師器使用の場での「京都らしさ」への意識が存在していたかもしれない。もちろん前代から繋がる在地の土器製作技術という評価も現段階では排除しきれず、これについては、城館調査の増加や通常の集落遺跡の様相解明など発掘調査による今後の資料蓄積を待って改めて追求する必要がある。

## (2) 陶磁器類

今回の調査で出土した、備前焼を除く陶磁器類の組成を第3表にまとめている。貿易陶磁の主体をなす青磁・白磁・青花は破片数で177点が出土した。内訳は青磁80点(45.2%)、白磁68点(38.4%)、青花29点(16.4%)となる。水澤幸一氏は、遺跡から出土する青磁・白磁・青花の比率の時期的な変化を明らかにしており、青磁は、通常の遺跡では15世紀後半では6割超え、16世紀第1四半期は3割強、白磁は15世紀後半から16世紀第1四半期にかけて2~3割、青花は大多数の遺跡では15世紀後半は2割以下で、16世紀前半から1570年頃までは3割程度としている<sup>[16]</sup>。本遺跡では、白磁がやや多い傾向にあるが、概ね15世紀後半から16世紀前半にかけての全国的な様相に合致している。青磁・白磁の一部には中世前半に遡るものも存在し、調査では当該期にあたる遺構や他の遺物は確認していないため、これらは屋敷の主が伝世品を入手・保有したものであろう。

碗、皿、杯といった当該期の城館に通有の供膳具のみならず、複数の盤や香炉、小片のため確定困難だが梅瓶の可能性がある白磁、中国南部産と推定される褐釉陶器の壺などいわゆる威信財として評価されるような器種も出土しており、屋敷の主の経済力がうかがわれる。

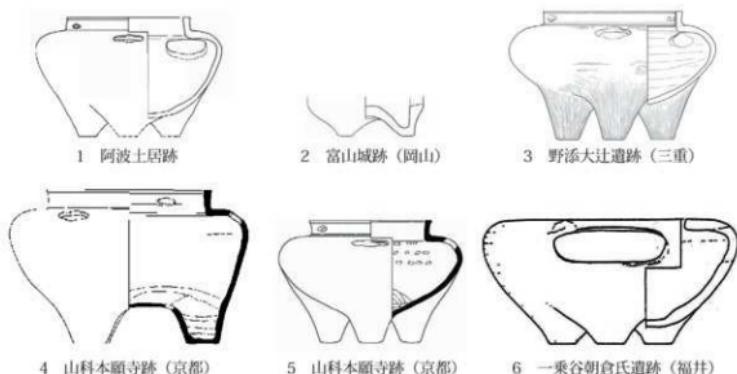
## (3) 瓦質風炉

阿波土器跡を特徴づける遺物として、瓦質土器の風炉、瀬戸美濃の天目碗や茶臼といった茶道具の存在が挙げられる。また、岡山県内では来光寺跡<sup>[17]</sup>に次ぐ出土事例となる備前焼の波状口縁鉢、黒色陶器壺、褐釉陶器壺、香炉なども茶の湯の場にて用いられた可能性が十分考えられる。

特に乳足を有する瓦質風炉は、全体の形態の分かれるものが全国的にも数例確認されているに過ぎず注目される。岡山県内では富山城出土品<sup>[18]</sup>が同様の形態であった可能性があり、三重県野添大辻遺跡<sup>[19]</sup>、京都府山科本願寺跡<sup>[20]</sup>の出土品は、阿波土器出土品と特徴が類似する(第50図)。こ

種別	青磁					白磁					青花					城館 城郭 施設 居宅 墓					廻戸実造		近隣 その他の 組	合計						
分類	中 国 製 品		B II	B IV	C2 or E	不明	盤	青 磁	不 明	中 國 製 品	不 明	D	E	不 明	桶	香 炉	桶	中 國 製 品	不 明	B	C	不 明	把手	蓋	天 日					
	高 脚 高 脚 平 手	高 脚 高 脚 平 手	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)			
青磁破片数	1 (1)	1 (1)	2 (2)	3 (2)	10 (10)	3 (3)	9 (9)	2 (2)	2 (2)	7 (7)	6 (6)	1 (1)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	4 (4)	2 (2)	1 (1)	2 (2)	2 (2)	4 (4)	1 (1)	5 (5)	9 (9)	1 (1)	14 (14)	2 (2)	1 (1)	127 (127)	
青花破片数		1 (1)	1 (1)	3 (3)	13 (10)	10 (10)	1 (1)	18 (18)			2 (2)		5 (5)		2 (2)	31 (31)		2 (2)	8 (8)	2 (2)	1 (1)	69 (69)	2 (2)	5 (5)	2 (2)	6 (6)	1 (1)	184 (184)		
小計	1 (1)	1 (1)	3 (3)	4 (4)	13 (13)	16 (16)	19 (19)	3 (3)	20 (20)	7 (7)	6 (6)	1 (1)	4 (4)	3 (3)	2 (2)	6 (6)	4 (4)	2 (2)	2 (2)	31 (31)	1 (1)	2 (2)	21 (21)	1 (1)	19 (19)	4 (4)	6 (6)	7 (7)	1 (1)	309 (309)
合計	80					68					29					29														

第3表 貿易陶磁等の組成



第50図 各地における乳足の瓦質風炉 (1/10)

これらの風炉は、16世紀初頭から前半に製作時期が求められ、獣脚を有する同種より希少であるため、より上位に位置づけられる品と考えられている<sup>(21)</sup>。

風炉は、京・堺などの都市的な生活様式に伴う器物であり、地方では城館・寺院などの屋敷の中 心部より出土し、極めて特殊な商品価値を有するものとされ、故に通常の流通構造に乗らない人的なネットワークの中で移動する側面が考慮されている<sup>(22)</sup>。16世紀前半は、茶の湯が大成される前段階にあたるが、阿波土居跡の屋敷の主は、京から遠く離れた勝山の地にあって、直接的か間接的か明らかでないが、こうした希少品の入手を可能とする京との繋がりを有し、政治儀礼の場における接客や饗應の場において、茶を使用する文化的素養のある人物であったことがうかがえる。

#### 4 おわりに

以上のとおり、阿波土居跡について、15世紀半ば頃から16世紀半ば頃にかけて存続し、明瞭な変遷は迫れないが、最終的には、「正面を石積みの溝で区画し、周間に土塁と堀を巡らせた、約半町四方の屋敷地を有する方形居館」という城館の全体像を、発掘調査から描くことができた。

屋敷地内では、多様な遺物が出土し、特に威信財とみなされるような貿易陶磁品や瓦質風炉に代表される茶道具の保有など、国人領主層の城館と比べても遜色のない内容と評価できる。ただし、在地レベルでも城館規模の階層性が顕著になるといわれる15世紀末から16世紀前半の段階で、屋敷地が約半町四方に過ぎないことを考慮すれば、阿波土居跡に構えた屋敷の主に三浦氏そのものを比定するのはやや困難といえよう。したがって、屋敷の主は、三浦氏が15世紀から16世紀にかけて、旭川中流域における有力国人領主として台頭し、その地位を確立していく中で、同氏に従い、一定の地位や経済力を有していた人物と考えたい。その人物として、第2章第2節で指摘された三浦氏の有力家臣・金田氏を考えても、今回の調査成果と大きな矛盾は生じない。

近江地方を中心に村落と方形館のあり方を分析した中井均氏によると、領主の居館と集落とが一定の距離を置いて構成される「居館分離型」は、従来の村落領主や村落内から出現した領主ではなく、外來の権力者が村落と一定の距離を保つ状態で構えたものであり、村落内に城主等の伝承などは伝わらない場合が多いとされる<sup>220</sup>。

中州状の微高地という阿波土居跡の立地特性や、「作陽誌」が記された17世紀末の時点で、すでに阿波土居跡に関する詳細な記載がなされなかった状況は、三浦氏から離反した金田氏のその後が消息不明であることと相まって、中井氏が示す「居館分離型」の在り方に通じるものがある。また、報告書作成の過程で、明治期の阿波土居跡周辺が、金田氏の後裔（勝山金田氏）の菩提寺の寺有地であったことが判明し、これも金田氏と阿波土居跡の関係性を示す傍証になりえるかもしれない。

今回の調査により、文献史料のわずかな記述と地名により比定された中世城館を実際に確認し、県内でも貴重な遺構や出土品をはじめとする詳細な内容を把握し、その成果に基づき、高田三浦氏周辺の人物を屋敷の主に推定できた意義は大きい。今後は周辺の遺跡と比較検討することにより、この地域における中世社会の具体的様相がさらに明らかになることを期待したい。

## 註

- (1) 島崎 東 2009「岡山城下の中世平地城館について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』221 岡山県教育委員会
- (2) 中世寺院跡であった可能性も検討したが、それを示す遺構や明確な仏具の出土は無く、「作陽誌」においても、阿波土居について寺院を示唆する記述が無いことも踏まえ、結論として中世城館跡という位置づけに至った。
- (3) 島崎 東・園 泰歩編 2009「中島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』221 岡山県教育委員会
- (4) 弘田和司編 2003「久田船ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』192 岡山県教育委員会
- (5) 江見正己編 2003「河内拂道跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170 岡山県教育委員会
- (6) 版元 崇編 2015「真庭市指定史跡高田城統合調査報告書」 真庭市教育委員会
- (7) 橋本懶司編 2005「高田城三の丸遺跡」勝山町教育委員会
- (8) 池上 博編 2007「篠向城跡」NTT ドコモ中国受信施設建設事業埋蔵文化財調査委員会
- (9) 岡山県教育委員会編 1974「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3 岡山県教育委員会
- (10) 調査書の遺物観察表に口徑・器高とも記載された土師器皿のうち、手づくね成形品の占める割合は、阿波土居跡では全60点中48点(80%)、高田城三の丸遺跡では、全180点中125点(69%)、赤野遺跡(A5号ピットのみ)では、全55点中47点(81.0%)となる。篠向城跡では、帶曲輪の調査において土師器皿の4割を超えるとされる。高田城出土品は筆者が実見し、明らかに手づくね成形のものが中心と判断できた。
- (11) 白石 純 2005「三の丸跡出土の土師器・瓦の胎土分析」『高田城三の丸遺跡』勝山町教育委員会
- (12) 橋本懶司 2005「まとめ」『高田城三の丸遺跡』勝山町教育委員会
- (13) 切引(森田)友子・岩崎仁司 1986「谷尻遺跡赤茂地区」[北房町埋蔵文化財発掘調査報告] 4 北房町教育委員会
- (14) 高畑知功編 1988「田治部氏屋敷跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』67 岡山県教育委員会
- (15) 中井淳史 2011「京都系土器群の展開と流通」「考古学と室町・戦国期の流通」高志書院
- (16) 水澤幸一 2014「戦国期武家の日常使いの貿易陶磁の実像」『国立歴史民俗博物館研究報告』182
- (17) 尾上元規・内藤善史 2006「来光寺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』199 岡山県教育委員会
- (18) 出宮惟尚編 1969「富山城跡第2次調査報告」富山城跡調査団
- (19) 桜井拓馬・伊藤亘 2015「野添大辻遺跡(第2次)」発掘調査報告書『三重県埋蔵文化財調査報告』365 三重県埋蔵文化財センター
- (20) 柏田有香 2012「N山科本願寺跡」「京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度」京都市文化市民局  
柏田有香・馬瀬智光 2013「N山科本願寺跡」「京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度」京都市文化市民局
- (21) 佐藤アリスからご教示を受けた。
- (22) 佐藤アリス 2011「中世後期の流通と瓦質土器」「考古学と室町・戦国期の流通」高志書院  
水澤幸一 2009「中世後期における瓦器の位相」「日本海流通の考古学－中世武士団の消費生活－」高志書院
- (23) 中井 均 2020「居館と村落—近江を中心とした分類の試みー」「中世城館の実像」高志書院

# 遺物観察表

## 土器・陶磁器類

- 「法量」について、「-」は計測不能、口径・底径の「( )」は径が1/6未満の場合の復元値、器高の「( )」は残存値を表している。

## 土製品・石器・石製品・金属製品

- 「重量」は、現状の最大値を記した。
- 「計測値の「-」」は計測不能、「( )」は残存値を表している。

## 土器・陶磁器類一覧

収蔵番号	種別	器種	遺構名	法量(cm)			外面 色調	備考	整理 番号	
				口径	底径	器高				
1	土器部	壺	複数遺構 (1区)	16.4	-	(1.8)	2.5V3/1黄灰	複合: 土器下層、土器があり / 備考: 回転台成形、被熱	210	
2	瓦質土器	甌	複数遺構 (1区・2区)	22.2	-	24.5	10V86/4浅黃緑	複合: 土器2、甌3、土器だまり、2区甌5 / 產地: 大和・年代: 16C初 - 沈平	216	
3	備前焼	甌	複数遺構 (1区・2区)	50.6	38.0	93.0	10R5/3赤褐	複合: 土器2、甌3、土器だまり、2区甌5 / 年代: 桥端5c、備前5c / 備考: 16C初 - 有	215	
4	備前焼	甌	複数遺構 (1区・2区)	52.4	-	(50.0)	10R3/1暗赤灰	複合: 土器3、土器だまり、2区甌5 / 年代: 備前5c	214	
5	備前焼	甌	複数遺構 (1区)	42.2	-	(48.5)	3R2/1黒無 3V4/1灰	複合: 土器3、土器だまり / 年代: 備前5c / 備考: 製印有	213	
6	備前焼	甌	複数遺構 (1区)	(31.0)	-	(17.0)	10R4/2灰赤	複合: 土器3、土器だまり / 年代: 備前5c	218	
7	備前焼	水屋甌	複数遺構 (1区)	36.8	-	(5.0)	10R4/1暗赤灰	複合: 土器2、甌3、土器だまり / 年代: 備前5c	73	
8	備前焼	甌	複数遺構 (1区)	15.6	-	(30.9)	N5/灰	複合: 土器2、甌3、土器だまり / 年代: 備前5c / 備考: 製印有	185	
9	備前焼	甌	複数遺構 (1区)	-	13.2	(7.7)	7.5R4/3甌市面	複合: 土器2、甌3、土器だまり / 年代: 備前5c	80	
10	備前焼	種付	複数遺構 (1区)	29.8	-	(16.4)	5R4/1暗青灰	複合: 土器2、土器だまり / 年代: 備前5c / 備考: 製印有	79	
11	備前焼	形状口鋸歯	複数遺構 (1区)	29.0	21.8	(11.2)	13.2	2.5V4/1黄灰	複合: 土器2、土器だまり / 年代: 備前5c / 備考: 被熱	184
12	備前焼	水屋甌	複数遺構 (1区)	-	-	(8.2)	10R4/1暗赤灰	複合: 土器2、甌3、土器だまり / 年代: 備前5c / 備考: 被熱	81②	
13	青磁	瓶	複数遺構 (1区・2区)	-	-	(3.8)	10Y6/2オリーブ灰	複合: 土器2、甌3、土器だまり / 年代: 備前5c / 備考: 文字・被熱 / 製造: 龍泉系 / 備考: 61と同一鉄体	141	
14	青花	壺	複数遺構 (1区)	14.0	7.6	3.6	N8/灰白	複合: 土器2、土器だまり / 文様: 青花唐草文・十字花文・團練 / 產地: 龍泉系 / 年代: 明中	109	
15	窓戸美濃	鉢	複数遺構 (1区)	10.4	4.8	3.1	2.5V8/1白	複合: 土器3、土器だまり / 年代: 後期IV	107	
16	柳柄陶器	甌	複数遺構 (1区)	(10.0)	-	(9.0)	10Y82/1黒	複合: 土器2、甌3、土器だまり / 產地: 中國南部 / 備考: 14世紀同一直体	161	
17	黒色陶器	甌	複数遺構 (1区)	(6.2)	(6.4)	(8.0)	N4/灰	複合: 土器2、甌3、土器だまり / 產地: 不明	108	
18	土器部	壺	律物1 (P2)	-	-	1.5	7.5V87/1明褐色	備考: 14世紀同一直体	48	
19	土器部	壺	律物1 (P4)	-	-	1.2	10Y86/3暗黃緑	備考: 律行者	34	
20	備前焼	種付	律物1 (P5)	-	-	(4.5)	10R4/4赤褐	年代: 備前5c	82①	
21	土器部	壺	律物2 (P1)	-	-	1.2	10Y88/2暗白	備考: 回転台成形	38	
22	土器部	壺	律物2 (P2)	-	-	1.7	10Y88/4浅黃緑	備考: 14世紀同一直体	45②	
23	土器部	壺	律物2 (P7)	-	-	1.3	7.5V87/6緑	-	43	
24	土器部	壺	律物2 (P3)	-	-	1.3	10Y88/4浅黃緑	-	40②	
25	土器部	壺	律物2 (P6)	-	-	1.4	10Y87/4暗黃緑	-	40①	
26	備前焼	水屋甌	律物2 (P8)	-	-	(16.0)	10R3/1暗赤灰	年代: 備前5c	181	
27	土器部	壺	律物3 (P8)	8.8	6.9	1.5	2.5V87/3暗黃	-	39	
28	土器部	壺	律物3 (P1)	-	-	1.3	10Y87/3緑	-	44	
29	瓦質土器	種付	律物3 (P6)	35.0	-	(4.8)	2.5V86/6緑	備考: 被熱、30と同一鉄体	189	

遺物觀察表

馬鹿 番号	種別	器種	遺物名	古量(cm)			外面 色調	備考	整理 番号	
				口径	底径	器高				
30	瓦質土器	擂鉢	擂鉢	—	15.2	(2.5)	5YR7/6褐色	備考:20cm同一個体	190	
31	備前燒	甕	甕	—	(26.2)	(6.7)	7.5Y6/1灰	年代:東國4世纪	89	
32	青磁	甕	甕	14.4	—	(3.2)	10Y6/2オーリーブ灰	產地: 雜貝系／年代:無E/備考:被熱, 33 上田・鍋体?	139①	
33	青磁	甕	甕	(14.5)	—	(3.6)	10Y6/2オーリーブ灰	產地: 雜貝系／年代:無E/備考:被熱, 32 上田・鍋体?	139②	
34	青磁	甕	甕	—	—	(2.8)	7.5GY7/1銀綠灰	文様:円切彫溝状文 / 產地: 雜貝系／年 代: 混合	159	
35	青磁	甕	甕	(19)	—	(4.6)	10Y6/2オーリーブ灰	文様: 横縞(豆足) / 產地: 雜貝系／年代: 無Dorothy	148	
36	青磁	甕	甕	(19)	—	7.0	(2.9)	10Y6/2オーリーブ灰	文様: 横縞(豆足) / 產地: 雜貝系/ 燒考: 楊口目若	138
37	備前燒	擂鉢	柱穴式 (P1)	(29.2)	—	(8.0)	2.5YR6/4黃褐色	年代: 東國5世	88	
38	備前燒	擂鉢	柱穴式 (P1)	—	—	(5.5)	5YR6/3褐色	年代: 東國5世	84	
39	土師器	甕	土壤I	(12.2)	6.4	2.6	10YR8/2灰	備考: 近底へ少切り	13	
40	土師器	甕	土壤I	12.6	9.0	1.7	10YR7/3褐色	備考: 深紅着	55①	
41	土師器	甕	土壤I	—	—	1.4	10YR8/4浅黃褐	—	51	
42	土師器	甕	土壤I	—	—	(1.2)	10YR8/3褐色	—	55②	
43	備前燒	擂鉢	土壤I	—	—	(6.4)	5YR5/2灰褐色	年代: 東國5世	82②	
44	備前燒	擂鉢	土壤I	—	(17.2)	(5.4)	5YR6/4鐵褐色	年代: 東國4世	85	
45	備前燒	水呑甕	土壤I	—	—	(7.9)	N5/1灰	年代: 東國5世	182	
46	土師器	甕	土壤I	—	—	1.7	10YR8/4浅黃褐	備考: 被熱	46	
47	土師器	甕	土壤I	—	—	1.2	10YR7/2鐵黃褐	—	45①	
48	備前燒	水呑甕	土壤I	—	—	(6.8)	2.5YR3/1鐵赤灰	年代: 東國5世 / 備考: 被熱	90②	
49	備前燒	擂鉢	土壤I	(24.0)	—	(3.8)	7.5BC3/3褐色	年代: 東國5世	86	
50	備前燒	擂鉢	土壤I	—	—	(4.7)	5YR5/1青灰	年代: 東國6世	90①	
51	白磁	瓶	土壤I	—	—	(1.0)	5Y7/1灰白	—	127	
52	白磁	香炉	土壤I	—	—	(3.0)	2.5GY8/1灰白	—	115②	
53	青花	把手	土壤I	—	—	(4.6)	5GV1/1灰白	文様: 不明 / 產地: 長崎燒系	112	
54	青花	甕	土壤I	13.2	(7.4)	3.3	7.5SY8/2灰白	文様: 藤原文 / 花口繼續 / 產地: 長崎燒系 / 年代: 五代	187	
55	青花	甕	土壤I	(13.4)	(8.0)	(3.9)	10Y8/1灰白	文様: 庭園文 / 風景文 / 繼續 / 產地: 長崎燒 系 / 年代: 五代	110	
56	土師器	甕	土壤I	(12.6)	6.8	2.0	10YR4/1褐色	備考: 被熱	50	
57	土師器	甕	土壤I	7.2	5.0	1.5	10YR7/4鐵黃褐	—	47①	
58	土師器	甕	土壤I	—	—	1.5	10YR7/1灰白	—	47②	
59	瓦質土器	擂鉢	土壤I	—	—	(4.9)	10R6/6赤褐色	備考: 被熱	199	
60	備前燒	擂鉢	土壤I	—	—	(4.5)	N4/灰	年代: 東國6世	87	
61	青磁	甕	土壤I	—	—	(3.1)	10Y6/2オーリーブ灰	文様: 藤原文(外輪) / 產地: 雜貝系 / 備 考: 13世紀・鍋体?	140	
62	青磁	甕	土壤I	—	—	(1.4)	10Y5/1灰	產地: 雜貝系	147	
63	白磁	甕	土壤I	—	—	(1.5)	2.5Y8/1灰白	—	128	
64	白磁	甕	土壤I	(12.0)	6.6	3.1	5Y8/1灰白	年代: 五世	121	
65	土師器	甕	土壤I	—	—	(1.8)	2.5Y7/3淺黃	—	42②	
66	土師器	甕	土壤I	—	—	1.4	10YR8/3浅黃褐	—	42③	
67	瓦質土器	甕	土壤I	—	—	(2.4)	10YR6/3浅黃褐	—	42①	
68	土師器	甕	土壤I	12.8	7.6	2.3	10YR7/3褐色	備考: 深紅着	10	
69	土師器	甕	土壤I	13.4	7.3	2.5	10YR8/2灰白	備考: 近底へ少切り	68	
70	土師器	甕	土壤I	13.6	—	(2.0)	10YR8/3浅黃褐	備考: 深紅台成形	66	
71	備前燒	擂鉢	土壤I	—	—	(6.1)	5YR5/1青灰	年代: 東國5世	99	
72	青磁	甕	土壤I	—	—	(1.9)	5Y5/3オーリーブ	文様: 藤原文 / 產地: 雜貝系 / 年代: 慶C II / 備考: 20cm同一個體	129②	
73	瓦質土器	甕	土壤I	(14.4)	—	(7.4)	7.5Y6/2灰オーリーブ	產地: 不明	152	
74	土師器	甕	土壤I	10.0	6.4	1.8	7.5YR7/4鐵	備考: 被熱	2	

函藏番号	種別	器種	遺構名	法面(cm)			外面色調	備考	整理番号
				口径	底径	器高			
75	瓦質土器	大鉢	土壤Ⅳ	—	—	(9.0)	10YR4/1褐色	產地: 大和／年代: 方浅Ⅱ	304
76	青磁	碗	土壤Ⅳ	—	—	(3.9)	5Y5/4オリーブ	文様: 雲文・蓬生文 / 產地: 龍泉系／年代: 朝CB／備考: 72年同一個体	129①
77	青磁	盤	土壤Ⅳ	—	—	(2.0)	10G7/1褐色	產地: 龍泉系	129②
78	土師器	皿	溝2	13.2	8.4	2.4	10YR7/2褐色	備考: 底部へ少しきずり, 被熱	52①
79	土師器	皿	溝2	11.8	7.0	1.7	2.5Y7/3浅黃		53①
80	土師器	皿	溝2	—	—	1.4	10YR6/1褐色	備考: 保付着	54
81	土師器	皿	溝2	—	—	1.2	10YR7/4浅黃褐	備考: 被熱	52②
82	土師器	皿	溝2	—	—	1.7	10YR7/4褐色		53②
83	土師器	皿	溝3	11.0	7.0	2.8	2.5Y6/2灰黃	備考: 保付着	219
84	土師器	皿	溝3	8.8	4.0	1.8	7.5Y7/6褐色		33
85	土師器	皿	溝3	7.8	4.0	1.8	10YR8/4浅黃褐		35②
86	土師器	皿	溝3	6.0	5.6	1.3	2.5Y7/2褐色		37
87	土師器	皿	溝3	—	—	1.3	7.5Y7/6褐色		35①
88	瓦質土器	香炉or大鉢	溝3	—	—	(2.9)	2.5Y4/1灰黃	文様: 小型スタンプ文	203
89	備前焼	楕円	溝3	—	—	(5.7)	N5/灰	年代: 亜闇6	83
90	青磁	香炉	溝3	—	—	(1.0)	5GY6/4オリーブ灰	文様: 圓線文 / 產地: 龍泉系／備考: 138年同一個体	143
91	白磁	脚鉢	溝3	—	—	(2.0)	10YR1/1灰白	年代: 12C～13C頃	123
92	瀬戸美濃	天目碗	溝3	—	—	(2.7)	10YR2/1黒		149
93	土師器	皿	溝5	(12.8)	9.6	2.0	10YR8/3浅黃褐		65
94	土師器	皿	溝5	(12.2)	8.4	1.6	7.5YR8/3浅黃褐		62
95	土師器	皿	溝5	12.6	8.0	2.0	2.5Y7/2灰黃		69①
96	土師器	皿	溝5	13.0	7.0	2.0	10YR5/2灰黃褐	備考: 内面付着物	188
97	土師器	皿	溝5	—	—	1.9	2.5Y5/2褐色		67
98	土師器	皿	溝5	—	—	1.7	10YR7/3褐色		69②
99	瓦質土器	大鉢	溝5	—	—	(10.4)	7.5Y4/1灰	文様: 亂文文・蓬子文 / 產地: 大和／年代: 方浅Ⅱ	200
100	瓦質土器	鉢	溝5	—	—	(4.7)	10YR7/2褐色		196
101	備前焼	盃	溝5	—	17.0	(8.2)	5GY5/1青灰	年代: 亜闇6／備考: 保付着, 被熱	166
102	備前焼	楕円	溝5	30.4	14.6	12.5	10R4/4青灰	年代: 亜闇6a	103
103	備前焼	楕円	溝5	—	—	(4.0)	10R4/3青灰	年代: 亜闇6b	98
104	備前焼	楕円	溝5	—	12.0	(4.3)	10R3/3青灰	年代: 亜闇6	102
105	備前焼	水星雙	溝5	—	—	(6.4)	10R4/4青灰	年代: 亜闇5	183
106	白磁	碗	溝5	—	—	(2.8)	7.5Y7/1灰白	年代: 中後南北	114⑤
107	瀬戸美濃	天目碗	溝5	11.6	2.5	6.2	2.5Y2/1黒	年代: 大和 I	164
108	灰釉陶器	碗	溝5	—	—	(4.0)	7.5Y6/3オリーブ黄	產地: 不明	153
109	土師器	皿	土器だらり	8.2	6.0	1.9	2.5Y7/2灰黃	備考: 底部へ少しきずり	220
110	土師器	皿	土器だらり	7.6	0.4	(1.4)	5Y8/1灰白	備考: 底部へ少しきずり	211
111	土師器	皿	土器だらり	11.8	7.0	1.8	10YR7/2褐色	備考: 被熱	61①
112	土師器	皿	土器だらり	11.8	9.0	1.8	10YR7/3褐色	備考: 有鉄痕, 被熱	60
113	土師器	皿	土器だらり	10.9	6.6	2.2	2.5Y8/3褐色		59①
114	土師器	皿	土器だらり	11.6	9.5	1.7	2.5Y4/2褐色	備考: 保付着	58
115	土師器	皿	土器だらり	10.6	6.8	2.0	10YR7/2褐色	備考: 保付着	4
116	土師器	皿	土器だらり	9.7	7.0	1.8	10YR8/3褐色	備考: 保付着	56
117	土師器	皿	土器だらり	9.2	6.8	1.6	10YR7/4褐色	備考: 保付着, 被熱	1
118	土師器	皿	土器だらり	8.6	7.6	1.4	2.5Y8/3褐色		59②
119	土師器	皿	土器だらり	8.2	5.7	1.6	10YR7/3褐色		8

## 遺物觀察表

馬場 番号	種別	器種	遺物名	法量(cm)			外面 色調	備考	整理 番号
				口径	底径	器高			
120	土師器	瓶	土器だまり	8.0	9.2	1.5	10YR6/3浅黃緑	備考: 滾行着	37
121	土師器	瓶	土器だまり	—	—	2.3	2.5Y5/2暗灰黃		61③
122	瓦質土器	火鉢(香炉)	土器だまり	—	—	(6.1)	2.5Y2/1黒		205
123	瓦質土器	鉢	土器だまり	—	—	(5.0)	10R6/6赤橙	備考: 滾熱, 124と同一模体?	198
124	瓦質土器	鉢	土器だまり	14.0	9.0	5.3	2.5YR6/4尾緑	備考: 滾熱, 124と同一模体?	12
125	備前焼	壺	土器だまり	—	—	(5.6)	5W4/1青灰	年代: 備前5	72
126	備前焼	壺	土器だまり	—	—	(5.0)	5V5/1灰	年代: 備前6	76②
127	備前焼	水呑甕	土器だまり	24.0	—	(7.2)	2.5YR3/1暗赤灰	年代: 備前5	77
128	備前焼	水呑甕	土器だまり	—	—	(5.1)	2.5YR5/1茶灰	年代: 備前5	76①
129	備前焼	水呑甕	土器だまり	—	—	(9.6)	10R4/3暗赤灰	年代: 備前5	81①
130	備前焼	壺	土器だまり	11.4	—	(3.7)	7.5YR6/1楓灰	年代: 備前6	74
131	備前焼	壺	土器だまり	8.6	—	(4.9)	5YR4/1褐色	年代: 備前5	75
132	備前焼	楕鉢	土器だまり	—	—	(6.4)	5B5/1青灰	年代: 備前6a	71①
133	備前焼	楕鉢	土器だまり	—	—	(6.3)	5B4/1諸音灰	年代: 備前6a	71②
134	備前焼	楕鉢	土器だまり	29.6	—	(8.2)	5B5/1青灰	年代: 備前6a	78
135	青磁	碗	土器だまり	—	—	(2.0)	2.5GY5/1オリーブ灰	文様: 圓紋 / 產地: 龍泉系 / 年代: 無	144③
136	青磁	盤	土器だまり	—	—	(1.8)	7.5Y5/3灰サバーフ	產地: 龍泉系	145
137	青磁	盤	土器だまり	—	—	(3.4)	10Y6/1灰	産地: 龍泉系	146
138	青磁	香炉	土器だまり	5.4	—	(2.8)	5GY6/1オーブル灰	文様: 圓紋 / 產地: 龍泉系 / 備考: 50と同 鉢体	142
139	白磁	瓶	土器だまり	—	—	(1.9)	5Y8/1灰白	年代: 清D?	126
140	白磁	梅瓶?	土器だまり	—	—	(4.0)	7.5Y7/1灰白	文様: 牡丹・蓮印文	124
141	白磁	瓶	土器だまり	—	4.4	(2.1)	10Y8/1灰白		122
142	白磁	瓶?	土器だまり	—	(4.8)	(1.6)	NR/1灰白		120
143	哥釉陶器	壺	土器だまり	—	(12.0)	(7.6)	7.5YR2/2黒褐	產地: 中国南部 / 備考: 16世紀一模体	162
144	土師器	瓶	G1区(包含層)	14.6	9.4	3.2	10YR8/3浅黃緑	備考: 底部へ少凹口, 板目柄	11
145	土師器	瓶	G1区(包含層)	(13.2)	7.0	2.4	10YR8/2灰白	備考: 退路へ少凹口	212
146	土師器	瓶	G1区(包含層)	8.6	5.0	1.5	10YR7/1灰白	備考: 底部へ少凹口, 板目柄, 爪付有	20
147	土師器	瓶	G1区(包含層)	7.6	5.4	1.3	10YR8/2灰白	備考: 底部へ少凹口	32
148	土師器	瓶	G1区(包含層)	7.4	5.4	1.1	7.5YR7/6暗	備考: 底部へ少凹口	29
149	土師器	瓶	G1区(包含層)	6.4	5.0	0.9	10YR8/2灰白	備考: 底部へ少凹口	5
150	土師器	瓶	G1区(慢丸土)	—	—	2.2	SYR7/6暗	備考: 底部へ少凹口	31
151	土師器	瓶	G1区(包含層)	13.0	(8.0)	1.7	2.5YR3/3淡黃		63
152	土師器	瓶	G1区(包含層)	12.8	7.4	2.0	7.5YR7/4尾緑	備考: 滾行着	25
153	土師器	瓶	G1区(包含層)	12.0	(9.0)	1.4	10YR7/4暗黃緑		64
154	土師器	瓶	G1区(包含層)	(11.6)	8.5	1.6	10YR7/4尾緑		17
155	土師器	瓶	G1区(包含層)	10.2	6.8	1.5	10YR7/4尾緑	備考: 滾熱	18
156	土師器	瓶	G1区(包含層)	(10.0)	5.0	2.3	10YR7/4尾緑		21
157	土師器	瓶	G1区(包含層)	9.4	6.1	2.0	10YR8/3浅黃緑	備考: 滾行着	14
158	土師器	瓶	G1区(包含層)	9.2	5.2	2.0	10YR7/3浅黃緑		6
159	土師器	瓶	G1区(包含層)	9.2	5.8	1.7	10YR8/3浅黃緑		30
160	土師器	瓶	G1区(包含層)	9.0	5.1	2.1	7.5YR7/2尾緑	備考: 滾行着	7
161	土師器	瓶	G1区(包含層)	9.0	5.0	2.0	10YR8/4浅黃緑	備考: 滾行着	3
162	土師器	瓶	G1区(包含層)	9.0	5.2	2.0	7.5YR7/4尾緑		16
163	土師器	瓶	G1区(包含層)	8.0	2.6	1.4	7.5YR7/6暗		24①
164	土師器	瓶	G1区(包含層)	8.0	4.0	1.9	10YR8/3浅黃緑		27②

函藏番号	種別	器種	遺物名	法徳(cm)			表面色調	備考	整理番号
				口径	底径	器高			
165	土師器	壺	(1区包含層)	8.0	4.0	1.7	10YR7/4黄, 黄褐		28
166	土師器	壺	(1区包含層)	7.8	5.8	1.3	10YR8/4浅黃褐	備考: 繪付有	26
167	土師器	壺	(1区包含層)	7.6	4.9	1.5	7.5YR7/4黃褐		15
168	土師器	壺	(1区包含層)	7.8	5.0	1.6	7.5YR7/4黃褐	備考: 繪然	27①
169	土師器	壺	(1区包含層)	7.4	3.0	1.8	10YR7/3黃, 黃褐		9
170	土師器	壺	(1区包含層)	7.4	4.0	1.5	7.5YR7/4黃褐		19
171	土師器	壺	(1区包含層)	7.2	3.5	1.7	10YR7/3黃, 黃褐		22
172	土師器	壺	(1区包含層)	7.2	4.0	1.5	10YR7/3黃, 黃褐		23
173	土師器	壺	(1区包含層)	—	—	1.4	10YR7/3黃, 黃褐	備考: 繪付有	24②
174	土師器	壺	(1区)	—	—	1.3	10YR8/3浅黃褐		41
175	土師器	壺	(1区)(67)	—	—	1.0	10YR7/3黃, 黃褐	備考: 繪然	49
176	瓦質土器	甕	(1区包含層)	—	—	(8.3)	2.5W6/4黃灰	產地: 僧中南部	105
177	瓦質土器	甕	(1区)(No.31)	33.2	—	(7.9)	10YR7/4黃, 黃褐 10YR8/3浅黃褐	備考: 繪付有	106
178	瓦質土器	羽茎	(1区包含層)	—	—	(3.4)	5Y5/1灰	產地: 僧中南部	191
179	瓦質土器	甕	(1区)(No.39)	—	—	(3.7)	5Y5/1灰		192
180	瓦質土器	甕	(1区包含層)	—	—	(4.2)	5Y5/1灰		193
181	瓦質土器	甕	(1区包含層)	—	—	(3.3)	5Y8/2灰白		194
182	瓦質土器	甕	(1区包含層)	10.8	—	(6.4)	2.5W6/4黃, 黃 2.3W2/2黑		195
183	瓦質土器	大鉢	(1区包含層)	—	—	(4.0)	10YR4/1灰	年代: 汉I~S	197
184	瓦質土器	大鉢	(1区包含層)	—	—	(5.8)	N5/1灰	文様: 菊瓣文、蓮子文/年代: 方茂昌	201
185	瓦質土器	火鉢	(1区包含層)	—	—	(5.3)	N5/2黑	文様: 菊草文、花卷文	202
186	備前焼	楕琳	(1区包含層)	31.0	15.4	10.5	5YR4/3黃, 非織	年代: 亜國新	91
187	備前焼	楕琳	(1区包含層)	—	—	(4.8)	10R1/4步捲	年代: 亜國4b	92
188	備前焼	楕琳	(1区包含層)	—	—	(4.8)	7.5R4/1暗赤灰	年代: 亜國4b	94①
189	備前焼	楕琳	(1区包含層)	—	—	(4.4)	2.5W5/3黃, 非織	年代: 亜國3b	93
190	備前焼	楕琳	(1区包含層)	—	—	(4.9)	10R3/3暗赤灰	年代: 亜國5a	94②
191	備前焼	楕琳	(1区包含層)	—	—	(4.8)	10R4/3步捲	年代: 亜國5a	97
192	備前焼	甕	(1区)(No.36)	—	—	(9.2)	7.5M3/3暗赤灰	年代: 亜國5a	101
193	青磁	甕	(1区包含層)	—	—	(3.9)	10Y5/2オーラープ灰	文様: 蓼蓬弁文/產地: 龍泉系/年代: 遷	131
194	青磁	甕	(1区包含層)	—	—	(2.7)	2.5GY5/1オーラープ灰	文様: 莲弁文、蓮弁文/產地: 龍泉系/年代: 遷	132
195	青磁	甕	(1区包含層)	—	—	(3.2)	10Y7/1灰白	文様: 蓼蓬弁文/產地: 龍泉系/年代: 遷	130
196	青磁	甕	(1区包含層)	—	—	(3.7)	5GY6/1オーラープ灰	產地: 龍泉系/年代: 無D-II	133
197	青磁	甕	(1区包含層)	—	—	(3.3)	2.5GY7/1明オーラープ灰	產地: 龍泉系/年代: 無I	144②
198	青磁	不明	(1区包含層)	—	—	(2.0)	2.5GY6/1オーラープ灰	產地: 龍泉系	135
199	青磁	不明	(1区包含層)	—	—	(2.5)	5GY6/1オーラープ灰	產地: 龍泉系	144③
200	青磁	甕	(1区包含層)	—	—	(2.3)	10Y5/2オーラープ灰	文様: 櫛目(見込)/產地: 龍泉系	136
201	青磁	甕	(1区)	—	5.0	(2.5)	7.5Y4/2暗オーラープ	文様: 櫛目(見込)/產地: 龍泉系②/年代: 中世中期	137
202	白磁	甕	(1区包含層)	—	—	(3.2)	8Y7/1灰白	年代: 細IV	119①
203	白磁	甕	(1区包含層)	—	—	(3.6)	2.5Y7/2灰黃	文様: 圓線/年代: 細V	115④
204	白磁	甕	(1区包含層)	—	—	(2.3)	2.5Y7/2灰黃	文様: 印花(見込)	115⑤
205	白磁	甕	(1区包含層)	—	—	(2.8)	7.5W6/1灰白		119③
206	白磁	甕	(1区包含層)	—	(7.2)	(1.2)	10YR8/2灰白	年代: 細IV	118
207	白磁	甕?	(1区包含層)	—	—	(2.3)	10Y6/1灰白	文様: 圓線	118⑦
208	白磁	甕	(1区包含層)	8.4	—	(2.8)	2.5GY8/1灰白	年代: 15C末~16C初	116
209	白磁	甕	(1区包含層)	—	—	(2.9)	2.5GY8/1灰白		114③

遺物觀察表

器 藏 番 号	種別	器種	遺物名	法量(cm)			外面 色調	備考	整理 番号
				口径	底径	器高			
210	白磁	瓶	(IK)包含層	—	—	(1.8)	5YR7/1灰白	年代: 汉代	114②
211	白磁	杯	(IK)包含層	(7.4)	—	(2.6)	2.5GYR/1灰白	—	114①
212	白磁	杯	(IK)包含層	—	—	(2.1)	10YR8/1灰白	—	119②
213	白磁	梅瓶?	(IK)包含層	—	—	(2.9)	10YR8/1灰白	文様: 圓線／備考: 汪口部?	115③
214	白磁	碗?	(IK)包含層	—	—	(3.3)	2.5Y7/2灰黃	年代: 中賞前半	115④
215	青花	碗	(IK)	—	—	(3.1)	10GRT/1明灰灰	文様: 青花文・團線／地色: 黃斑模系／年代: 明代	113②
216	青花	碗	(IK)	—	—	(2.6)	2.5GYR/1灰白	文様: 青花文・團線／地色: 黃斑模系／年代: 明代	113③
217	青花	瓶	(IK)包含層	—	—	(2.0)	5GYR/1灰白	文様: 青花文・團線／地色: 黃斑模系／年代: 明代	113④
218	瀬戸美濃	天目碗	(IK)包含層	—	3.4	(5.1)	10YR3/4罐體	年代: 大瀬戸 I	151
219	瀬戸美濃	天目碗	(IK)包含層	(11.2)	—	(4.3)	10R2/1青黑	—	154
220	瀬戸美濃	碗	(IK)包含層	(6.8)	—	(2.6)	5Y7/2灰白	—	155
221	瀬戸美濃	碗	(IK)包含層	—	—	(3.0)	5Y7/4灰黃	文様: 細溝井文様／年代: 大瀬戸 I	158
222	瀬戸美濃	鉢皿	(IK)包含層	—	6.0	(1.3)	10YR3/1灰白	—	160
223	灰色陶器	壺	(IK)包含層	12.0	—	(5.9)	10R4/2灰黑	備考: 地色不明	186
224	肥前陶器	碗	(IK)包含層	—	3.0	(2.5)	5YR6/4鐵頭	年代: 肥前初	156
225	灰陶器	壺	(IK)	—	3.1	(1.3)	10YR8/2灰白	年代: 近世／備考: 墓中有	117
226	弥生土器	壺	土壠9	21.0	—	(24.8)	7.5YR6/6灰黑	備考: 上段出土	180①
227	弥生土器	壺	土壠9	13.6	5.9	23.3	10YR7/4鐵頭	備考: 上段出土	180②
228	弥生土器	壺	土壠9	17.8	5.9	27.2	7.5YR7/4鐵頭	備考: 上段出土, 煤付有	180③
229	弥生土器	壺	土壠9	13.4	3.2	13.5	10YR5/6黃黑 10YR6/6黃黑	備考: 上段出土	180④
230	弥生土器	壺	土壠9	—	7.7	(11.2)	10YR6/3鐵頭	備考: 上段出土	180⑤
231	弥生土器	壺	土壠9	—	—	(19.0)	10YR4/3鐵頭	備考: 上段出土	180⑥
232	弥生土器	壺	土壠9	18.0	7.8	35.5	2.5YR5/6明赤褐 2.5Y7/2灰黃	備考: 上下段出土, 鐵村痕跡	180⑦
233	弥生土器	壺	土壠9	18.8	—	(16.8)	5YR7/1黑 5YR2/1黑褐	備考: 下段出土, 234と同一個体	180⑧
234	弥生土器	壺	土壠9	—	7.1	(4.4)	10YR6/1泥灰	備考: 上段出土, 235と同一個体	180⑨
235	弥生土器	壺	(IK)包含層	17.0	—	(13.1)	10R6/6漆器	備考: 彩色顔料, 黑褐色砂出土, 236と同一個体	173
236	弥生土器	壺	(IK)包含層	—	8.2	(7.0)	10R6/6赤堀	備考: 陶行者, 黑褐色砂出土, 235と同一個体	177
237	弥生土器	壺	(IK)包含層	21.0	—	(7.7)	2.5YR5/8明赤褐	—	170
238	弥生土器	壺	(IK)包含層	(22.8)	—	(7.6)	2.5YR6/8漆	備考: 彩色顔料, 黑褐色砂出土	166
239	弥生土器	直口壺	(IK)包含層	10.5	—	(12.7)	2.5YR5/6明赤褐	備考: 黑褐色砂出土, 240と同一個体	174
240	弥生土器	直口壺	(IK)包含層	—	6.0	(4.5)	2.5YR5/6明赤褐	備考: 黑褐色砂出土, 239と同一個体	176
241	弥生土器	壺	(IK)包含層	15.5	—	(11.2)	7.5YR7/4鐵頭	—	176
242	弥生土器	壺	(IK)包含層	13.8	—	(9.0)	5YR6/6漆	備考: 黑褐色砂出土	171
243	弥生土器	壺	(IK)包含層	(16.1)	—	(9.0)	2.5Y5/2鐵頭	備考: 黑褐色砂出土	164
244	弥生土器	壺	(IK)包含層	(12.7)	—	(8.2)	10YR7/5鐵頭	備考: 陶行者, 黑褐色砂出土	163
245	弥生土器	壺	(IK)包含層	14.2	—	(5.5)	5YR7/6漆	—	169
246	弥生土器	壺	(IK)包含層	14.0	—	(5.4)	10YR6/1鐵頭	—	179②
247	弥生土器	壺	(IK)包含層	(14.6)	—	(4.0)	10YR7/2鐵頭	—	172
248	弥生土器	壺	(IK)包含層	13.8	—	(4.1)	2.5YR6/4鐵頭	—	179①
249	弥生土器	壺	(IK)包含層	—	6.0	(12.7)	10YR7/2鐵頭	—	175
250	弥生土器	壺	(IK)包含層	—	7.0	(9.0)	7.5YR7/2鐵頭	備考: 底面目板	168
251	弥生土器	壺	(IK)包含層	—	—	(8.5)	10YR7/3鐵頭	—	217
252	弥生土器	林	(IK)包含層	28.0	—	(5.5)	2.5Y6/3鐵頭	備考: 彩色顔料	165
253	弥生土器	器台	(IK)包含層	17.0	—	(4.7)	2.5Y6/3鐵頭	備考: 黑褐色砂出土	167

揭露番号	種類	器種	出土遺構名	法線(cm)			外面色調	備考	整理番号
				口径	底径	器高			
254	須恵器	环身	(II区包含層)	14.8	10.2	4.8	2.5V7/1灰白	年代:7C末	95
255	須恵器	环身	(II区包含層)	—	—	(4.3)	DF96/1青灰	年代:7C末	96
T1	青花	瓶	(確認済)	—	—	(3.0)	7.5G19/1明鏡灰	地點:阿波土居T1/文様:唐草?・團扇?・直竜?・垂葉?・葉筋?・年代:7C?	113
T3	白磁	瓶	(確認済)	—	—	(3.2)	10V8/1灰白	地點:阿波土居T3/年代:7C	125
T4	瓶	天目碗	(確認済)	—	3.0	(6.1)	7.5YR3/1黒灰	地點:阿波土居T4	150
牧	須恵器	环身	(確認済)	13.8	8.9	3.9	10V6/1灰	地點:牧土居T1/年代:7C末	221
牧	須恵器	長頸瓶	(確認済)	16.0	11.0	18.6	5GH5/1青灰	地點:牧土居T1/年代:7C末	222

## 土製品一覧

揭露番号	器種	出土遺構名	計測値(cm)			重量(g)	備考	整理番号
			最大長	最大幅	最大厚			
C1	土師	土壤I	(3.3)	1.4	1.2	5.67		309
C2	土師	(I区包含層)	6.4	2.1	1.8	21.77		208
C3	土師	(II区包含層)	5.5	1.8	1.9	17.15		79
C4	土師	(II区包含層)	2.2	(2.0)	(2.0)	3.64		206
C5	埴埴	(II区包含層)	8.2	3.0	—	33.99	銅スラグ付着	207

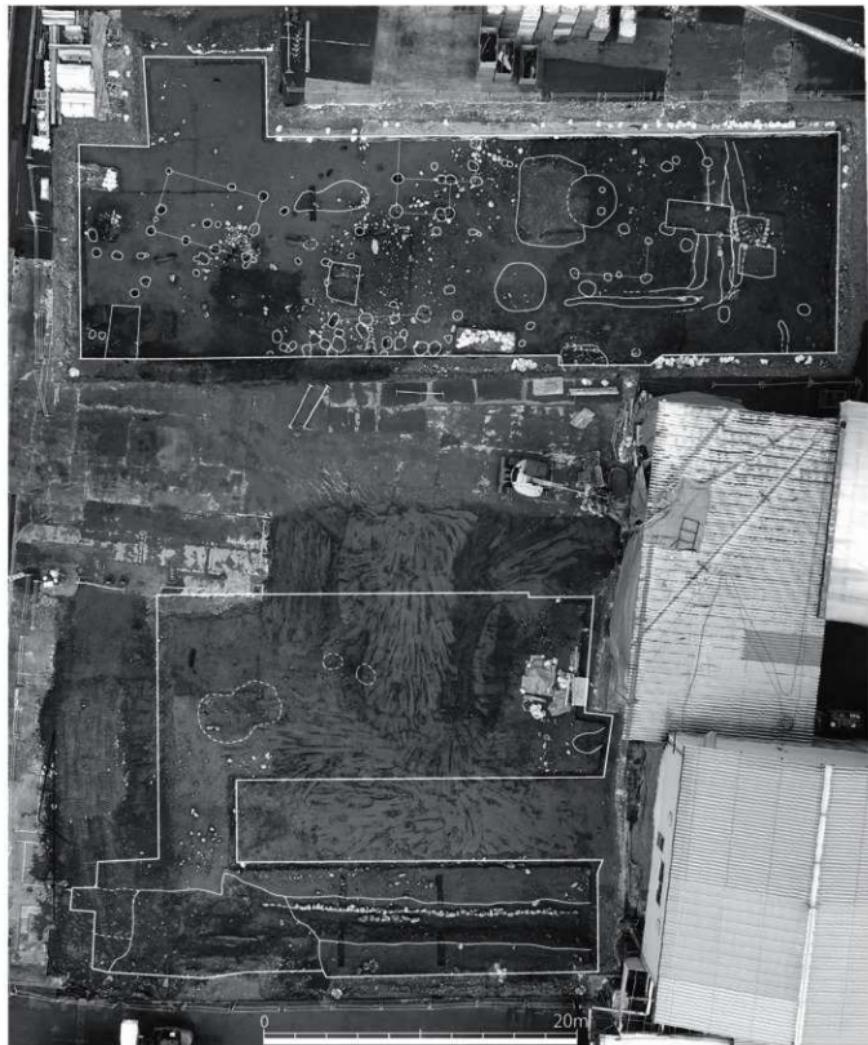
## 石器・石製品一覧

揭露番号	器種	出土遺構名	計測値(cm)			重量(g)	備考	整理番号
			最大長	最大幅	最大厚			
S1	不明石器	土壤3	3.5	2.5	1.2	15.22	石材:泥質	224
S2	鉢石	土壤3	7.8	5.5	3.8	36.85	石材:湖灰岩質	225
S3	砾石	(II区包含層)	(4.2)	3.5	0.6	19.17	石材:泥岩	226
S4	鉢石	(II区包含層)	(4.9)	5.0	1.5	31.17	石材:安山岩質	223
S5	砾石	複数遺構 (II区)	(17.4)	(25.2)	(7.1)	2,195	石材:花崗岩/複合:土壤2,3,土壤だらけ	227
S6	石臼	壤I	(8.5)	(20.0)	(13.1)	12,590	石材:安山岩	228

## 金属製品一覧

揭露番号	器種	出土遺構名	計測値(cm)			重量(g)	備考	整理番号
			最大長	最大幅	最大厚			
M1	鍔沿刃	縦立柱建物2 (I)	5.1	4.4	2.9	27.95		M1
M2	釘	縦立柱建物3 (I)	(9.2)	(8.7)	(0.6)	20.20		M2
M3	釘	縦立柱建物3 (I)	(4.5)	0.8	0.4	4.71		M3
M4	板状鉄片	土壤I	7.2	2.6	(0.5)	20.35		M4
M5	板状鉄片	土壤だらけ	6.7	(0.4)	(0.5)	5.38		M5
M6	釘?	(II区包含層)	(5.8)	2.8	0.7	19.91		M7
M7	棒状鉄片	(II区包含層)	6.7	0.6	0.4	11.63		M12
M8	火打鉗	(II区包含層)	9.6	3.4	(1.0)	43.83		M8
M9	小札	(II区包含層)	(4.0)	2.8	(0.7)	17.79		M9
M10	小札?	(II区包含層)	(5.1)	2.6	(0.4)	10.61		M10
M11	小札?	(II区包含層)	(6.3)	(2.8)	(0.4)	23.70		M11
M12	板状鉄片	(II区包含層)	(6.2)	2.5	0.1	11.77		M13
M13	鉗片	(II区包含層)	3.0	2.7	0.7	9.93		M14
M14	鋼鑽	土壤だらけ	2.2	1.4	0.6	4.72		M6
M15	鋼鉄	(II区包含層)	2.5	2.6	0.5	10.35	新道元室4枚重	M15
M16	鋼鉄	(II区包含層)	2.1	(2.0)	0.1	1.1	永樂通宝	M16





1 調査区全景

図版 2



1 据立柱建物 2

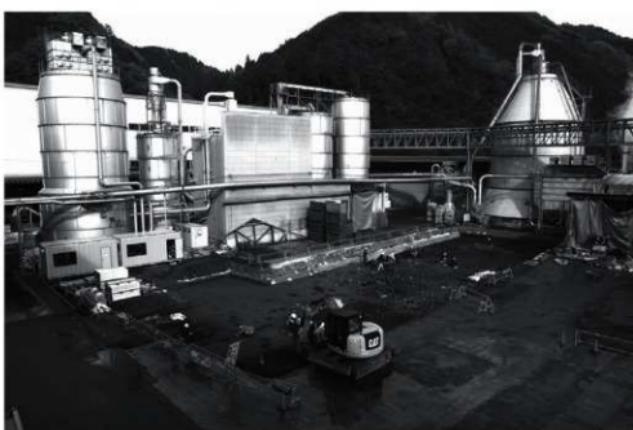
P3・4

(北から)



2 据立柱建物 3

(東から)



3 1区調査状況

(南西から)



1 土壌 1 碓除去前  
(南から)



2 土壌 1  
(南から)



3 土壌 2  
(東から)

図版 4



1 土壌 3

(北から)



2 土壌 6

(南西から)



3 現地説明会

開催状況

1 溝 1・3

(南東から)



2 溝 1・3断面

(北から)



3 溝 1・2・3

(北から)



図版 6



1 溝5

(南から)



2 溝5

(南東から)



3 溝5

(南西から)



1 溝 5 西端石積み

検出状況

(南東から)



2 溝 5 東端断面

(西から)



3 溝 5 石積み除去後

(東から)

図版 8



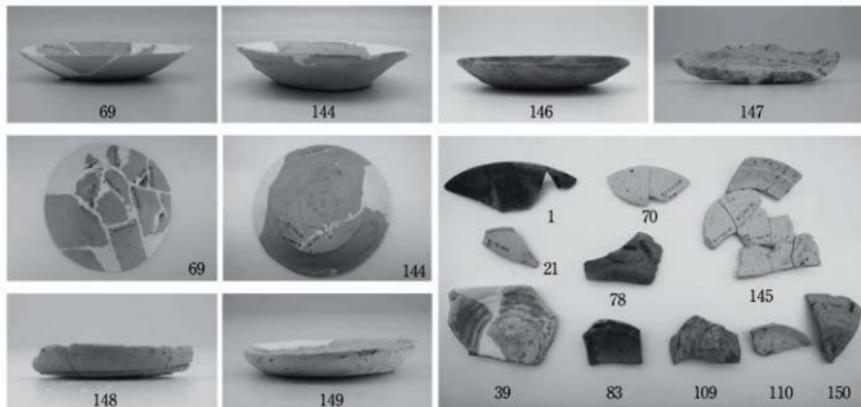
1 土器だまり  
(北から)



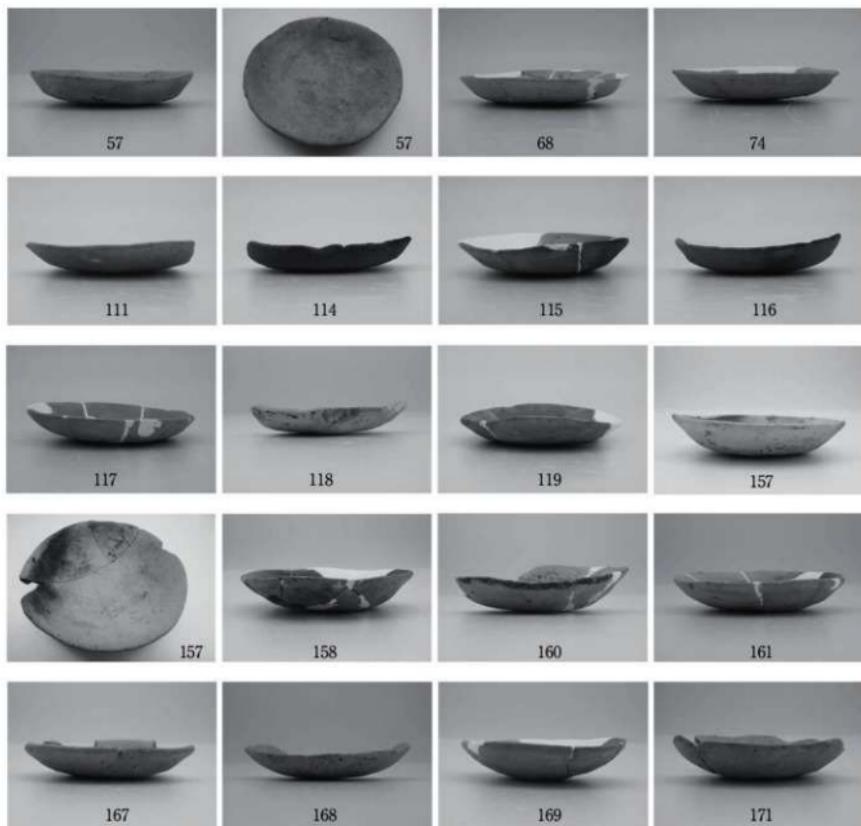
2 土器だまり  
備前焼出土状況  
(南から)



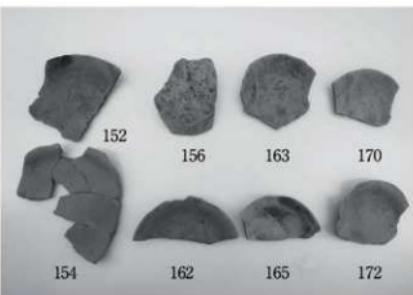
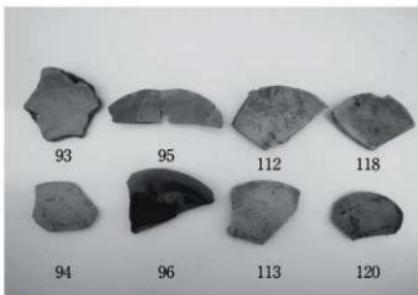
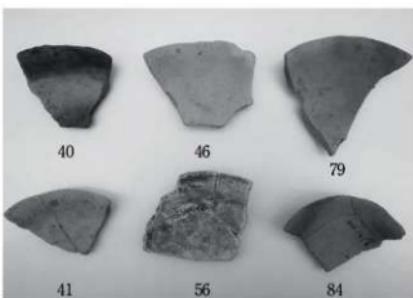
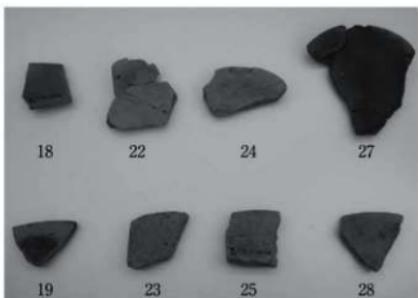
3 土壙 9  
(西から)



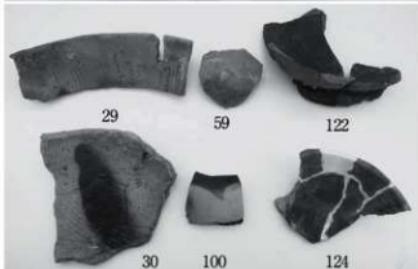
1 土師器（回転台成形）



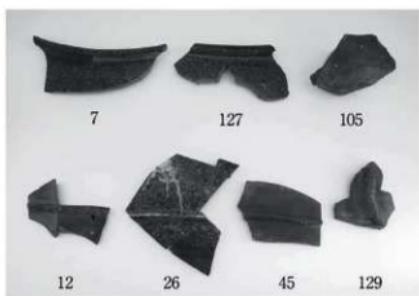
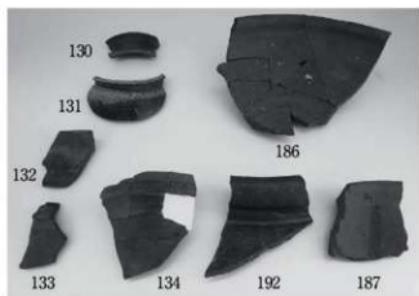
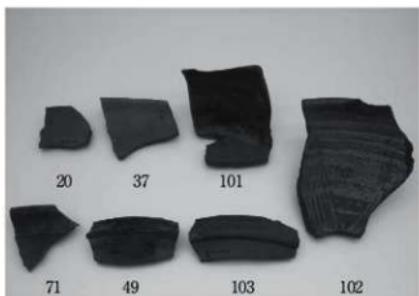
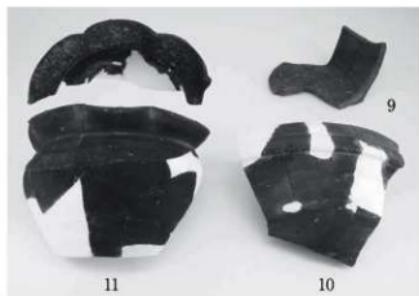
2 土師器（手づくね成形）



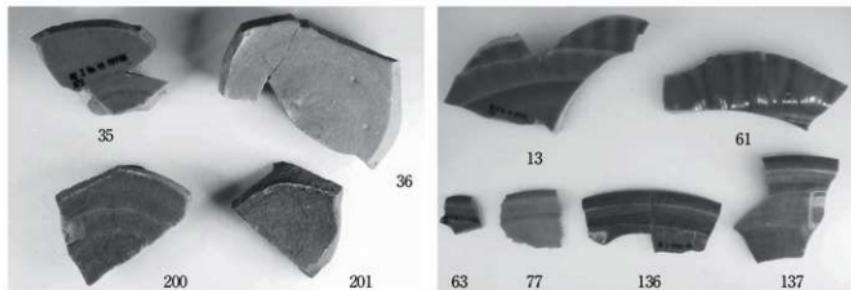
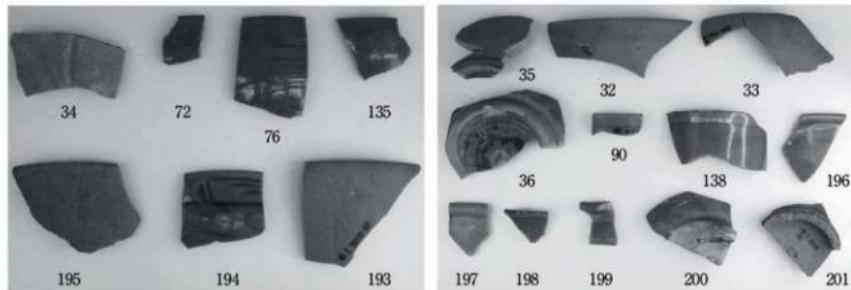
1 土師器（手づくね成形）



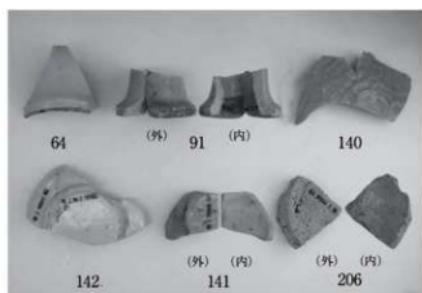
2 瓦質土器



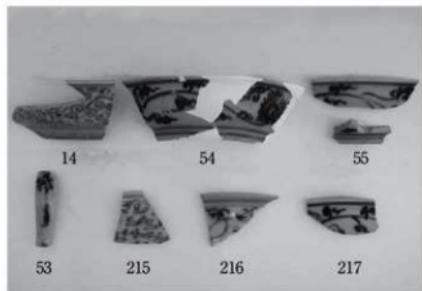
図版 12



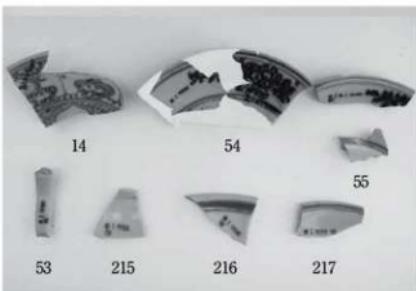
1 青磁



2 白磁

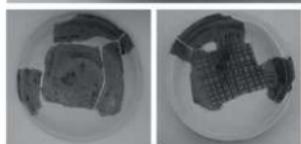


3 青花





15



(左: 外面)

(右: 内面)



1 濑戸美濃・その他陶磁器

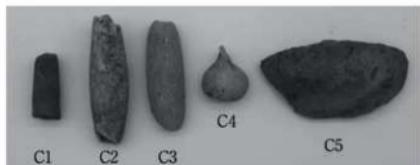


107

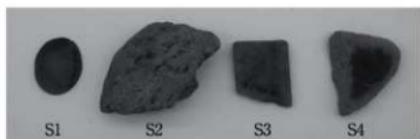


(左: 外面)

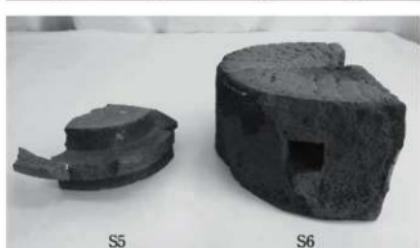
(右: 内面)



2 土製品



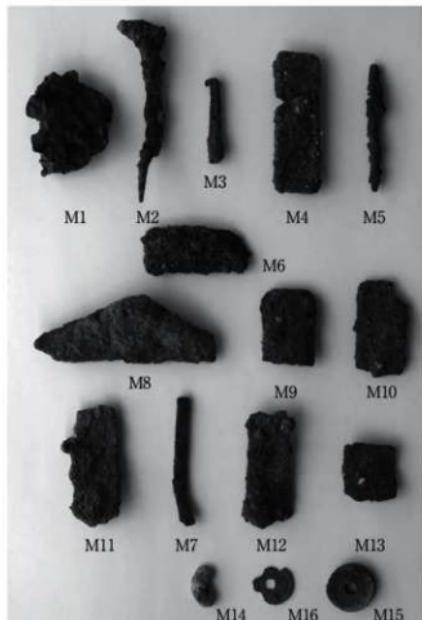
S1



S5

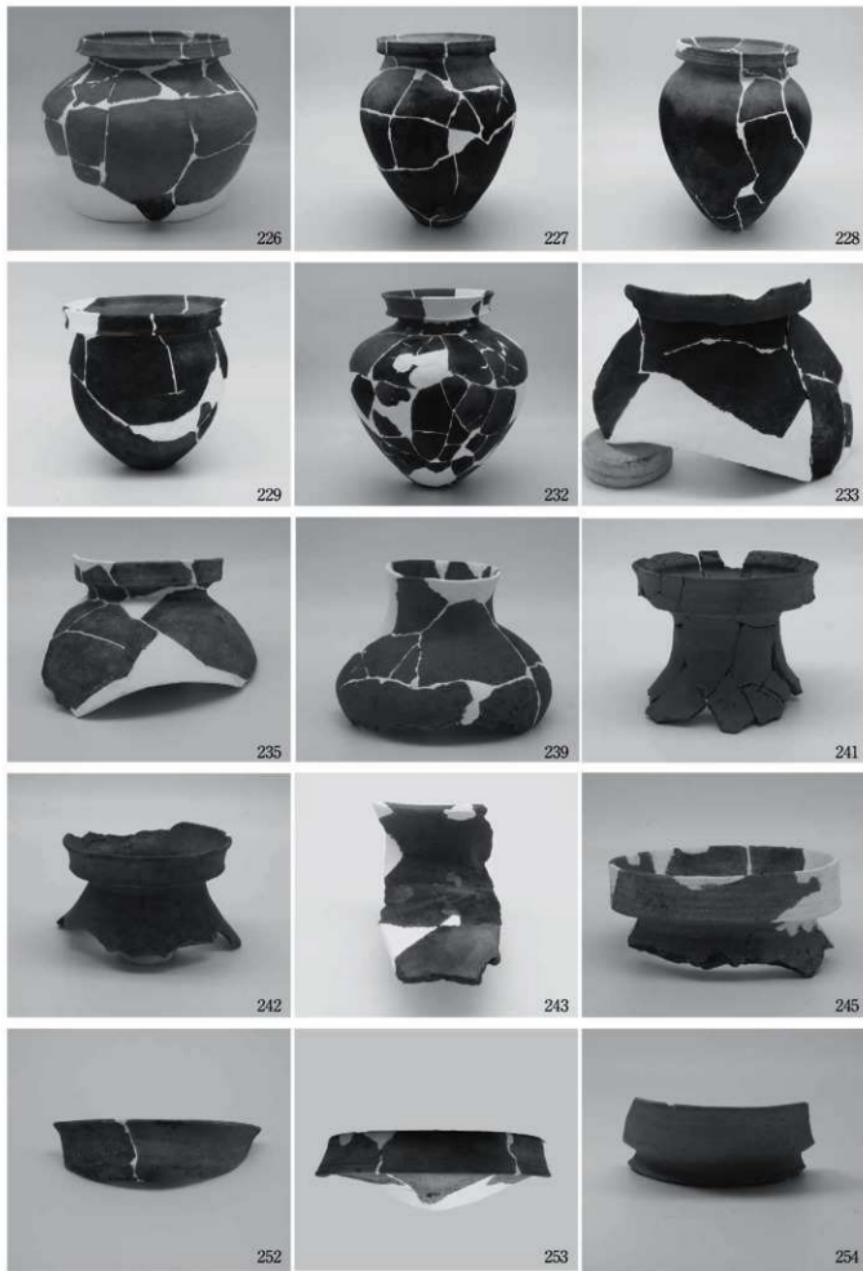
S6

3 石器・石製品



4 金属製品

図版 14



## 報 告 書 抄 錄

## 阿波土居跡

銘建工業本社工場エコ発電所 2号機  
建設工事に伴う発掘調査

令和3年（2021年）3月発行

編集・発行 真庭市教育委員会

〒719 - 3292

岡山県真庭市久世 297 - 2

Tel: 0867 - 42 - 1094

印 刷 富岡印刷株式会社

